

# FD

平成30年度

北海道医療大学 FD研修報告書

〈基本編・テーマ編〉

学生を中心とした  
教育をすすめるために

北海道医療大学 全学FD委員会



## 目 次

---

### <基本編>

#### 北海道医療大学全学FD研修

学生を中心とした教育をすすめるために

-北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える-

はじめに	1
実施概要（趣旨など）	2
参加者名簿	4
学長講話	17
「医療系総合大学教員としての使命と目標 -新医療人育成の北の拠点を目指して-」 学長 浅香 正博	
レクチャー	29
「シラバス（授業計画）について」 講師：看護福祉学部 志渡 晃一	
ワークショップ（プロダクトと感想）	
Aグループ	41
Bグループ	43
Cグループ	45
Dグループ	46
参加者感想	49
総合評価	61
FD委員感想	69
アルバム	75

<テーマ編>

北海道医療大学全学FD研修

学生を中心とした教育をすすめるために

-多職種連携をすすめるための教育の構築-

はじめに	81
実施概要（趣旨など）	82
参加者名簿	84
学長講話	93
「北海道医療大学がめざす多職種連携教育について」	
学長 浅香 正博	
話題提供	103
「各学部における多職種連携教育の取り組み」	
薬学部	浜上 尚也
歯学部	長澤 敏行
看護福祉学部	大友 芳恵
心理科学部	安部 博史
リハビリテーション科学部	吉田 晋
ワークショップ・グループ名簿	129
WS1：オリエンテーション	
WS2：アイスブレイキング	
WS3：ワークショップのすすめ方	
「多職種連携のアドバンス教育科目をつくる」	
プロダクトと感想	
Aグループ	139
Bグループ	141
Cグループ	145
Dグループ	148
Eグループ	151

FD委員感想	157
アンケート	165
アルバム	171



# 全学FD研修〔基本編〕

「学生を中心とした  
教育をすすめるために」

-北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティ  
について考える-

期 日：平成30年4月7日（土）

会 場：札幌サテライトキャンパス





## はじめに

全学FD委員長 千葉 逸朗

平成30年4月7日に札幌サテライトキャンパスにて、例年の通り「全学FD研修会〈基本編〉」が開催されました。今回は、「学生を中心とした教育を進めるために～北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える～」と題して、大学の売りをアピールする方法などについて考えて頂くことと致しました。このFD研修は特に本学に新たに赴任された教職員の方々が、自主性、創造性を発揮して教育力を高めて頂くのが目的です。そのために、アドミッションポリシー（入学者受入方針）を理解して頂き、それに沿って大学のイメージを外部にアピールすることによって組織の活性化を図るのがユニバーシティ・アイデンティティです。今回の研修ではまず、浅香学長の講話の中でこの2つの言葉を参加者に理解して頂くことから始まりました。午後からは各学部の新任の先生でグループを作り、ワークショップ形式で討論して頂きました。学部の違う先生方が集まって、果たしてどのような討論になるのか不安を感じておりましたが、あまり外部から押し付けることなく、自由な発想で議論して頂きました。アイスブレイキングの段階から和気あいあいに話が進み、思いの外盛り上がったような気が致しました。ワークショップは何度も行っておりましたが、今回はアイスブレイキングの重要性を再認識致しました。ただの自己紹介ではなく、ご自身をアピールし、人に印象付けさせるという手法がその後のワークショップの進行に大きく影響していたと感じました。

今回のFD研修会がFD委員長として最後の場となりました。FD委員の先生方には大変お世話になりました。きちんとご挨拶する場がありませんでしたので、ここで改めて皆様に心より感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

## 平成 30 年度 全学 F D 研修<基本編>

メインテーマ：「学生を中心とした教育をすすめるために」

\*サブテーマ：北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える

主 催：北海道医療大学全学 F D 委員会

日 時：平成 30 年 4 月 7 日（土） 10：00～16：30(予定)

会 場：札幌サテライトキャンパス 講義室 A・B

参加者：平成 29 年度中途採用教員：10 名・平成 30 年 4 月 1 日付 新規採用教員：15 名 計 25 名

[別紙参照]

FD 委員長： 歯学部：千葉教授

FD 委員等： 薬学部：遠藤（泰）教授 歯学部：溝口教授 看護福祉学部：志渡教授、福井講師

心理科学部：西澤教授 リハビリテーション科学部：山口教授

大学教育開発センター：鈴木(一)教授、薄井教授 歯科衛生士専門学校：杉原専任教員

事務担当：学務部 高見学務部長、笠原学務部次長、細川 I R 課員

講 師：浅香学長

### 【趣旨】

本学の教職員一人ひとりが自主性・創造性を発揮することにより「学生中心の教育」並びに「患者中心の医療」を推進しつつ、「21 世紀の新しい健康科学の構築」を追究することが本学の行動指針である。

その実現のために FD 研修会を開催し、教職員の自覚を促すとともに「教育力」を高めることを本研修会の趣旨とする。

### 【目標】

\*一般目標：GIO

- ・アドミッション・ポリシーに沿って本学の特長を提示して学生の入学を促すとともに、時代や社会のニーズにあった医療人の育成のための教育手法を構築する。

\*行動目標：SBO s

1. 学修者中心の教育を説明する。
2. 学修者のレディネスを説明する。
3. 教育者の役割を説明する。
4. ユニバーシティ・アイデンティティについて説明する。
5. 医療・福祉の専門職として学生教育を実践する。

### 【研修形態】

- 1) 能動的体験型研修とする。
  - 2) 肩書なしの対等な意見交換をする。
  - 3) 建設的な意見交換から建設的対応策を生み出す。
-

## スケジュール概要

9:30	受付開始	
9:40	FD委員集合	
9:50	参加者集合	
10:00	開会	
10:00-10:10	《オリエンテーション》 ・研修の意義と進行内容の紹介	【進行：山口委員】 《千葉委員長》
10:10-11:00	《講話》 *医療系総合大学教員としての使命と目標 - 新医療人育成の北の拠点を目指して -	【進行：山口委員】 《浅香学長》
11:05-11:35	《レクチャー》 *シラバス（授業計画）について	【進行：山口委員】 《志渡委員》
11:35-11:45	集合写真撮影	
11:45-12:30	昼食・休憩	
12:30-12:45	《全学FD委員の自己紹介》	【進行：山口委員】
12:45-13:25	《グループづくり》 *アイスブレイキング（参加者自己紹介） *役割分担（リーダー・記録・発表） *グループ名の決定	《千葉委員長》
13:25-13:30	休憩	
13:30-15:20	《ワークショップ》 *ワークショップのすすめ方 *グループ討論（100分） 「北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える」	【進行：山口委員】 《西澤委員》
15:20-15:30	休憩	
15:30-16:00	発表（発表5分・質疑応答2分×4グループ）	
16:00-16:25	全体討論	【進行：山口委員】
16:25-16:30	アンケート記入・修了証授与	
16:30	閉会	

平成30年度 全学FD研修<基本編(新任教員等)> 参加者名簿

[敬称略]

職名	氏名	所属講座等	グループ	
<b>薬学部</b>				
助手	森 宏	モリ ヒロシ	分子生命科学 (免疫微生物学)	A
助手	遠藤 朋子	エンドウ トモコ	薬理学 (薬理学)	B
<b>歯学部</b>				
教授	照光 真	テルミツ マコト	生体機能・病態学系 (歯科麻酔学)	A
教授	志茂 剛	シモ ツヨシ	生体機能・病態学系 (組織再建口腔外科学)	B
助教	竹田 洋輔	タケダ ヨウスケ	口腔機能修復・再建学系 (咬合再建補綴学)	D
助教	原田 文也	ハラダ フミヤ	生体機能・病態学系 (顎顔面口腔外科学)	C
<b>看護福祉学部</b>				
准教授	常田 美和	ツネタ ミワ	看護学科 (母子看護学：母性看護学)	D
講師	山田 佳緒里	ヤマダ カオリ	看護学科 (臨床看護学：感染看護学)	C
助教	増田 悠佑	マズダ ユウスケ	看護学科 (地域保健看護学：地域看護学)	A
助教	三津橋 梨絵	ミツハシ リエ	看護学科 (臨床看護学)	B
助教	新見 千穂	ニミミ ホ	看護学科 (実践基礎看護学)	D
助教	米川 弘樹	ヨネガワ ヒロキ	看護学科 (実践基礎看護学)	C
助教	片山 寛信	カタヤマ ヒロノブ	臨床福祉学科 (社会福祉学)	A
<b>心理科学部</b>				
助教	西郷 達雄	サイゴウ タツオ	臨床心理学科	A
助教	関口 真有	セキグチ ム	臨床心理学科	B
助教	河村 麻果	カムラ マカ	臨床心理学科	C
<b>リハビリテーション科学部</b>				
講師	西出 真也	ニシデ シンヤ	大学教育開発センター：生物学	B
助教	高倉 祐樹	タカクラ ユウキ	言語聴覚療法学科	D
<b>認定看護師研修センター</b>				
専任教員	森 真紀	モリ マキ	認知症看護分野	D
専任教員	早坂 史子	ハヤサカ フミコ	認知症看護分野	C
<b>新規開設学部</b>				
教授	幸村 近	コウムラ ナカツ		D
教授	松尾 淳司	マツオ ジュンジ		C
講師	江本 美穂	エモト ミホ		A
講師	近藤 啓	コンドウ ケイ		B
講師	高橋 祐輔	タカハシ ユウスケ		D

参加者計 25

講師(1)	学長	浅香 正博
FD委員長(1)	歯学部	千葉 逸朗
FD委員(10)	薬学部	遠藤 泰
	歯学部	溝口 到
	看護福祉学部	志渡 晃一・福井 純子
	心理科学部	西澤 典子
	リハビリテーション科学部	山口 明彦
	大学教育開発センター	鈴木 一郎・薄井 明
	歯科衛生士専門学校	杉原 佳奈
事務担当(3)	学務部	高見 裕勝・笠原 晴生・細川 洋美

## 全学FD研修（基本編） グループ編成

グループ（名称）	氏 名 【所属学部等】			
A  ( )  6 名	照光 真 【歯】	テルミツ マコト	片山 寛信 【看福・福】	カタヤマ ヒロノブ
	江本 美穂 【新学部】	エモト ミハ	西郷 達雄 【心】	サイゴウ タツオ
	増田 悠佑 【看福・看】	マスタウ ユスケ	森 宏 【薬】	モリ ヒロシ
B  ( )  6 名	志茂 剛 【歯】	シモ ツヨシ	三津橋 梨絵 【看福・看】	ミツハシ リエ
	西出 真也 【リハ・教開C】	ニシデ シンヤ	関口 真有 【心】	セキグチ マユ
	近藤 啓 【新学部】	コンドウ ケイ	遠藤 朋子 【薬】	エントウ トモコ
C  ( )  6 名	松尾 淳司 【新学部】	マツオ ジュンジ	米川 弘樹 【看福・看】	ヨネカワ ヒロキ
	山田 佳緒里 【看福・看】	ヤマダ カオリ	河村 麻果 【心】	カワムラ アサカ
	原田 文也 【歯】	ハラダ フミヤ	早坂 史子 【認看C】	ハヤサカ フミコ
D  ( )  7 名	幸村 近 【新学部】	コウムラ ナカツ	新見 千穂 【看福・看】	ニミ チカ
	常田 美和 【看福・看】	ツネタ ミワ	高倉 祐樹 【リハ・言】	タカクラ ユキ
	高橋 祐輔 【新学部】	タカハシ ユスケ	森 真紀 【認看C】	モリ マキ
	竹田 洋輔 【歯学部】	タケタ ヨスケ		

### グループの役割分担

- 【リーダー】 WS作業の進行をリード、ゴールを把握、進行スケジュールをデザインして、きめられた時間までに作業が完了するようにメンバーをリードする。
- 【記録係①】 作業進行に出てきた内容をメモ・記録し、プロダクト作成作業に役立てる。
- 【記録係②】 WSのプロダクトとなる発表内容を討論により修正された内容もいれて記録・作成して、FD報告書用の完成プロダクトの資料とする。（代表者として下記へ提出）
- 【発表者】 WSでのプロダクトを発表する。
- 【発表資料作成】 メンバーが協力して作成する。

### 報告書・ニュースレター等 原稿

- ① グループプロダクト      グループ発表資料
- ② 参加者感想（全員）      400字以内（ワード形式、フォント10.5、A4縦標準サイズ）
- ③ FD委員感想（全員）      400字以内（同様）
- ④ アンケート集計          事務局（学務部教務企画課）      提出期限：4月27日（金）  
提出先：学務部教務企画課      Fd-kensyu@hoku-iryo-u.ac.jp



## 平成30年度 全学FD研修 〈基本編〉

### 学生を中心とした教育を 進めるために

北海道医療大学のユニバーシティ・  
アイデンティティについて考える



主催：全学FD委員会



平成30年4月7日（土） 札幌サテライトキャンパス

## 平成30年度 全学FD研修 〈基本編〉

# 「開会式」



全学FD委員会

## 研修会開催の趣旨

### 研修会開催の趣旨

本学の教職員一人ひとりが自主性・創造性を発揮することにより「学生中心の教育」並びに「患者中心の医療」を推進しつつ、「21世紀の新しい健康科学の構築」を追究することが本学の行動指針である。

その実現のためにFD研修会を開催し、教職員の自覚を促すとともに「教育力」を高めることを本研修会の趣旨とする。

### 研修のテーマと学習目標

テーマ：北海道医療大学の  
ユニバーシティ・アイデンティティについて考える

一般目標G I O：

アドミッション・ポリシーに沿って本学の特長を提示して学生の入学を促すとともに、時代や社会のニーズにあった医療人の育成のための教育手法を構築する

### 研修のテーマと学習目標

行動目標SBOs

1. 学修者中心の教育を説明する。
2. 学修者のレディネスを説明する。
3. 教育者の役割を説明する。
4. ユニバーシティ・アイデンティティについて説明する。
5. 医療の専門職として学生教育を実践する。

# 研修会スケジュール

## 研修会スケジュール

9:40	FD委員集合	
9:50	参加者集合	全体進行/山口委員
10:00	開会、オリエンテーション (スケジュール説明、テーマ説明、WSの進め方ほか)	千葉委員長
10:10	講話:「医療系総合大学教員としての使命と目標-新医療人育成の北の拠点を目指して-」	浅香 正博 学長
11:05	レクチャー:シラバス (授業計画について)	志渡委員
11:35	集合写真撮影	
11:45	昼 食・休 憩	
12:30	全学FD委員の自己紹介 (1分×11)	進行/山口委員
12:45	グループ作り、アイスブレイキング (参加者自己紹介)、役割分担 (リーダー、記録、発表)、グループ名	千葉委員長
13:25	休 憩	
13:30	ワークショップの進め方 ワークショップ 「北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える」 グループ対論 100分	西澤委員
15:20	休 憩	
15:30	発 表	
16:00	全体対論	
16:25	アンケート提出・修了証授与	
16:30	閉会	

# 研修会スタッフ

## 研修会スタッフ

学長	浅香 正博	北海道医療大学	学長
FD委員長	千葉 逸朗	北海道医療大学	歯学部教授
FD委員	遠藤 泰	北海道医療大学	薬学部教授
	満口 到	北海道医療大学	歯学部教授
	志渡 晃一	北海道医療大学	看護福祉学部教授
	福井 純子	北海道医療大学	看護福祉学部講師
	西澤 典子	北海道医療大学	心理科学部教授 (リハビリテーション科学部兼任)
	山口 明彦	北海道医療大学	リハビリテーション科学部教授
	鈴木 一郎	北海道医療大学	大学教育開発センター教授
	薄井 明	北海道医療大学	大学教育開発センター教授
	杉原 佳奈	北海道医療大学	歯科衛生士専門学校専任教員
事務局	高見 裕勝	北海道医療大学	学務部長
	笠原 晴生	北海道医療大学	学務部次長
	細川 洋美	北海道医療大学	IR課

# 研修会参加者

## 平成30年度FD研修 参加者名簿


薬学部				心理科学部			
助手	森 宏	免疫微生物学	A	助教	西郷達雄	臨床心理学科	A
助手	遠藤朋子	薬理学	B	助教	関口真有	臨床心理学科	B
歯学部				助教	河村麻果	臨床心理学科	C
教授	照光 真	歯科麻酔学	A	リハビリテーション科学部			
教授	志茂 剛	組織再建口腔外科学	B	講師	西出真也	生物学	B
助教	竹田洋輔	咬合再建補綴学	D	助教	高倉祐樹	言語聴覚療法学科	D
助教	原田文也	顎顔面口腔外科学	C	認定看護師研修センター			
看護福祉学部				専任教員	森 真紀	認知症看護分野	D
准教授	常田美和	母子看護学	D	専任教員	早坂史子	認知症看護分野	C
講師	山田佳緒里	臨床看護学	C	新規開設学部			
助教	増田悠佑	地域保健看護学	A	教授	幸村 近		D
助教	三津橋梨絵	臨床看護学	B	教授	松尾淳司		C
助教	新見千穂	実践基礎看護学	D	講師	江本美穂		A
助教	米川弘樹	実践基礎看護学	C	講師	近藤 啓		B
助教	片山寛信	社会福祉学	A	講師	高橋祐輔		D



## 参加者のグループ分け

A	B	C	D
照光 真	志茂 剛	松尾淳司	幸村 近
江本美穂	西出真也	山田佳緒里	常田美和
増田悠佑	近藤 啓	原田文也	高橋祐輔
片山寛信	三津橋梨絵	米川弘樹	竹田洋輔
西郷達雄	関口真有	河村麻果	新見千穂
森 宏	遠藤朋子	早坂史子	高倉祐樹
			森 真紀
グループ担当タスクフォース			
福井・杉原	西澤・溝口	薄井・志渡	鈴木・遠藤

## 言葉の説明



### アドミッション・ポリシー

#### 入学者 受入方針

- アドミッション・ポリシーに盛り込むべきポイント
  - ①各大学の強み、特色や社会的な役割を踏まえつつ、大学教育を通してどのような力を発展・向上させるのか。
  - ②入学者に求める能力は何か。
  - ③入学者選抜において、高等学校までに培ってきたどのような力を、どのように評価するのか。  
(どのような要素に比重を置くのか、どのような評価方法を活用するのかなど)

文部科学省高等教育局大学振興課大学入試室資料より

### ユニバーシティ・アイデンティティ

「大学がイメージの統一を図り、その組織の存在を人々に印象付けて組織の内外ともに活性化を図るための行為」

ビジュアル・アイデンティティ (VI) : 大学が社会に送り出すあらゆるもの(研究・教育に関する情報と人、サービス、設備、広告、校章に至るまで)をシンボルやデザインによって統一性や計画的多様性を持たせる

マインド・アイデンティティ (MI) : 新たな教育理念の確認・確立、目標設定、長期的戦略計画の立案、内部資源の再評価・再編成などが行われる

ビヘイビア・アイデンティティ (BI) : 大学の理念、機能、役割を社会に向かって明確に示し、その存在理由を主張し、社会と組織内部の支持と理解を求める

その結果を踏まえた外部への情報発信を中心とするコミュニケーション活動で、実態とイメージの一体化をはかる統合された組織行動

日経広告研究所1994:17-18

## 講話

北海道医療大学 学長



### 浅香 正博

医療系総合大学教員としての使命と目標  
-新医療人育成の北の拠点を目指して-

## レクチャー

### 「シラバス（授業計画）について」

志渡 晃一  
北海道医療大学 看護福祉学部教授

集合写真を撮ります！



## 昼食・休憩

お茶とお弁当があります。



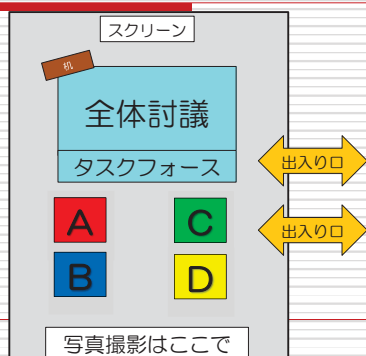
次のワークショップの開始 **12:30**  
(時間厳守)

**12:25** までに、  
お集まりください。

平成30年度 全学FD研修(基本編)  
平成30年4月7日(土) 札幌サテライトキャンパス  
主催: 全学FD委員会

グループの場所にお座り下さい。

・お茶はお一人1本です。  
・お菓子は自由にご活用下さい。



## セッションの流れ

進行/山口委員

12:30-12:45 全学FD委員の自己紹介  
(1分×11)

12:45-13:25 グループづくり  
アイスブレイキング(参加者自己紹介)  
役割分担、グループ名

13:25-13:30 休憩

13:30-15:20 ワークショップ

...

## 作業解説



## アイスブレイキング

担当/千葉委員長

アイスブレイキングとは、初対面の人同士が出会う時、その緊張(アイス)をとほぐす(ブレイキング)ための手法。

集まった人を和ませ、コミュニケーションをとりやすい雰囲気を作り、そこに集まった目的の達成に積極的に関わってもらえるよう働きかける技術を指す。

アイスブレイクは自己紹介をしたり、簡単なゲームをしたりすることが多く、いくつかのワークやゲームの活動時間全体を指すこともある。

(Wikipedia)

## ウソ?ホント?①

グループ単位で行います。  
配布したシートに、自分の所属学部・氏名と、自分について知ってもらいたいことを3つ記入して下さい。  
ただし、3つのうちの一つは全くのウソを書き入れて下さい。(3分)

(例) わたしはとてもきれい好きです。  
わたしは辛い食べ物苦手です。  
わたしは15歳までハワイに住んでいました。

あまりシリアスなウソは避けましょう。

## ウソ?ホント?②

グループ内で一人ずつ自分の書いたものについて発表します。

他のメンバーは3つの中からウソだと思う内容を考えながら話を聞きます。その後自由に質問をして下さい(2分)。

講師が合図をしたら、メンバーはどれがウソだと思ったか話して下さい。全員の意見を聞き終わったら、発表者はどれがウソだったのはを話します(2分)

一人ずつ順番に行います。

それでは今から3分間、自己紹介用シートを書く時間です。

発表順を決めましょう。

「自己紹介と質問タイム」です。こちらで合図をしたら始めて下さい(2分間)。

「正解タイム」に入りましょう。メンバー全員の意見を聞いたら、本人は正解を言って下さい。それではどうぞ!(2分間)

「ウソ?ホント?」の前と後で、メンバーの関係を比べてみましょう。

お互いの関係は変化しましたか?

# 休憩



ワークショップの開始 **13:30**

(時間厳守)

**13:28** までに、  
当会場へお集まりください。

13:30

# ワークショップ解説

## ワークショップのすすめ方

担当/西澤委員

質問です。

ワークショップは初めて？

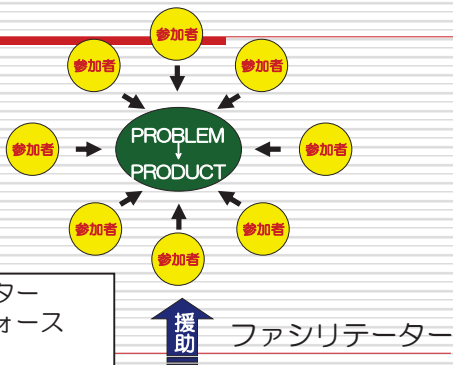


## ワークショップ



- 多人数を対象として参加者1人1人の参画意識を高めるために、小グループに分かれて討論と作業を行い、結論を出していく方式をいう。
- 一定の時間内にある成果(プロダクト)を生み出すという手段をとる。

## ワークショップとは？



## ワークショップの流れ

1. プレナリーセッション  
全体 : 課題提示・作業解説
2. スモールグループディスカッション  
グループ : 課題について討論・プロダクト作成
3. プレゼンテーション  
全体 : 発表・討論

## ワークショップの要件

1. 全てのメンバーが積極的な参加者になる
2. 参加者全員が Resource Person
3. 積極的に建設的、前向きな意見を述べる
4. どんな質問でも無意味ではない
5. あらかじめ決まった正解はない
6. 先生はいない
7. 開始時刻、発表時間を守る



イラスト: 富士研WSスライドより



## 役割

- 司会
  - グループ討論時の司会進行を行う。
- 書記・PC入力
  - グループ討論時の書記（PC入力）を行う（プロダクト作成）
  - 作成したプロダクトはUSBに保存する。
- 発表者
  - 全体発表時にグループプロダクトの発表を行う。

---

- タスクフォース（TF）
  - グループ討論が効率的に討論・作業が進むように、サポートをする。
  - グループ討論のタイムキーパーも行う

役割分担をご確認ください。

セッション	司会	書記・PC	発表者
1	●●	▲▲	■■
2	■■	●●	▲▲
3	▲▲	■■	●●



**ワークショップ：北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える**

**作業：大学をアピールできる材料を作成する**

- 高校生、あるいは新規入学者に、本学のユニバーシティ・アイデンティティとなるものを提示する。
- 本学のアドミッション・ポリシーについてわかりやすく説明する。
- 本学の良さ、特長をアピールする。

**ワークショップ：北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える**

媒体はなんでも構いません。  
ポスター、ホームページ、パンフレットなど

大学のユニバーシティ・アイデンティティをアピールするために、自分は何をするのか、何をすべきなのかを考えて下さい。

---

記録は、USBのファイル（ワード）に

ワークショップ:北海道医療大学の  
ユニバーシティ・アイデンティティについて考える

グループ討論 (SGD) 100分

休憩 15:20~15:30

全体発表 (15:30~16:00)  
30分 (発表5分、質疑2分  
× 4グループ)

全体討論 25分

休憩



グループ発表の開始: **15:30**

(時間厳守)

**15:28** までに、  
当会場へお集まりください。

グループ発表

ワークショップ:北海道医療大学の  
ユニバーシティ・アイデンティティについて考える

全体発表 (15:30~16:00)  
30分 (発表5分、質疑2分  
× 4グループ)

全体討論 25分

アンケート

研修の評価  
(総合ポストアンケート)

皆さんの感想をお聞かせください。  
書き終わった方は、手を上げてください。

平成30年度 全学FD研修  
(基本編)

「閉会式」

修了証授与



全学FD委員会

## 講 話

医療系総合大学教員としての使命と目標

- 新医療人育成の北の拠点を目指して -







### 本学の沿革

学校法人東日本学園設立(1974)

2019年度には、医療技術学部として臨床検査学科が設置される予定である。  
これにより北海道医療大学は6学部9学科を有する日本でも有数の規模の医療系大学となる。

歯学部附属歯科衛生士専門学校 (1984)

健康科学研究所 (2002)

大学教育開発センター (2007)

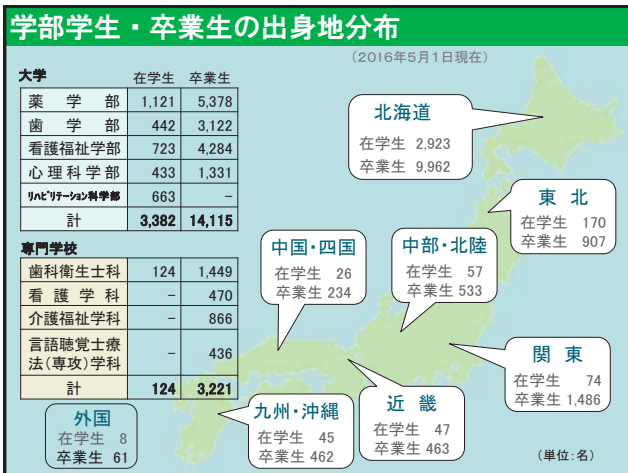
リハビリテーション科学部 (2013)

### 学生数・教員数

(2016年5月1日現在)

	学部	大学院	教員	教員1人あたり学部学生数
薬学部	1,121	11	69	16.2
歯学部	442	45	106	4.2
看護福祉学部	723	69	70	10.8
心理科学部	433	28	16	17.3
リハビリテーション科学部	663	14	52	15.8
<b>学部計</b>	<b>3,382</b>	<b>167</b>	<b>313</b>	<b>10.8</b>
個体差医療科学センター				
個体差健康科学研究所	—		15	
認定看護師研修センター				
客員教授			27	
臨床助手・任期制助手			107	
歯学部附属歯科衛生士専門学校	124	—	5	
<b>合計</b>	<b>3,673</b>		<b>467</b>	

全国私立大学 教員一人当たり学部学生数 平均19.9名 (2016学校基本調査)



- ### 本学における学生教育への対応
- 1 **教育の質の向上と、教育内容・方法の充実**  
 ●2007年4月 大学教育の総合的検討・立案・実行する「大学教育開発センター」設置
  - 2 **教員の自己評価と学生の評価**  
 ●教員評価制度(2007年から実施)と評価結果の利用  
 ●学生による授業アンケート(1993年度から実施)
  - 3 **大学間の協調と連携**
  - 4 **充実した学生生活の確保**  
 ●Student Campus Presidents (SCP)の導入(2008年度から実施)  
 ●語学・文化研修(カナダ アルバータ大学)

## 本学の三方針

### 入学受入れの方針(アドミッション・ポリシー)

1. 協調性や基礎的コミュニケーション能力を有していること。
2. 入学後の修学に必要な基礎的学力を有していること。
3. 生命を尊重し、他者を大切に思う心があること。
4. 保健・医療・福祉に関心があり、地域社会ならびに人類の幸福に貢献するという目的意識を持っていること。
5. 生涯にわたって学習を継続し、自己を磨く意欲を持っていること。

### 教育課程編成・実施の方針(カリキュラム・ポリシー)

「全学教育科目」と各学部・学科の「専門教育科目」からなる学士課程教育を組んでいます。

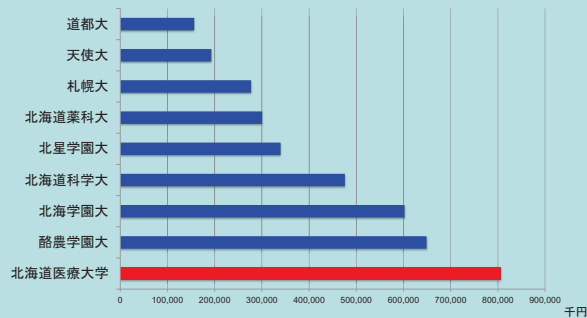
### 学位授与の方針(ディプロマ・ポリシー)

各学部・学科の教育理念・目標に沿った学士課程の授業科目を履修し、保健・医療・福祉の高度化・専門化に対応する高い技術と知識を身につけ、かつ各学部が定める履修上の要件を満たした学生に対して「学士」の学位を授与します。

## 大学経費の問題

- ・ ヨーロッパの高等教育機関はほとんどが国(州)立
- ・ アメリカでも約75%が州立
- ・ 日本は80%が私立(世界の中で特異)であり学納金への依存性が先進諸国のなかで例外的に高い
- ・ 学納金に見合った大学側の対応が必要(学生中心の教育)
- ・ 私立大学の収入の大半は授業料であることを忘れてはいけない。
- ・ 国から配分される運営費交付金は10億円に満たない。
- ・ 国立大学は、東大810億円、京大541億円、北海道大363億円と桁違いに多い。北海道教育大は65億円、旭川医大でも54億円給付されている。

## 道内私立大学経常費補助金 (平成27年度)



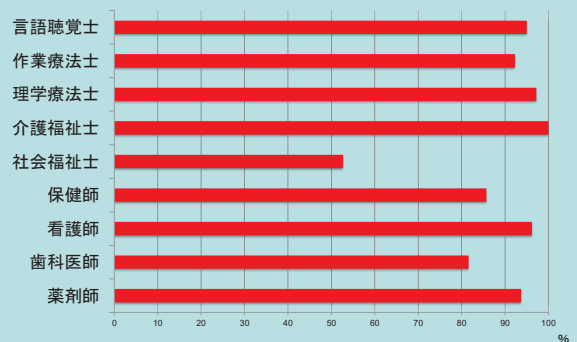
## 安定した経営を維持するためには

- ・ 授業料収入の増加または安定化が第一。
- ・ そのためには、定員割れがあってはいけない。
- ・ 定員割れをなくすためには多くの人が受験してくれなくてはならない。
- ・ 多くの人が受験してくれるためには、魅力的な大学にしなければいけない。
- ・ 北海道からのみ学生が受験してくれるだけではなく、全国から来てくれるのが理想である。
- ・ 魅力的な大学にするために何をすべきかを教員の方々は考えてほしい。

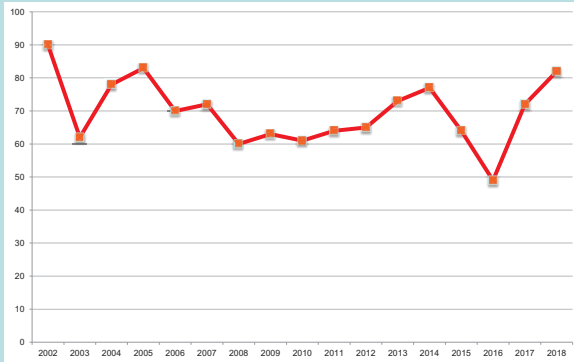
## 国家試験の合格率を上げる

- ・ 入り口対策
  - 入試の際、優秀な学生を集める。
  - 医療大学のブランド性を上昇させる。
  - 国試の合格率が高い。
  - 特別な教育体制を構築する。
  - 北海道だけでなく、全国から受験生を集める。
- ・ 出口対策
  - 国試対策をきめ細かく行う。短期間合宿など。
  - 優秀大学の教育システムを学び応用する。
  - 魅力的な授業を行う。

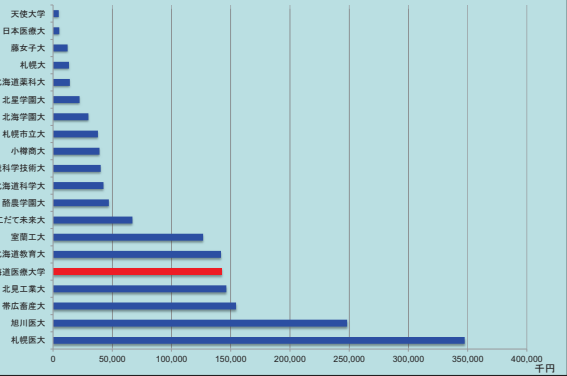
## 本学の国家試験合格率 2018年



北海道医療大学  
歯科医師国家試験合格率の推移



平成27年度科学研究費採択状況  
(北大を除く道内大学)



進学目的・入学後の学習意欲

進学動機

<b>将来目標型</b>	48%
一般教養を身につけたい	11%
専門知識を学びたい	57%
学問・研究による真理探究	19%
<b>近未来目標型</b>	35%
資格免許取得、就職に有利な学歴	51%
	12%
<b>楽しみ・無目的型</b>	18%
とくに目的はない	12%
青春をエンジョイ	12%
スポーツ・文化活動	4%
友人を得る	4%

大学に入って学習意欲が高まったか?

高まった	13%
かなり高まった	3%
低くなった	37%
かなり低くなった	21%
わからない	26%

提案 1

・ 学生が教職員と接する機会を増やす

集団の中の一人として見なされるよりも、個人として見なされるときの方が、学生は大学や授業に対する帰属意識や学習に対する責任感を強く持つ傾向があります。

- 窓口に学生が来たらすすんで声をかける
- 学生の名前をできるだけ覚えるようにする
- 学生が立ち寄りやすい環境をととのえる
- 講演会など学内のイベントに積極的に加わらせる
- 学生や職員が集う会に、一緒に参加する
- キャンパスの構成員として積極的に学園祭に参加する

提案 2

・ 学生間で協力して行う学習を支援する

仲間と協力して行う学習は、学習の意欲を高め、学習効果も高いといわれています。教室内外で学生が他の学生とともに学習活動することができるように環境を整備しましょう。

- 学生がグループで学習できる場所と利用方法を把握し、アドバイスする
- 大学に現れなくなった学生に気付いたら、他の学生にさり気なく様子を尋ねてみる
- 身近な学生による学習サークルを支援する
- 普段から学内の教職員と連携し、さらに学外の教職員とも情報交換をする場をもつ

提案 3

・ 学生の主体的な学習を支援する

大学教育においては、主体的に学習する姿勢を身につけさせることが重要です。様々な教室外活動も学生の主体的な学習活動の貴重な機会になります。こうした自主的な機会を持つことで、自立性、目的意識、倫理観などが培われます。

- 各種研究会、ボランティア活動などの情報を積極的に学生に伝える
- 学生から個別に受けた質問に適切に対処すると共に、普遍性の高いものについては、ガイダンスなどでの情報提供に活用する
- 窓口での対応などを通じて、学生に社会人・医療人としてのマナーを教える

## 提案 4

### • 学習の進み具合をふりかえらせる

学生にとって学習目標に到達しているかどうかを確認することは、その後の学習を進める上で重要です。様々な方法で、学生の進捗状況を把握する機会を作り、学生にフィードバックする仕組みをつくしましょう。

単位取得状況の確認について、学生に自覚をうながす  
学生の学習歴がわかるような資料を他の教員に提供する  
学習に関する調査結果の反映方法について検討する  
調査・分析方法に関する基本的な知識を習得する

## 提案 5

### • 学習に専念する時間を大切にさせる

時間を有効に活用することが、学生の学習成果を左右する重要な要素となります。効果的な学習時間の使い方を出来るだけ早く実につけさせるようにしましょう。

情報は要点を整理して提供する

公開研究会、休講情報などをカウンターの上などに貼り出すだけでなく、ネットや携帯電話で知らせる

授業時間外の学習に利用可能な学内施設の活用を促す

業務の進め方の事例集を作成して、職員間でも共有する

## 提案 6

### • 学生に高い期待をよせる

学生は期待されているとわかっただら、学ぶ意欲を高め、結果として学習効果は向上する可能性があります。  
大学の構成員にふさわしい態度や行動を学生に求めましょう。

学生の勉学意欲や課外活動の努力に対し、応援の言葉をかける  
学生の社会活動をサポートする  
卒業生の活躍を積極的に学生に紹介する  
学外の協力者に対する礼儀を学生に求める

## 提案 7

### • 学生の多様性を尊重する

大学は様々な学習スタイルや属性をもった学生を受け入れることで活力を生んでいます。こうした多様性を尊重することが求められます。個々の学生に対応する場合は、多様な立場を考慮しましょう。

窓口では個々の学生のおかれている立場や経験を考慮する

学生が抱える問題のないように応じて適切な機関や専門家を紹介する

留学生との異文化交流を希望する学生には、関連するプログラムやサークルなどを紹介する

社会人学生などの要望に対応できるように手続きや連絡方法を工夫する

様々な機会を捉えて、現在の学生の特徴や多様性を理解する

## 北海道医療大学国際化に関する基本方針

平成 28 年 8 月 30 日制定

### 国際化の意義

本学は開学以来、「知育・徳育・体育」の三位一体による医療人としての全人格の完成を目指した教育を建学の理念として、北海道内最大規模の医療系総合大学として人間性豊かな職業人を養成し、地域社会に貢献してきた。さらに、近年積極的に海外の教育研究機関等との研究者・留学生等の受け入れを含め多様な学術交流関係を築いているところである。

世界における急速な人口の増加、特に高齢者数の増加等は、わが国のみならず各国で保健・医療・福祉等の対応においてきわめて大きな課題となっている。したがって本学は、国際社会と協調して人々の健康と安全とよりよい生活のために優れた人材養成を目指して教育研究の国際交流を促進するとともに、地域のみならず国際的にも貢献できることが期待されることである。

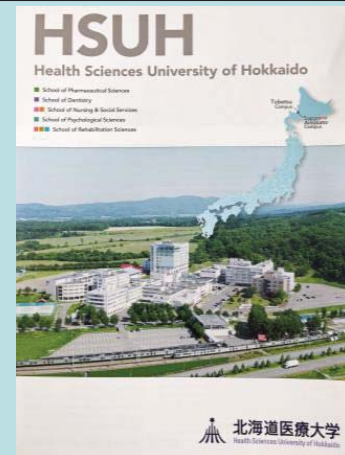
今後の急速なグローバル化も視野に、本学の一層の国際化の方針を以下の通り定める。

### 国際化に向けた指針

1. 海外からの研究者・留学生に対する教育・研究環境整備
2. 研究者・留学生との交流の促進
3. 地域を含めた異文化交流の機会醸成
4. 外国語教育の充実

### 国際化の施策

1. 留学生の受入の促進と受入環境の整備



## 医学、医療とは？

- 病気があって**医学**が生まれ、**病人のために医療**がある。
- **医学**とは学問のことであり、病気の種類や治療法などを研究したり学んだりすることである。それに対して、**医療**は実際に患者に対して施す治療のことを指す。
- **医学**は科学である。しかし、**医療**は科学ではなくアートである。

## ヒポクラテスの誓い(抜粋)

- 私は能力と判断の限り患者に利益すると思う養生法をとり、悪くて有害と知る方法を決してとらない
- 頼まれても死に導くような薬を与えない。
- 同様に婦人を流産に導く道具を与えない。
- いかなる患家を訪れる時もそれはただ病者を益するためであり、あらゆる勝手な戯れや墮落の行いを避ける。女と男、自由人と奴隷の違いを考慮しない。
- 医に関すると否とにかかわらず他人の生活について秘密を守る。

## 日本の医療の特徴

- 世界一の長寿国であり、乳児死亡率も世界一低い。
- 医療の質が高い。
- 医療費が安い。・・・国民皆保険制度のおかげ
- アクセスが自由である。・・・大学病院にも紹介状なしでかかれる。
- 先進國中、総医療費(対GDP比)は最も低い。

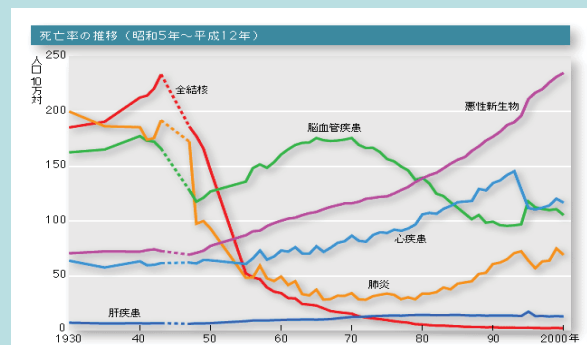
## 医療提供体制のわが国の現状

- ベッド数は多く、在院日数が長い。  
出来高払いでは機能していたが、DPCでは収入減が必至。
- ベッドあたりの医師数、看護師数が極端に少ない。
- 欧米の病院に比して、患者の管理に十分なマンパワーが不足している。
- 医師中心で医療チームがしっかりと作られていなかった。

## 学生に健康を守ることの大切さを教える

- 医療人になるためには健康の重要性をしっかりと認識する必要がある。そうでなければ他人の健康を守ることはできない。
- 学生生活を健康に過ごせるよういくつかのアドバイスが必要。
- バランスの取れた食生活、適度な運動、十分な睡眠が重要。
- 喫煙は絶対に止めよう。

## 日本における死亡原因の推移



1. 悪性新生物(癌)が第一の原因となっており、増加しつつある。
2. 3大死因である癌、心疾患、脳血管障害で、60%以上を占める。

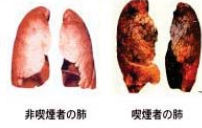
## 喫煙とがん

およそ60種類の発がん物質が含まれている。

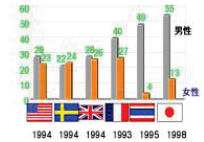
- がんの単一で最大の原因は喫煙である(がんの発生は非喫煙者の1.5倍増加する)。
- がん死亡の約25%は喫煙と関連している。
- 肺がん死亡の約70%(男性)は喫煙が原因である。

## 肺癌の発生

あなたの肺はどちらですか？



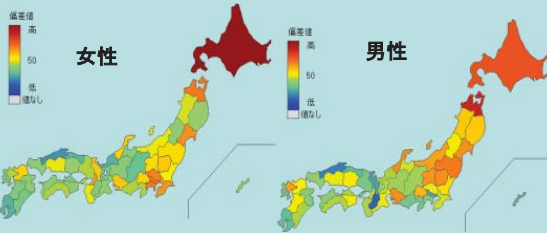
世界の喫煙率



肺癌は治りにくいがんの代表であり、その原因の第一番目には喫煙が考えられている。上右の図にあるように喫煙者の肺は黒く汚れている。

日本では他の先進国と比べて男性の喫煙率が高いのが特徴。女性の喫煙率は他の国と比較して低いですが、最近若い女性の喫煙率が増加している。

## 各都道府県別喫煙率

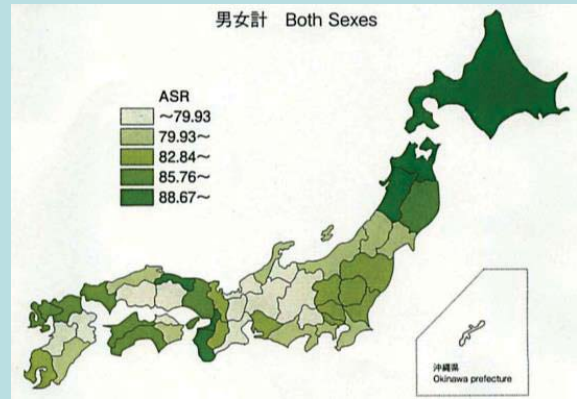


喫煙率に関して北海道が女性で一番、男性で2番(青森が一番)。

## 都道府県別75歳未満がん年齢調整死亡率(2010年)

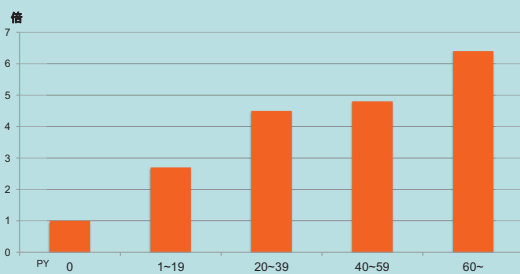
全がん All Cancers

75歳未満年齢調整死亡率(人口10万人対)



## 喫煙指数と肺がん発生率の相対リスク

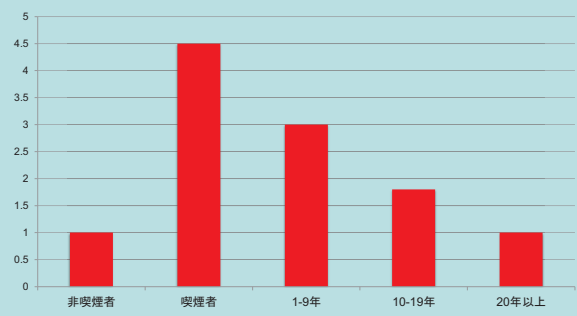
Sobue T et al. Int J Cancer 99:245,2002



喫煙指数PY=1日の喫煙箱数X喫煙年数: 男性

## 禁煙年数と肺がん発生リスク

Sobue T et al. Int J Cancer 99:245,2002



禁煙年数



## 北海道医療大学生における禁煙教育の重要性

- 北海道医療大学の学生には医療人としての自覚を持ってもらい、喫煙を自粛してほしい。
- 禁煙を勧めるだけでなく、受動喫煙の危険性を説明できるだけの知識を持ってほしい。
- 喫煙ほど身体をむしばむものはないことをしっかりと認識してほしい。
- **本学の分煙施設は3月末を持って廃止した。**



## 教職員の健康を守るために

- 北海道医療大学の保健センターは教職員の健康を守ります。
- 月曜日から金曜日まで毎日内科の医師が診療しています。
- 水曜日は心の健康についての診療を受けることができます。
- けがや骨折にも対応できます。
- 入院が必要な場合はすぐ対応できます。
- これだけの機能を持った保健センターは北海道医療大学のみです。



ご静聴ありがとうございました





《 ㄨ ㄉ 》



# レクチャー

シラバス（授業計画）について

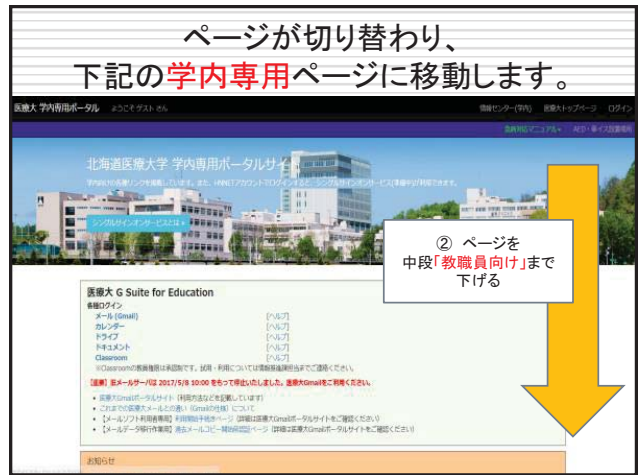
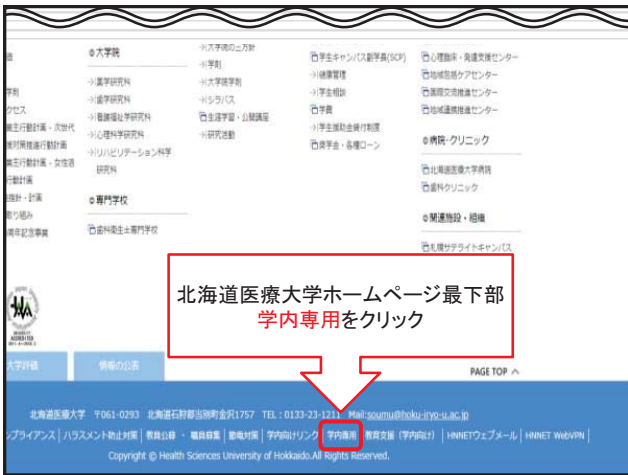
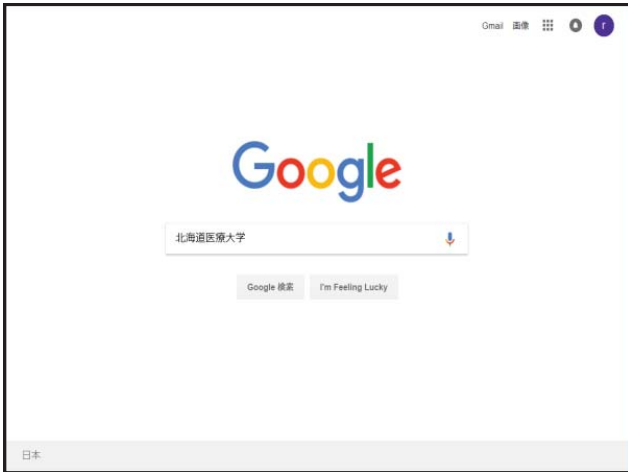


# レクチャー

## 「シラバス（授業計画）について」

志渡 晃一  
北海道医療大学 看護福祉学部教授

# FD支援サイトのご案内



教職員向け

大学全般

教務関連・教務システム

学生情報・教務システム

学内専用

FD活動

③「FD活動」をクリックする

FD活動

ページが切り替わり、下記の「FD活動」のページに移動します。

北海道医療大学 FD活動

学内専用

- FD研修
- 国際案内
- 研修受講証交付申請手続き
- 「受講証交付申請書」様式ダウンロード
- 授業評価アンケート/教員アンケート公開

現在の様子

北海道医療大学 FD活動

学内専用

- FD研修
- 国際案内
- 研修受講証交付申請手続き
- 「受講証交付申請書」様式ダウンロード
- 授業評価アンケート/教員アンケート公開

近日、「シラバス(授業計画)作成要領について」が追加される予定です (テストページの様子)。

北海道医療大学 FD活動

学内専用

- FD研修
- 国際案内
- 研修受講証交付申請手続き
- 「受講証交付申請書」様式ダウンロード
- シラバス(授業計画)作成要領について

New!!

以下、テストページの様子

学内専用

- FD研修
- 国際案内
- 研修受講証交付申請手続き
- 「受講証交付申請書」様式ダウンロード
- シラバス(授業計画)作成要領について

「シラバス(授業計画)作成要領について」をクリック

ページが切り替わり、下記「シラバス(授業計画)作成要領について」のPDFファイルが表示されます。

シラバス(授業計画)作成要領について

1

2

### シラバス(授業計画)作成要領について

【序言】本要領は、授業内容から学習目標を設定するシラバス作成の指針、方法と手順、評価の方法、その他の必要な事項を規定する。本要領は、各学部・各学科のシラバス作成に活用される。

【目的】本要領は、各学部・各学科のシラバス作成に活用される。本要領は、各学部・各学科のシラバス作成に活用される。

【学習目標】学生が授業を受けることで何ができるようになるかを、「一般目標」と「行動目標」を簡潔に書き表す。医学系の教育では、目標は教育学の分類に従って、「一般目標」と「行動目標」を記す。

【学習目標】学生が授業を受けることで何ができるようになるかを、「一般目標」と「行動目標」を簡潔に書き表す。医学系の教育では、目標は教育学の分類に従って、「一般目標」と「行動目標」を記す。

学年	学期	授業科目	単元	学習目標
1	1	○○○	○○○	○○○
1	2	○○○	○○○	○○○
2	1	○○○	○○○	○○○
2	2	○○○	○○○	○○○

青字になっている部分をクリックすると、該当する項目の補足説明を見ることができます。

### シラバス(授業計画)作成要領について

【序言】本要領は、授業内容から学習目標を設定するシラバス作成の指針、方法と手順、評価の方法、その他の必要な事項を規定する。本要領は、各学部・各学科のシラバス作成に活用される。

【目的】本要領は、各学部・各学科のシラバス作成に活用される。本要領は、各学部・各学科のシラバス作成に活用される。

【学習目標】学生が授業を受けることで何ができるようになるかを、「一般目標」と「行動目標」を簡潔に書き表す。医学系の教育では、目標は教育学の分類に従って、「一般目標」と「行動目標」を記す。

【学習目標】学生が授業を受けることで何ができるようになるかを、「一般目標」と「行動目標」を簡潔に書き表す。医学系の教育では、目標は教育学の分類に従って、「一般目標」と「行動目標」を記す。

学年	学期	授業科目	単元	学習目標
1	1	○○○	○○○	○○○
1	2	○○○	○○○	○○○
2	1	○○○	○○○	○○○
2	2	○○○	○○○	○○○

例:「学習目標を簡潔書きする」をクリックすると

### 「【学習目標】の補足説明」のページに移動し、確認することができます。

シラバス(授業計画)作成要領についての補足説明

【学習目標】の補足説明

学生が授業を受けることで何ができるようになるかを、「一般目標」と「行動目標」を簡潔に書き表す。医学系の教育では、目標は教育学の分類に従って、「一般目標」と「行動目標」を記す。

【学習目標】を記載する際には、次の原則を踏まえる。

- 「学生」を主語として書くが、主語は省略する。
- 学習の目的を明らかにするために、「・・・ために」を記載する。
- 3つの「一般目標」は、互いに重複しない「行動目標」の項に記載する。

【行動目標】では、複数の概念をもつ動詞、概念的な概念をもつ動詞を用いて表す(下表参照)。

【行動目標】では、「理解する」のような概念的言葉でなく、学習によって得られる成果や観察可能な行動を具体的に表す。試験(成績評価)を想定するときは、以下に示す観察可能な動詞で、「知識」「態度・習慣」「技能」をバランスよく含めながら、到達レベルを表現する。

動詞	知る	認識する	理解する	感ずる	判断する	価値を認める	評価する	位置づける	示す	考察する	使用する	実施する	適用
一般目標	知る	認識する	理解する	感ずる	判断する	価値を認める	評価する	位置づける	示す	考察する	使用する	実施する	適用
知識の領域	列記する	列挙する	述べる	説明する	分類する	比較する	対比する	関係づける	類別する	解釈する	予測する	選択する	選択する
行動目標	決定する	弁別する	推論する	予測する	使用する	応用する	適用する	適する	帰納する	批判する	評価する	公式化する	
態度・習慣の領域	行う	認める	知覚する	両手する	協調する	示す	見せる	始める	表現する	参加する	相互に作用する	系統立てる	反応する
技能の領域	辨別する	協働する	熟練する	工夫する	実施する	行う	創造する	操作する	動かす	触れる	触れる	調べる	準備する

平成30年度FD研修(基本編) ミニレクチャー

# シラバス(授業計画)

## syllabus

### シラバスとは?

- 授業計画書
 

授業という商品の説明をするカタログのようなもの  
何をかうか(受講するか)の選択基準
- 授業の目標、方法と手順、評価の方法を明記
- 学習指針、カリキュラムにおける科目の位置づけ、授業に対する学生と教員のコミュニケーション、教員同士の合意形成などの働き  
⇒全学で統一した記載方法

北海道医療大学FDハンドブック P19

### 教育課程の体系化

大学、学部、学科の教育課程が全体としてどのような能力を育成し、どのような知識、技術、技能を修得させようとしているか、そのために個々の授業科目がどのように連携し関連し合うかが、あらかじめ明示されること。なお、大学として学位授与の方針に対して授業科目が過多であったり、科目の内容が過度に重なっている場合は、精選の上、体系化が行われる必要がある。[後略]

文部科学省 中央教育審議会 答申(平成24年8月28日)  
「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて  
～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」[抜粋]

## 授業計画(シラバス)の充実

学生に事前に提示する授業計画(シラバス)は、単なる講義概要(コースカタログ)にとどまることなく、学生が授業のため主体的に事前の準備や事後の展開などを行うことを可能にし、他の授業科目との関連性の説明などの記述を含み、授業の工程表として機能するよう作成されること。

文部科学省 中央教育審議会 答申(平成24年8月28日)

「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて

～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」【抜粋】

## ディプロマポリシー

各大学がその教育理念を踏まえ、どのような力を身に付けば学位を授与するのかを定める基本的な方針であり、学生の学修成果の目標ともなるもの。

## カリキュラムポリシー

ディプロマ・ポリシーの達成のために、どのような教育課程を編成し、どのような教育内容・方法を実施するのかを定める基本的な方針。

## カリキュラム

## シラバス

ディプロマポリシーを達成するために何を学び、どのような知識、技術を身につける必要があるか

## アドミッションポリシー

各大学が、当該大学・学部等の教育理念、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づく教育内容等を踏まえ、入学者を受け入れるための基本的な方針であり、受け入れる学生に求める学習成果(学力の3要素※)を示すもの。

※(1)知識・技能、(2)思考力・判断力、表現力等の能力、(3)主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度

## ディプロマポリシーとシラバス

- 当該授業科目が、ディプロマポリシーのどの部分を担うものであるのかが明示され、それによって当該授業科目の学習・到達目標が設定される。
- 各授業回における学習内容ならびに学習・到達目標は、当該授業科目の学習・到達目標との関係において設定される。
- 当該授業科目の評価項目は、その到達目標にもとづいて設定され、その評価は到達目標に対する到達度の測定にもとづき行われることを基本とする。

※学部のディプロマポリシーから授業科目の各回の学習目標等は系統立てて繋がっていないといけない

## 留意点

- ① 準備学習(予習・復習等)の具体的内容およびそれに必要な時間
- ② 授業における学修の到達目標および成績評価の方法・基準
- ③ ディプロマ・ポリシー(学位授与の方針)と当該授業科目の関連
- ④ 課題(試験やレポート等)に対するフィードバックを行うこと

多職種連携	多職種連携	連携(連携)	協働(協働)	連携(連携)
1	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
2	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
3	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
4	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
5	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
6	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
7	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
8	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
9	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
10	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
11	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
12	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
13	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
14	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
15	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
16	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
17	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
18	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
19	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進
20	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進	多職種連携の推進

## 一般目標

### (General Instructional Objective:GIO)

- 1) 学習者を主語として書く。
- 2) 学習経験の結果、いかなることができるようになるかを表す動詞を含む文章で書く。
- 3) 知識、技能の学習がなぜ重要か=それらが将来どのように利用されるか それによって学習者のニーズがどのように満たされるかを明らかにする。(目的をいれる=……するために)
- 4) 複雑な概念をもつ動詞、総括的な概念をもつ動詞をもちいて表す。  
動詞:知る 認識する 理解する 感ずる 判断する 価値を認める  
評価する 位置付ける 考察する 使用する 実施する 適用する  
示す 創造する 身につける
- 5) 必要な目標分類(認知・態度・技能)を総括的に含める
- 6) ……のためにを前文にまとめてよい。



## 一般目標で使う動詞

知る 認識する 理解する 感ずる 判断する  
価値を認める 評価する 位置づける 示す  
考察する 使用する 実施する 適用する  
創造する 身につける

## 行動目標

### (Specific Behavioral Objectives: SBO)

学習単位の一般目標を達成するためにどのようなことができるとよいかを具体的言葉で書く。

- 1) 学習者を主語として書く。
- 2) 動詞を含む文章とする。
- 3) 理解するのような概念的言葉でなく、観察可能な行動を具体的に表す。

試験(成績評価)を想定するとよい。

- 4) 一般目標と関連していること  
ひとつの一般目標に対して、数個から10数個の行動目標が設定される。
- 5) 到達レベルを書く
- 6) 認知、態度、技能をわけて書く。全体がバランスよく含まれるようにする。

## 行動目標で使う動詞

### □ 認知領域(知識の領域)

列記する 列挙する 述べる 具体的に述べる 説明する 分類する 比較する  
対比する 類別する 関係づける 解釈する 予測する 選択する 同定する  
弁別する 推論する 予測する 公式化する一般化する 使用する 応用する  
適用する 演繹する 結論する 批判する 評価する

### □ 情意領域(態度・習慣の領域)

行う 尋ねる 助ける コミュニケートする 寄与する  
協調する 示す 見せる 表現する 始める 相互に作用する 系統立てる  
参加する 反応する 応える

### □ 精神運動領域(技能の領域)

感ずる 始める 模倣する 熟練する 工夫する 実施する 行う 創造する 操作する 動かす 手術する 触れる 触診する 調べる 準備する 測定する



# ワークショップ

北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える



《 ㄨ ㄉ 》



ワークショップ  
プロダクト・感想





【グループA:プロダクト】

## 2児の父 発表

いかに「若者」にむけて  
ユニバーシティアイデンティティを伝えるか

- 紙だと読まれない可能性大
- 拡散しやすいメディア
- 若者に親和性が高い



YouTubeを用いてはどうか？

広告収入も期待できる！

メインテーマ

人が好き 笑顔が好き  
だから 医療大

【コンテンツ】

1. 多職種連携
2. 学生と教員
3. ローカルからグローバルまで
4. がんばったぶんいいことがある
5. OB,OG 就職が強い

### 1. 多職種連携

職種入れ替わり（“君の名は”のパロディ）

- 心心理
- 薬薬薬学
- 検検検査
- 看看看護
- 菌菌菌学
- 理理理学
- 作作作業
- 言言言語
- 福福福祉
- 衛衛衛生

### 2. 学生と教員

- ライセンス(国試)
- 学生生活(よさこい、設備等)
- 研究室訪問(爆問学問風)  
ここがすごいうちの教員

### 3. 地域から海外まで

- 当別→北海道→日本→アジア→ヨーロッパ  
→アメリカ
- 北海道LOVE(脱北しない)

### 4. 入り口は広く、さらに頑張ったぶん いいことが

- 多学部併願可
- 奨学金制度
- 学長賞

### 5. OB、OG訪問 就職の強さ

- 上司も含めたインタビューなど  
(医療大出身でなくとも)
- 他施設との協同

【グループB：プロダクト】

## つながる医療大

仲間とつながる



なりたい自分につながる



地域とつながる



社会とつながる



世界とつながる

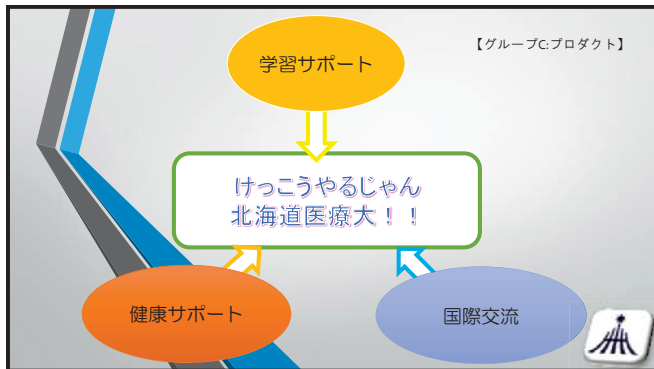


## 未来の医療とつながる



## つながる医療大

- 仲間とつながる
- なりたい自分とつながる
- 地域とつながる
- 社会とつながる
- 世界とつながる
- 未来の医療とつながる
- HPのURL



学習サポート  
～卒後を見据えた教育～

1. 充実した教員数 (良好なS/T比!!)
2. 教員の多様な専門性
3. 実践的な多職種連携教育

健康サポート  
～健康は学生から～

1. 保健センターの充実
2. 禁煙サポート
3. ピロリ菌除去
4. 北海道の魅力を満喫

国際交流  
～世界で活躍できる医療人に～

1. 海外研修 語学&専門教育
2. 留学生の受け入れ

某卒業生Aさん

ただの滑り止めが、  
最高の志望校になりました！！

【グループD:プロダクト】

## チーム 38歳！

### 大学としてのアピールポイント

- 多職種連携(お互いの職務内容)を学生時代から学べる
- 新学部(臨床検査学科)が設立される
- 認定看護師の資格が取れる
- 教員一人当たりの学生数が少ない  
(手厚い指導)
- 歯学部は北海道医療大学と北海道大学の2つのみ
- 心理学科が国家資格になる  
→すべての学科が国家資格を取れる

### 学生生活のアピールポイント

- 地域(当別)の名所が多い!(うどん、温泉)
- 最北端の医療系大学 ⇒ 夏は涼しく、冬は雪との戯れに感動
- よさこいが強い!
- 2020年東京オリンピック会場まで、外に出ずに到着できる☆

でも、他にも北海道には  
「医療大」と付く大学があるから・・・

北海道の

元祖医療大

### 媒体

- CM(テレビ,youtube)  
チームナックスに名物先生役を演じてもらう
- 医療大Tシャツを配って着てもらう  
もしくは着る
- 高校に、そのTシャツを着たマスコットを置いてもらう
- 北広島のボールパークに広告を出す

### チーム38歳は何をできるのか!?

- CMに出演する
- 自分が名物先生になる!
- 自身の高校にマスコットを置いてもらいアピール
- 積極的に医療大Tシャツを着る





今回、FDに参加したことで他学部の教員の方と初めてワークショップを行ったことは、私にとってとても刺激的な経験でした。これまでは討論をするといっても、同じ学部の学生同士や研究室の先生や学生など、同族によるそれしか経験していなかったため、このような場を設けていただいたことに深く感謝したいと思います。

今回のワークショップのテーマは本大学をいかに上手くアピールするかという、今後の大学運営に関わる重大な題材でした。昨今、少子化による大学の定員割れ、私立薬学部の乱立による薬剤師の飽和が問題視されています。そんな中、いかにして本学の特色や良い点を受験生に伝えるというのは大学の存続のための至上命題といっても過言ではないと考えます。そのような大切な議題を様々な学部の先生方と共有できたことは非常に幸運なことだと感じました。

終わりになりますが、今回FDで学んだことを教育に取り入れていけるように邁進したいと思います。

(薬学部 森 宏)

本FD研修会において「学生を中心とした教育をすすめるために」というテーマのもと、北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考え、今後どのようにイメージの統一を図り、その存在を人々へ印象づけていくかという課題について、今年度新しく医療大に赴任された、私が所属する薬学部以外の学部の教員と取り組んだ。我々は、北海道医療大学のもつ良さを【つながる医療大】というスローガンにのせてアピールする方法を考えた。多職種・教員・学生等の“仲間”、なりたい自分となれる“将来”、当別町や北海道を感じられる“地域”、国際交流や留学で“世界”、ピロリ菌除去や禁煙対策などで“予防医療”、札幌へのアクセスも可能な立地である“社会”という6つのテーマで写真と共に伝えていくことにした。強いメッセージ性と共に、分かりやすく北海道医療大学のイメージを伝えることは全学共通して非常に重要であり、また課題でもあると感じた。

(薬学部 遠藤 朋子)

これまで参加したFDの中で今回は最良でした。コンパクトに収め、かくあらねば的な教条主義がなく自由闊達な雰囲気の中で研修ができました。特に学長自ら、1時間近くご講演をいただき、日本の医療の特性に基づく医学(science)と医療(art)の融合、学生に夢を与える教育とは、患者さんから学生、教職員までの健康を考える大学運営などなど、熱い情熱に触れることができました。経験上、トップがここまで関わっているのは初めてです。

他にも多くの工夫があり、ぎこちなさをかえって露呈しがちなアイスブレイキングでも、私についての紹介どれがウソ?ゲームも違和感なく溶け込めました。そして北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティをいかに発信するかのワークショップでは、若い皆さ

んの発想で、学生から教職員参加の動画を YouTube で発信するプランを発表しました。こうした多職種・多世代の交流の貴重な機会にもなりました。

(歯学部 照光 真)

医療大学をみつめる良い機会になりました。他学部の先生方の意見も直接聞くことができ、いかに北海道医療大学のブランド力を高め、入学希望者を増やせるのか、「つながる」をキーワードとして画像として発信することにまとめることができました。

関東、関西地区の私立大学は依然歯学部人気を維持していることを考えると、大学の立地が希望大学の選定基準に大きなウエートを占めるため、北海道医療大学は札幌から通える近い場所であることをもっとアピールすべきだと思います。事実、私の以前の大学のボスも北海道医療大学は北海道の北の外れにあると思っておりました…。関東・関西からも飛行機で短時間移動でき、都会である札幌から通え、駅から大学が直結しているシンプルなパンフレットは効果的です。

一方で千葉先生のおっしゃられていた、ヨーロッパの大学のように丘の上に立っているのも魅力があり、ぜひ学生と大学校舎、その周囲の緑を、ドローンを用いた撮影で音楽をバックにホームページで公開すると、より大学の良さが実感できます。

さまざまな意見を先生方から聞け、自身もいろいろと考えるよい機会になりました。日曜日であるにもかかわらず、FD 研修をしていただきました委員の先生方にこの場を借りまして感謝申し上げます。

(歯学部 志茂 剛)

今回、FD 研修<基本編>に参加することで、他学部の先生方と交流を持つことができました。このことが、何よりも私にとって勉強になったことだと強く感じています。本学の使命から始まり、授業計画について、教員評価についてなど、新たな知識を学んだこともたくさんありました。

しかし、他学部の新任先生方の意気込みや教育に対する熱意を身近に感じられる現場での研修会自体が新鮮であったということが正直な私の感想です。お互いの意見・考えをしっかりと聞き合いながら、それを一つの意見・発表として作り上げてゆく作業はとても有意義なものでした。

他学部の先生方の熱意を目の当たりにし、自分の教員としての在り方を深く考えなくてはならないと身の引き締まる思いで研修会を終えました。

(歯学部 竹田 洋輔)

今回の研修では他学部の新任の方々と合同で研修を行った。  
具体的には学長講話で大学の運営機構・運営状況・組織体系、研究費、国際交流に至るまで体系的に知ることが出来た。

また、研修の中でワークショップを行った。6人1班となり、本学のブランド化について討論し、内容をまとめてプレゼンテーションを行うという一連の流れであった。ワークショップを通して、制限時間内に議論を深めることや、初対面の人とスムーズなコミュニケーションを取る方法を実践することが出来た。

今後も、このような研修は必要であると考えられる。

(歯学部 原田 文也)

「学生を中心とした教育をすすめるために一北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える」というテーマの全学FD研修に参加させていただいた。

午前中の学長講話、シラバスについての講義、午後のワークショップ解説などにより、ワークショップで考えるための準備をすることができたと思う。

アイスブレイキングの「ウソ？ホント？」では、楽しく盛り上がり、メンバー間の交流が深まり、その後のワークショップの活性化につながった。ユニバーシティ・アイデンティティについてディスカッションしたことにより、学生や保護者の目線から、大学にはどんな魅力が必要なのかを考える機会をもつことができた。

しかし、そのアピールのために何をすべきなのかを考えると、あまり斬新なものが浮かばず、自分の発想の乏しさを感じた。グループメンバーから、ユーチューブやインスタグラムを活用して情報を発信する提案などがあり刺激を受けた。さらに、他のグループの発表から、大学のイメージアップを図る戦略の多様性も感じることもできた。

就職した最初の週末で、身体的疲労感があったが、この研修によって気持ちは明るくなれたと感じた。

(看護福祉学部 常田 美和)

今回、FD研修に参加して、北海道医療大学の個性、意義について考えるきっかけとなった。学長の講話から国立と私立大学の資金面の違いをはじめ理解した。私立大学として今後、発展させていくには学生の確保と学生の質向上が課題と考える。北海道医療大学の強みとしては6領域にわたり多職種との協働ができることと、学生にとって教員が身近に存在していることにあると私はとらえた。ワークショップで話しあった、学生に発信して理解してもらうコンテンツの構築を考察したことは貴重な経験となった。

また、ワークショップでは普段あまりかかわることのない、他部門の教員と意見交換できたことは嬉しかった。今後も言葉を交わすきっかけになると思う。

他部門の教員とのつながりが、この先学生の多職種連携の学習へと発展することもあるのではないかと思う。

(看護福祉学部 増田 悠佑)

近年、大学進学者数の減少が予想される中で、大学進学した学生の満足度を上げていくため、学生を中心とした教育が求められます。そのためには、学生自身が大学生活において学業だけにとどまらず能動的に活動することで、人として成長する楽しさを実感することが大切だと考えます。

今回のワークショップでは、学生中心の教育を行うことを目指し、多領域の職員と話し合うものでした。私たちは、本学で学ぶことがいかに人としての成長につながっていくかについて、現在の高校生にわかりやすく一言で伝えたいと考えました。その話し合いの中で、医療大での学生生活では仲間や未来、健康など様々なものにつながっていることに気がつき、「つながる、医療大」とキャッチフレーズをつけました。そして本学の強みであるこのキャッチフレーズを実現可能なアピール方法についても話し合いました。

その結果、みんなが合意でき、とても有意義な時間でした。

(看護福祉学部 三津橋 梨絵)

今回 FD 研修を受けたことで、大学としての課題を確認するとともに、教育者としての今後の役割も理解することができた。

まず、入学者数が減少傾向にある今、いかに本学の強みを人々に印象づけ、入学者数を増加させることが出来るかが課題であり、そのためにもユニバーシティ・アイデンティティの検討・実施が重要であると学んだ。グループワークを通し、まず本学の強みを一人ひとりが認識したうえで、現代のニーズに合わせた発信方法(インターネットや SNS)や学生が興味を示す工夫(動画やシンボル作成、有名人の起用等)を活用していくことが必要であると考えた。

また、教育者としては、現在の教育レベルを維持するだけでなく、学科それぞれが+αで学生にとってよりよい指導を検討・実施し、大学全体のレベル向上を目指すことが重要であると学んだ。

(看護福祉学部 新見 千穂)

今回の FD 研修に参加し、北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティに関して大きく考えさせられ、学びになったと感じている。私は臨床 7 年の看護師経験を積んできた。臨床での経験から、学生を指導する職務に就きたいと感じ、今年度より助教として

当学にて職務につくこととなったが、当学の建学の理念や学部の特色、他大学との違いや北海道としての特性など理解できていないことが多くあると自覚した。

しかし、これから教員として指導していく上では、当学の特徴を踏まえること、学生にはどのような傾向があり、どのように指導していくことが有効なのか、また学士取得・国家試験合格へ向け私に何ができるのかをしっかりと考え、自分自身が成長していかなければならないと改めて自覚できた。

また、講義やグループワークを通して、多くの先生方の知識や考えに触れることができ、今回の研修に出られたことで多くの学びを得られたと感じる。

(看護福祉学部 米川 弘樹)

「学生を中心とした教育をすすめるために」をテーマとしたFD研修に参加させていただきました。日頃の業務がご多忙の中、有意義な研修の企画、運営をしてくださいましたFD委員の先生方に感謝を申し上げます。

職位や学部を超えたグループワークでは、新学部の先生も含めた、他学部の先生方と交流することができました。互いに互いを認めあい、ストレングスを活かし、ウィークネスをカバーしあえる、まさに北海道医療大学が持つ多職種連携のチーム力、「医療大らしさ」が集結し、浅香学長のご講話にあった、「医療はアートである」を感じました。このような交流が、学生同士においても数多く持つことで、在学生在が自慢でき、各臨床現場で活躍している卒業生が誇りを持てる大学になると希望が膨らみました。今後も「学生中心の教育」を大切に、型にはまらず、何か面白い事が出来るよう、地域も含めたチームで連携し、教育、研究に邁進していきたいと考えております。

(看護福祉学部 片山 寛信)

全学FD研修会のワークショップでは、北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考えるというテーマで、大学をアピールできる材料の作成を行った。本チームは、各自が本学のアピールポイントを出し合い、キャッチフレーズを固め、高校生が親しみやすいInstagramで提案する方向で作成した。各先生方が積極的に意見を出してくださり、円滑に進み有意義な時間であった。

今回のFD研修を通して、学部の垣根を越えて検討することで、各学部が特色を打ち出すだけでなく、大学全体として考えていくことの意義を痛感した。大学教員として、学生の教育や研究はもちろんであるが、学生の獲得も大きな役目である。教育や研究だけでなく、大学教員として学生獲得のために何ができるのか、改めて考える良い機会となった。

今後、オープンキャンパスなどを通して、現在の高校生の興味関心事、ニーズにも耳を傾けていく必要性を感じた。

(心理科学部 関口 真有)

今回参加した研修会では、以下のことを学び、考える機会を得ることができました。学長の講話では、各学科をブランド化していく必要があるというお話が印象的でした。私の所属する心理学部も学生の入学者数が定員を下回っているという現状を知り、いかに入学者を獲得するかということを考えさせられました。心理学部では、今年度より公認心理師取得の新カリキュラムが始まります。他の学科と同じように国家資格取得を目指し、合格率を高く保っていくことが当面は非常に重要な課題になると考えました。

午後からの「ユニバーシティ・アイデンティティについて考える」では、大学全体としての強みや特色を知る良い機会を得ることができ、大学の特色や看護学科がブランド化した理由について理解を深めることができました。それと同時に、北海道医療大学の教員の一人であるということを知ることができ、大学の発展のために貢献したいという意識に変わりました。

(心理学部 河村 麻果)

#### ・学長講話、レクチャーについて

浅香学長、志渡先生のお話を聞き、4月2日の新任FDと合わせて、北海道医療大学の教員として知るべき最低限の事柄を短い時間で効率的に把握することができました。私は国立大学出身で前任地も国立大学であり、私立大学に所属するのは初めてでしたので、これらのレクチャーは大変有意義でした。また、浅香学長の禁煙についてのお話も大変興味深く拝聴致しました。

#### ・ワークショップについて

参加者自己紹介の方法が大変楽しく、効果的なアイスブレイキングであったと思います。グループ討論のテーマも実益と楽しさを兼ね備えたものであり、制限時間が足りなく感じるほど議論が盛り上がりました。他学部の先生とお話しでき、知り合いになれたことも大きな成果であったと思います。

全体的に大変有意義な会でした。企画して下さった全学FD委員の先生方、学務部の方々に改めてお礼申し上げます。ありがとうございました。

(リハビリテーション科学部 西出 真也)

このたびの研修会では、「学生を中心とした教育をすすめるために」というテーマに関して、年代や学部を問わず、参加者の先生方とフラットな議論ができた点が非常に有意義であった。本学のユニバーシティ・アイデンティティをアピールする手段として、当班ではYouTubeなどのソーシャルメディアを活用する方法を提案したが、効果的な発信方法を考えてゆくうえでは、現代の高校生や新規入学者が「何を考えているのか」、「何に興味を抱いているのか」など、若者のカルチャーや生態系を把握する必要があることを痛感し

た。

「現代の学生を知ること」は、入学者の増加を促すという点のみならず、「学生を中心とした教育」を推進するうえでも非常に重要な意味をもつと考える。現代の学生や社会に対して、自分自身はどのような価値を提供できるのかを、教員としての当事者意識をもって考え続けていきたい。

(リハビリテーション科学部 高倉 祐樹)

認定看護師研修センターは、学部生とは異なり、すでにライセンスをもつ社会人の資格認定のための研修機関であり、本学の中でも特殊な位置づけにある。それゆえに学部の先生たちが参加する研修に自分が入ることの意義は見いだせていなかった。

そのような中でも実際に参加すると、ワークショップでは普段あまり関わることの出来ない他分野の先生方と顔を合わせ、それぞれの立場から意見を出し合えたことはとても刺激になった。そして、やはりさすがメンバー皆さんが大学の教員ということで、非常にスムーズにディスカッションが進んだ。今後のワークの進め方の参考にしたい。

最終的に、学生への教育と言うより、本学が生き残っていくために何をしていかなければならないのか、という広報活動のアイデアを出したのだと解釈している。

ただ、受験生に選んでもらえるような魅力あるプレゼンテーションの方法は、今後自身の活動に生かせると考えている。

(認定看護師研修センター 森 真紀)

命と健康を担う人材を育成する使命を持つ本学だからこそ、「どのような人を目指し、どのように育てるか」をユニバーシティ・アイデンティティとして示すことが重要であると感じた。教員には、ユニバーシティ・アイデンティティを活かした教育の実践が求められる。多分野の教員が刺激を受け合いながら各自の専門性の研鑽を続け、信念と情熱を持って学生に還元することが本学のユニバーシティ・アイデンティティにつながると考える。

ワークショップで、「本学の特色としてネガティブな点も、発想の転換でポジティブな特色にすることが可能である」との意見があり、これは教育においても大切な考え方だと思った。マイナス面と決めつけずに様々な視点から評価すること、個性を認めて可能性を見出すことを心がけたいと思う。

今回の研修を通して、ユニバーシティ・アイデンティティを本学の仲間と共有し、大切にしてゆく自覚ができたことが有意義であった。

(認定看護師研修センター 早坂 史子)

浅香学長の講話では本学の歴史、現状、未来への展望などを詳しくお話しいただいて、理解が深まりました。私も本学の英語名称は変更を検討すべきと思います。

志渡教授のレクチャーではシラバスの基本を教えてくださいました。実際の作成に活かしていきたいと思います。

千葉委員長のオリエンテーションから始まったワークショップは、実りの多いものでした。旭川医科大学に勤めていた16年前にはFD活動はありませんでした。チュートリアルやOSCEが始まったばかりの頃であり、教官として問題・課題作成には携わっていたことと、他の研修などでワークショップ形式には経験がありましたので、すんなりと入れました。嘘の選択肢を見抜く自己紹介のアイスブレイキングが良くて、グループメンバーとはすぐに打ち解けられました。プロダクトは妄想も働きましたが、面白いものができたと思います。名前と顔だけでもよいので参加者全員を紹介してほしいと思いました。

FD委員および事務担当の皆様に御礼申し上げます。

(新学部設置準備室 幸村 近)

4月7日に「学生を中心とした教育をすすめるために」というテーマで新任教員FD研修が行われました。研修会では、まず浅香学長よりご講話頂き、北海道医療大学の置かれた現状、ならびに今後の教員の目指すべき道をお話頂きました。少子化が叫ばれる現状ですが、教員一同が同じ方向に向かう上で極めて参考になるお話でした。

午後からは、「北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える」という内容でグループ討論を行いました。私はグループCに属し、発表を担当しました。討論では、グループ内に北海道医療大学出身者もおり、大学を内外より見つめることができ、北海道医療大学の魅力を理解する良い機会になりました。

FD研修はどの大学でも実施されていると思いますが、教育研究には各大学の特色を生かした活動が必要となります。そのため、赴任早々のこの時期にFD研修ができたことは、大学を理解する絶好の機会になったと考えています。

(新学部設置準備室 松尾 淳司)

FD研修というものに初めて参加したので、最初は受け身で講義を聴き、北海道医療大学という組織について学ぶだけかと考えていたが、午後からのワークショップで自ら考え、発信していくことが今回の研修の趣旨だと理解出来た。また、言葉は知っていたが、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーの関係性について、整理して勉強することができ、今後の学生指導に活かしていきたいと感じた。

ワークショップでは他学部の先生と意見を交わすことができ、様々な観点から大学を見る事ができて非常に参考になった。



新学部の教員はあいの里キャンパスにいるため、このような機会が無いと他学部の先生方と接することがないので、大学全体の事を知り、考える良い機会だった。

(新学部設置準備室 江本 美穂)

「北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える」というテーマで開催された全学 FD 研修に参加しました。少子化により入学者数を確保していくことが直面した課題である事から、ワークショップではいかに北海道医療大学の良さ、素晴らしさを高校生（受験生）にアピールできるかを中心にグループ内で話し合いました。

我々のグループでは、「つながる医療大」をキャッチコピーに、若者が注目しやすいインスタグラムを利用した発信を考えました。テーマが私には難しい内容でしたが、他の学部の方々のたくさんのご意見を聞くことができ学ぶことの多いものでした。グループ内はもちろん、他のグループの発表からも様々な考えがあり、このように各学部の方々と垣根を超えて協力することの大事さを実感しました。

準備、運営に携わっていただいた全学 FD 委員会の皆さま、どうもありがとうございました。

(新学部設置準備室 近藤 啓)

私は、初めて教員として学生教育をするに辺り、自分がどのように教育（授業）をするかにとらわれている部分があった。今回の FD 研修により、自身の授業内容だけではなく、授業外に学生と接する時間を増やす必要性と意義、学生主体または学生間で協力し合う学習環境の支援、学生への信頼・期待という感情を表に出すこと、学生の多様性を理解することなどが、大切であることを教えて頂いた。また、私はこれまで自身の職場に与える影響の大きさに対する意識が薄かった。しかし、私立大学である当学では、志願者・入学者数、国家試験合格率など大学のイメージや経営等に与える自身の影響の大きさが理解できた。

FD 研修への参加は初めてであり、上記内容は頭で理解していても、まだ実践に至るレベルでないが、積み重ねていき微力ながら貢献していきたいと思う。FD 委員の皆様のおかげで、研修が和やかに明るく受講できたことに、感謝致します。

(新学部設置準備室 高橋 祐輔)



# 総合評価



# 総合評価

1. 今回の新任教員研修における次の各テーマについて、習得度を自己評価してください。

	充分理解 できなかった	だいたい理解 できた	充分に理解 が得られた
1) 医療系総合大学教員としての使命と目標	—	—	—
2) 多職種連携教育について考える	—	—	—

2. 今回のワークショップについて評価してください。

(1) 内容についてどう評価しますか。

価値なし	いくらか 価値あり	かなり 価値あり	きわめて 価値あり
—	—	—	—

(2) 内容に対する時間量はいかがでしたか。

多すぎる	適当	やや少ない	足りない
—	—	—	—

(3) 内容の難易をどう感じましたか。

きわめて難しい	適当	少し易しい	易しすぎ
—	—	—	—

(4) このようなワークショップ形式についてどう思いましたか。

効果なし	ある程度効果的	かなり効果的	きわめて効果的
—	—	—	—

(5) このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか。

全く不適切	ある程度適切	かなり適切	きわめて適切
—	—	—	—

3. 今回のワークショップ全体にわたり、とても良かったと思われる点

4. 今回のワークショップ全体にわたり、良くなかったと思われる点（改善点）

5. 今後ともこのようなワークショップの実施についてどう思いますか。

実施しなくて もよい	どちらでも よい	実施しても よい	ぜひ実施すべき である
—	—	—	—

6. このワークショップの成果に関連して、今後1年の間に実施したいと考えていることを簡条書きにしてください。

7. 全体を通して、今回の新任教員研修に対するご意見を記入してください。

所属学部等

お名前

---

## 総合評価

\* 参加者：24 名 ・ 回答者：24 名 ・ 回収率：100%

1. 今回の新任教員研修における次の各テーマについて、習得度を自己評価してください。

	充分理解できなかった	だいたい理解できた	充分に理解が得られた	無回答
1) 医療系総合大学教員としての使命と目標	2	8	14	0
2) 本学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える	2	12	10	0

2. 今回のワークショップについて評価してください。

(1) 内容についてどう評価しますか。

価値なし	いくらか価値あり	かなり価値あり	きわめて価値あり	無回答
1	2	14	7	0

(2) 内容に対する時間量はいかがでしたか。

多すぎる	適当	やや少ない	足りない	無回答
0	24	0	0	0

(3) 内容の難易をどう感じましたか。

きわめて難しい	適当	少し易しい	易しすぎ	その他
0	22	2	0	0

(4) このようなワークショップ形式についてどう思いましたか。

効果なし	ある程度効果的	かなり効果的	きわめて効果的	無回答
0	4	15	5	0

(5) このワークショップの内容はあなたの興味に対して適切でしたか。

全く不適切	ある程度適切	かなり適切	きわめて適切	無回答
0	6	15	3	0

### 3. 今回のワークショップ全体にわたり、とても良かったと思われる点

- ・初めに大学の説明があり、その後、それを踏まえたワークショップに続いた点。
- ・他学部の教員と大学教育について一緒に考える機会は少ないので、様々な視点で一緒に考えることができよかった。
- ・大学をみつめる、お互いに意見を出し、まとめていく点。
- ・色々な方と話し合い、一つのものをつくりあげる点。意見や考えをすりあわせるプロセスが楽しく、学びとなった。
- ・他学部の方との交流、自分には思いつかない、色々な意見が聞けて勉強になりました。
- ・テーマに対して制限時間内に話をまとめ、形にするチカラがついた。
- ・テーマが明確で、今後同じ組織で協力してゆく自覚と連帯感が生まれた点。
- ・学長講話、グループディスカッション。
- ・経験の多い先輩方の意見や知識に触れ、自分の考え方が広がったと感じた点。
- ・普段、関わることの少ない学部の先生方とディスカッションできた点。
- ・しっかりと話し合いが楽しくできた、多職種の方と話す機会が得られた点。
- ・多職種の先生とディスカッションの機会を得ることができた点。
- ・医療大としての理論や、医療大の特色等を再確認できた。多職種連携とまではいかないが、他学部の先生と交流がもてた。
- ・アイスブレーキングを行ったことで、グループ全体の緊張感がほぐれ、自由かつ活発な意見交流が行えた点。
- ・職種や年代を問わずフラットなグループディスカッションができた点。
- ・教員の意見交換ができたこと。
- ・様々な学部の先生方と大学についてお互いの意見を話し合えたこと。
- ・学長講話がわかりやすかった。私立大学、国立大学で国からの資金に大きな差があることを初めて知った。
- ・学長の講話を聞く機会、こうしたFDでは初めて。
- ・アイスブレーキング、ディスカッション、スモールラップで進められていた。一つ一つに時間をとり、余裕のある進行であったため、慌てず焦らず、関係づくりができた点。
- ・一つのグループにおける人数は適切であった。同時期に赴任した教員同士で打ちとける機会があったのは、今後の教員間での多職種につながると感じた。
- ・学長のお話が面白く、もっと聞きたいと思いました。FD委員の方が、真剣に大学のことを考えていることが伝わり、大学のことを考えるモチベーションが高まった。

### 4. 今回のワークショップ全体にわたり、良くなかったと思われる点（改善点）

- ・ワークショップのプレゼン後、他の班と討論することが難しい。（論点が不明瞭）
- ・様々な学部の教員でワークを実施したため、それぞれの学部の特色もあり、まとめるのが少し難しく感じた。
- ・ネガティブなことは言わない！「とりきめ」が良い。いいことばかり発言する会でありたい。
- ・全体討論の主旨がわからなかった。
- ・冊子にページ数を入れてください。アンケートを取りやすくしてください。
- ・1日の研修でお茶1本は少ないかな、と思いました。
- ・新しい環境への適応途中なので、少し疲れが出る週末開催でした。
- ・もう少し医療大の中身を知った時期に行った方が、効果が高い気がする。
- ・参加者全員を一人一人紹介する場面があった方が良かった。
- ・発表後の意見交換の時間がもっと欲しかった。
- ・学長講話のハンドアウトがないこと。ぜひいただきたいかった。
- ・学部別に考えることと、大学全体で考える課題が異なるので、少しテーマが広がったかな。と感じた。もう少しわかりやすいテーマの方が◎。



5. 今後ともこのようなワークショップの実施についてどう思いますか。

実施しなくてもよい	どちらでもよい	実施してもよい	ぜひ実施すべきである	無回答
0	1	15	8	0

6. このワークショップの成果に関連して、今後1年の間に実施したいと考えていることを箇条書きにしてください。

- ・大学の理念を共有できましたので、講義や学生対応に活かしたいと思います。
- ・医療大の教員としての自覚をしっかり持ち、教育・研究に取り組みたい。
- ・学生のニーズに耳を傾けて教育方法をしっかり考えていく。
- ・入学生を増やすために、オープンキャンパス等に積極的に参加したい。
- ・一つ一つのことを着実にいき、成果を発信したい。
- ・自分の分野の研究、地域連携を考える。
- ・まずは大学の現状についてもっと理解しなければいけないと思いました。
- ・国際交流。
- ・学習者本位であることを常に心に置いて教育にあたること。
- ・学生とより近く、話しやすく、支援してあげられる存在でいること。
- ・自分の指導力向上や知識の拡大を目指す。
- ・学生、親は神様と思うようにします。北海道医療大の名を広めます。
- ・学生への熱心な教育、医療大のアピール。
- ・講義のスキルアップができています。
- ・公立的な考えから私立的な考え・発想に切り替えたい。
- ・ブランド化に成功し、学生が多く集まった看護福祉学部の教育の質を下げることのないよう、常に+αで学生のためにできることを考えたい。
- ・設置準備を着実に進めたい。
- ・地理的なデメリットをいかにテクノロジーで補ってゆくかを考えてゆきたい。
- ・どのような情報が若い世代に刺さりやすいのかを考えてゆきたい。
- ・学生とのコミュニケーション。
- ・学生に対して何ができるのかを考える。大学の特色について掘り下げて調べてみる。
- ・他学部との連携。
- ・教育、臨床、研究の業績向上にチームで能力UP。
- ・学生とのコミュニケーションから学生が大切にしてほしい方を知り、それを実践及び波及させていきたい。
- ・個人的には、国際交流をアピールしたいと思いました。また、若いうちは学生との距離を近づけて、相談などにのれればと思う。
- ・学生と丁寧に関わっていきたいと思いました。

7. 全体を通して、今回の新任教員研修に対するご意見を記入してください。

- ・楽しく議論ができました。(3件)
- ・大学のことを知る機会となり、他学部の教員と交流することができ、よかったです。(3件)
- ・テーマが良かった。
- ・入学式の前日は、負担が大きいのではと思います。
- ・医療大の実情と熱意、求めていることへの理解が深まり、大変為になった。
- ・疲れはありましたが、前向きな気持ちになれて免疫力は上がった気がします。ありがとうございました。

- ・出席して良かった。自身の考えの甘さを痛感した部分があった。
- ・FDメンバー、参加者の皆さんの元気さを感じました。
- ・多様な考えに触れることができる、貴重な機会でした。大学が置かれている現状をふまえ、自分に何ができるのかを考えてゆくきっかけとなる時間となりました。
- ・常に学生の為にできる事、大学存続の為にできる事を考えていきたいと思いました。
- ・スタッフに感謝。
- ・研修運営ありがとうございます。勉強になりました。
- ・全体的に良かった。このようにアクティブに発言できる場があると、アイデアが浮かんで良かったです。
- ・大学のことを考える貴重な機会となりました。一人一人の教員が真剣に考えることが必要だと思いました。

# F D 委員感想



テーマが「学生を中心とした教育をすすめるために」-北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える-ということで、午後から1グループ6名のSGDを行った。アイスブレイキングからはじまり、本学のアピールポイントとその手段、また自分はそれに対して何ができるかというプロダクトを作成した。どのグループも活発な討論が行われ、新任教員ならではの奇抜なアイデアも多くみられて素晴らしいプロダクトが出来上がったように感じた。

午前中の学長講話もSGDの議論に参考となる情報がいくつか盛り込まれ、概ねスケジュールに関しても統一性があったように思われる。FD委員もタスクフォースとしてあらかじめ決められたグループに張り付き討議をファシリテートしてスムーズな進行が行われていたと思う。参加者も満足できていたようで良かったと思う。

今後の課題としては、会場は札幌市内のサテライトキャンパスで行ったが、当別キャンパスで平日に行う方向で今後検討してほしいと考える。

(薬学部 遠藤 泰)

全学FD委員として参加致しました。浅香正博学長から講話「医療系総合大学としての使命と目標 -新医療人育成の北の拠点を目指して-」を賜り身の引き締まる思いをあらたに致しました。千葉委員長のもと山口先生の洒脱な司会により円滑に会が進行し、有意義な研修会になったことを委員の一人として嬉しく存じています。FD研修は他学部の先生方と学部横断的に交流できる点が素晴らしいと感じています。

学部外の先生や職員の方と関わる機会は長らく勤務していてもなかなか得られないものです。新任の先生方やこれまであまり面授を受けたことの無い方々とあらためて交流することができたことはこの上ない喜びでした。「学生を中心とした教育をすすめる」ために、参加者全員でユニバーシティ・アイデンティティを目指したシラバスの作成を試みました。新任の先生方のバックグラウンドを踏まえた、内容満載の演習となりました。

なお、研修では「シラバス」についてのミニレクチャーを担当させて頂きました。貴重な機会を与えて下さったことに感謝申し上げる次第です。

(看護福祉学部 志渡 晃一)

## 1. 導入について

導入の流れ、レクチャー内容は午後のWSに向けてだけでなく、新任教員に対して有益な内容であった。学長講話はピロリの内容がほとんどで、大学のビジョンや将来構想に関する内容が少なく残念であった。

## 2. WSについて

アイスブレーキングが効果的で、どのグループも活発なWSになっていた。現在の広報や入試に関する情報は、事務の方に入って頂けたのが有用だった。様々なアイデアがアウトプットされたので、これを大学としてどう活かしていくかが見えると、参加者や教員のFD参加へのモチベーションにもなると感じた。

### 3. その他

参加者が自立してWSの運営が出来ていたので、「タスクフォース」の出番はほとんどなかった。各グループにタスクフォースが2名配置されていたが、出番がなかったこともあり人数が過剰になっていた。FD委員の参加は、春夏を分担制にする、逆にGWメンバーとしてグループに配置するなど、工夫が必要であると感じた。

(看護福祉学部 福井 純子)

本学に新たに雇用された教員に対して、今回は「学生を中心とした教育をすすめるために」をテーマとして行われた。「北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える」をワークショップの主題とした。ワークショップにおいて私は1グループのサポートについたのでその感想を述べる。

短時間における共同作業として皆さんよく協力して行っておられたと思う。本研修会の目標は、一つにはユニバーシティ・アイデンティティを明確にし、本学を受験生にアピールすることについて何らかの基軸をプロダクトから見出すということと、もう一つは、医療大のアイデンティティについて相互交流を通して新人に考えてということがあると思う。

いずれの目標についても、活発なコミュニケーションの中からよく練られた案が提出され、FDの実は上がったと考える。

(心理科学部 西澤 典子)

今年度の北海道医療大学全学FD研修<基本編>のテーマは、「学生を中心とした教育をすすめるために-ユニバーシティ・アイデンティティについて考える-」でした。高校生や新規入学者に本学のユニバーシティ・アイデンティティをどのように提示しアピールできるかを考え、材料を作成する作業を行いました。参加者はとても活発な議論のもと、どうアピールするかについて苦心していました。

ユニークで夢のあるキャッチフレーズやプロダクトが作成される中で、学部横断的に新任教員どうしが議論し、貴重な交流の場になっていました。午前中には学長から現状の北海道医療大学の説明とこれから教員としてどのような役割を担って欲しいかの要望が話され、本テーマの内容がその延長線上にあったことから研修全体の流れとしてもとてもスムーズであったと感じられました。

私自身も本大学をアピールするために、現状の業務+ $\alpha$ として何をすべきかについて問

い直す良い機会となりました。

(リハビリテーション科学部 山口 明彦)

最初のセッションで浅香学長から本学についての紹介があった。とてもわかりやすく本学の状況が説明されていたと感じた。グループ別の討議では、大学のブランディングをテーマに行われた。テーマ自体が取り組みやすいものであったせいもあるが、議論は活発に行われたと思う。また、今回はアイスブレイキングもよく機能したと思う。アイスブレイキング後は目に見えて、打ち解けた雰囲気になったと感じた。こういったテーマで議論すると、北海道医療大学の状況を客観的に評価でき、良いところも悪いところもそれなりに見えてきたのではないだろうか。

ブランディングといった、広報関係のことは教員が直接かかわることが今までは少ない分野であるが、これからは、教員も出張講義や、市民講座の開催などを通して、大学の広報に積極的に関与していくべきだと考えているので、非常に良いグループディスカッションができたと思う。

(大学教育開発センター 鈴木 一郎)

全学FD委員になって丸2年、タスクフォースとして5回目の研修会参加でした。今回のワークショップのテーマ「北海道医療大学のユニバーシティ・アイデンティティについて考える」は私が提案したテーマということもあり、積極的に関与できた研修会となりました。本学についてそれほど知識が無いにもかかわらず、新任の先生からは的確な指摘や斬新な発想が次々と出されました。また、グループワークの役割分担や作業に関しても、ファシリテーターの援助をほとんど必要としないほど、新任の先生方の進め方は適切で円滑でした。プロダクトの発表でも、各グループの個性が出ており、内容も面白く、よくまとまっておりました。

こうした若くて意欲的で優秀な人材が多数本学に加わることによって本学の教育能力がさらに向上するのでは、という期待を抱かせるような研修会でした。和気藹々の雰囲気も含めて、非常に楽しく有意義な時間を過ごすことができました。

(大学教育開発センター 薄井 明)

今回の研修では、Aグループのタスクフォースとして新任教員の方々とともに「本学のユニバーシティ・アイデンティティ」に関するグループ討議に参加しました。いずれのグループからも多学部多学科を有する本学ならではの“多職種連携”というキーワードが挙げられており、より実践的な多職種連携教育を担う立場にあること、そしてその役割と責任

の重さを改めて感じました。また、学長講話とも関連しますが、いかに学生を確保するかという広報活動の点においても活発な討論が行われておりましたので、是非とも学内の関係組織・委員会へ、この度の意見を繋げ、反映して頂きたいと思います。

午前中の「シラバス（授業計画）について」では、このたび新たに“作成要領についてのPDFファイル”が表示されるようになり、補足説明を必要に応じて各自で確認できるように改善されたことがレクチャーされました。

自身の担当する科目がどのディプロマポリシーに対応しているのか、各回の内容や達成目標が科目の到達目標とリンクしているのか等に留意しながら、より良いシラバスの作成に努めていこうと思います。

（歯学部附属歯科衛生士専門学校 杉原 佳奈）



ア ル バ ム



## アルバム



開会式



学長講話

「医療系総合大学教員としての使命と目標  
-新医療人育成の北の拠点を目指して-」



レクチャー

シラバス（授業計画）について

## ワークショップ① アイスブレイキング（グループづくり）



Bグループ



Dグループ

## ワークショップ② ワークショップ



Aグループ



Bグループ

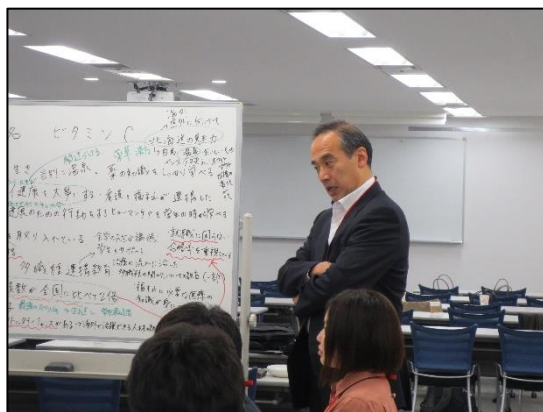


Cグループ



Dグループ

### ワークショップ③ グループ発表・質疑応答・全体討論



質疑応答が沢山あり、活気のある発表会でした



閉会式

FD 研修会（基本編）  
記念撮影



# 全学FD研修[テーマ編]

「学生を中心とした  
教育をすすめるために」

-多職種連携をすすめるための教育の構築-

期 日：平成30年8月3日（金）

会 場：当別キャンパス中央講義棟





## はじめに

全学FD委員長 志渡 晃一

平成30年度FD研修〈テーマ編〉を8月3日（金）午前9時50分から午後4時45分まで、本学キャンパス中央講義棟にて開催しました。研修のメインテーマを「学生を中心とした教育をすすめるために」、サブテーマを「多職種連携をすすめるための教育の構築」としました。これは本年4月に開催されたFD研修〈基本編〉と同一のテーマであり、「ボトム・アップ型相互研修」という形態も踏襲しました。学部ごとに、「多職種連携教育」の現状を報告し、それらを全体として共有し、各組織における実効性のある取り組みを具現化することを目指しました。ワークショップの成果として印象的だったことのひとつは「多職種連携教育についてふれている講義をリストアップし知見を共有し深化させていく」という実現可能な対策が提言されたことでした。「チーム医療の観点から教員としてできること」を推し進める上で公開授業の活用なども突破口となるという予感を持ちました。その他、得られた成果を報告書として纏めさせていただきます。ご照覧下されば幸いです。

今回の研修では、全学FD委員を含めて総勢50名弱の多数の参加を得ました。主催者の一人として、研修を順調に終えることができたことを嬉しく存じている次第です。学部横断的に交流が持てることは素晴らしいことであることを実感した次第です。他学部の先生方や事務の方々と関わる機会はなかなか得られないものです。たとえ短い間でも互いに向かい合える機会がもてたことは幸甚でした。開会の初頭には浅香正博学長から貴重な訓示を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。新設予定の学部の先生方にとってははまだ学生がいない段階でのご参加でした。お疲れ様でした。またありがとうございました。「多職種連携をすすめるための教育の構築」に向けて、多数の方々から現場の経験を踏まえた貴重な提言をいただきました。あらためて御礼を申し上げます。さらに事務方の笠原部次長、細川洋美さんからはいつもと変わらぬ支援をいただきました。この場を借りて感謝申し上げます。

# 平成30年度 全学FD研修〈テーマ編〉実施概要

メインテーマ：「学生を中心とした教育をすすめるために」

サブテーマ：「多職種連携をすすめるための教育の構築」

主催：全学FD委員会

開催日：平成30年8月3日（金） 9：50～16：45

開催場所：当別キャンパス 中央講義棟 C31 講義室[全体会]／C109 演習室[WS]

ディレクタ：志渡 晃一（全学FD委員長）

## 1. 研修目標

- 1) 教員相互に協働して職務を進めることができる。
- 2) 本学が求める方策を的確にとらえ、改善に結びつく行動をとることができる。
- 3) 大学としてのカリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーに沿った方策を策定できる。
- 4) 多職種連携を意識した教育活動を展開することができる。

## 2. 研修形態

- 1) ボトムアップの課題に対して能動的に活動する。
- 2) 大学全体の視点に立った作業、討論を行う。
- 3) 大学としての課題を全体で共有し、意見交換をする。
- 4) 提案について、具体性をもった方策として実現できる。

## 3. スケジュール

	【 担 当 】	【 会 場 】
9:40 参加者集合		C 3 1
9:50 開会 委員長挨拶	志渡委員長	↓
9:55 オリエンテーション (テーマ説明、日程説明ほか)	遠藤委員	
10:00 学長講話 「北海道医療大学がめざす多職種連携教育について」	浅香学長	
10:30 話題提供：各学部における多職種連携教育の取り組み		
① 薬学部	浜上准教授	
10:50 ② 歯学部	長澤教授	
11:10 休憩		
11:15 ③ 看護福祉学部	大友教授	
11:35 ④ 心理科学部	安部教授	

11:55	⑤ リハビリテーション科学部	吉田教授	↓
12:15	休憩 昼食		
13:00	ワークショップ WS①：オリエンテーション FD委員自己紹介 WS②：アイスブレイキング（グループづくり）	山口委員 山口委員	C 1 0 9 ↓
13:40	休憩		
13:45	WS③： ワークショップのすすめ方 ワークショップ「多職種連携のアドバンス教育科目をつくる」 グループワーク（100分） ※：科目のシラバス（案）の作成		
15:35	休憩		
15:45	WS④：グループ発表・質疑応答 全体討論	鎌田委員	
16:40	アンケート提出・修了証授与	志渡委員長	
16:45	閉会		↓

#### 4. 会場

\*集合から 学長講話、話題提供、昼食（休憩）までは、C 3 1 講義室で行なう。

\*ワークショップ（全体説明、グループ討議・発表、全体討論）は、C 1 0 9 演習室で行なう。

#### 5. FD委員の役割

FD委員はグループのオブザーバーとして適宜参加してアドバイスする。

- ・グループ作業の方法
- ・グループ作業の進行
- ・時間の進行
- など

## 6. 研修参加者

平成30年度 全学FD研修〈テーマ編〉 参加者名簿

[敬称略]

職名	氏名	所属学科・講座等	グループ
<b>薬学部</b>			
教授	平野 剛	実務薬学（実務薬学教育研究）	A
准教授	北浦 廣剛	生命物理科学（放射薬品化学）	D
講師	堀内 正隆	大学教育開発センター（物質・情報分野）	C
講師	原田 潤平	大学教育開発センター（物質・情報分野）	B
助教	野口 由香里	創薬化学（生薬学）	E
<b>歯学部</b>			
教授	長澤 敏行	総合教育学系（臨床教育管理運営）	C
教授	伊藤 修一	総合教育学系（歯学教育開発学）	B
准教授	高橋 伸彦	生体機能・病態学系（内科学）	D
准教授	豊下 祥史	口腔機能修復・再建学系（咬合再建補綴学）	E
准教授	松岡 紘史	口腔構造・機能発育学系（保健衛生学）	A
講師	川西 克弥	口腔機能修復・再建学系（咬合再建補綴学）	A
<b>看護福祉学部</b>			
准教授	木浪 智佳子	看護学科（母子看護学）	B
准教授	常田 美和	看護学科（母子看護学）	C
助教	高木 由希	看護学科（成人看護学）	E
助教	伊藤 加奈子	看護学科（成人看護学）	A
助教	増田 悠佑	看護学科（地域保健看護学）	D
教授	大友 芳恵	臨床福祉学科（社会福祉学）	E
助教	松本 望	臨床福祉学科（社会福祉学）	A
<b>心理科学部</b>			
助教	西郷 達雄	臨床心理学科	D
助教	河村 麻果	臨床心理学科	C
<b>リハビリテーション科学部</b>			
教授	泉 唯史	理学療法学科	C
講師	佐々木祐二	理学療法学科	D
准教授	坂上 哲可	作業療法学科	A
助教	児玉 壮志	作業療法学科	B
教授	木下 憲治	言語聴覚療法学科	D
准教授	福田 真二	言語聴覚療法学科	E
<b>新学部設置準備室</b>			
教授	幸村 近	（医療技術学部臨床検査学科）	E
教授	松尾 淳司	（医療技術学部臨床検査学科）	B
<b>学生</b>			
SCP	石黒 和彦	看護福祉学部看護学科 3年	A
<b>事務</b>			
	塚田 将人	学務部歯学課	B
	川崎 千佳	学務部看護福祉学課	C

参加者計 31

## 7. 研修スタッフ

	学長	浅香 正博
話題提供者	薬学部	浜上 尚也
	歯学部	長澤 敏行
	看護福祉学部	大友 芳恵
	心理科学部	安部 博史
	リハビリテーション科学部	吉田 晋
全学FD委員長	看護福祉学部	志渡 晃一
全学FD委員	薬学部	遠藤 泰
		泉 剛
	歯学部	會田 英紀
		荒川 俊哉
	看護福祉学部	福井 純子
	心理科学部	野田 昌道
	リハビリテーション科学部	山口 明彦
	大学教育開発センター	長谷川 敦司
		鎌田 禎子
	歯科衛生士専門学校	杉原 佳奈
事務担当	学務部教務企画課	笠原 晴生
	学務部IR課	細川 洋美

## 8. 提出物について（報告書の作成）

### 報告書等 原稿

- ① グループプロダクト WSについて、成果をまとめてください。  
ボリューム（分量）などに特に制約はありません。
- ② グループ代表の感想 WSについての感想を、400字程度でまとめてください。
- ③ 全学FD委員の感想 FD委員としての感想を、400字程度でまとめてください。

・提出期限：9月10日（月）

・提出先：学務部教務企画課 FD研修担当

・ [fd-kensyu@hoku-iryo-u.ac.jp](mailto:fd-kensyu@hoku-iryo-u.ac.jp)



平成30年度  
全学FD研修 <テーマ編>

学生を中心とした教育を  
すすめるために

- 多職種連携をすすめるための教育の構築 -



主催：全学FD委員会



平成30年8月3日（金） 当別キャンパス 中央講義棟

平成30年度  
全学FD研修 <テーマ編>

# 「開会式」



全学FD委員会

## 研修会開催の趣旨

### 研修会開催の趣旨

本学の教職員一人ひとりが自主性・創造性を発揮することにより「学生中心の教育」並びに「患者中心の医療」を推進しつつ、「21世紀の新しい健康科学の構築」を追究することが本学の行動指針である。

その実現のためにFD研修会を開催し、教職員の自覚を促すとともに「教育力」を高めることを本研修会の趣旨とする。

## 研修会スケジュール

### 研修会スケジュール

- 9:50 開会（C31講義室）  
委員長あいさつ
- 9:55 オリエンテーション（テーマ説明、スケジュール説明ほか）
- 10:00 学長講話 「北海道医療大学がめざす多職種連携教育について」 浅香 正博 学長
- 10:30 話題提供 「各学部における多職種連携教育の取り組み」  
①薬学部 ②歯学部 ③看護福祉学部 ④心理科学部 ⑤リハビリテーション科学部
- 12:15 昼食・休憩
- 13:00 ワークショップ（C109演習室）  
WS① オリエンテーション  
WS② アイスブレイキング（グループ作り、自己紹介など）
- 13:40 休憩
- 13:45 WS③ ワークショップのすすめ方  
グループワーク「多職種連携のアドバンス教育科目をつくる」
- 15:35 休憩
- 15:45 グループ発表・質疑応答、全体討論
- 16:40 アンケート提出、修了証授与
- 16:45 閉会

## 学長講話



北海道医療大学

学長 浅香 正博

北海道医療大学がめざす  
多職種連携教育について

## 話題提供

「各学部における  
多職種連携教育の取り組み」

## 昼食・休憩

お茶とお弁当があります。



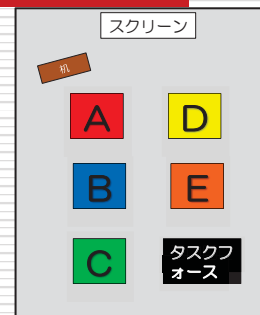
次のワークショップの開始：**13:00**  
(時間厳守)

**12:58** までに、  
C109演習室（中央講義棟 10F）に  
お集まりください。

平成30年度 全学FD研修（テーマ編）  
平成30年8月3日（金） 当別キャンパス

各グループの場所にお座り下さい。

・お茶とお菓子は  
自由にお取り下さい



主催：全学FD委員会

平成30年度  
全学FD研修（テーマ編）

ワークショップ

多職種連携の  
アドバンス教育科目をつくる



主催：全学FD委員会



平成30年8月3日（金） 当別キャンパス

## 休憩



休憩時間 13:40～13:45

(時間厳守でお願いします)

**13:45** までに、  
当会場へお集まりください。



## ワークショップ解説

## 作業解説



## 休憩



休憩時間 15:35~15:45

(時間厳守をお願いします)

**15:43** までに、

当会場へお集まりください。

## グループ発表

## アンケート

### 研修の評価 (総合ポストアンケート)

皆さんの感想をお聞かせください。  
書き終わった方は、手を上げてください。

## 提出物について

- グループプロダクト
    - WSについて、成果をまとめてください。  
ボリューム(分量)などに特に制約はありません。
  - グループ代表の感想
    - WSについての感想を、400字程度でまとめてください。
  - 全学FD委員の感想
    - 全学FD委員としての感想を、400字程度でまとめてください。
- 
- 提出期限・提出先
    - 提出期限：9月10日(月)
    - 提出先：学務部教務企画課 FD研修担当  
\* fd-kensyu@hoku-iryo-u.ac.jp

平成30年度  
全学FD研修（テーマ編）

---

# 「閉会式」

修了証授与



---

全学FD委員会

平成30年度  
全学FD研修（テーマ編）

---

# お疲れさまでした

ネームホルダーをお返し下さい。

**忘れ物はないですか？**



学長講話

北海道医療大学がめざす  
多職種連携教育について



## 北海道医療大学がめざす多職種連携とは？



## 医学、医療とは？

- 病気があって**医学**が生まれ、病人のために**医療**がある。
- **医学**とは学問のことであり、病気の種類や治療法などを研究したり学んだりすることである。それに対して、**医療**は実際に患者に対して施す治療のことを指す。
- **医学**は科学である。しかし、**医療**は科学ではなくアートである。

## 医学の歴史1

- 人類が誕生して以来、病気とは超自然的な現象と捉えられていたので治療は呪術師によって行われていた。
- 医学は3大文明の発祥地で発展した。
- **メソポタミア**（紀元前1100年ころ）  
聖職者によって医療が行われていた。宗教的な医術であった。
- **中国**（紀元前1500年ころ）  
漢方医学の基礎になる薬物学と鍼灸医学が発展した。

## 医学の歴史2

- **エジプト医学**（紀元前2000年ころ）
  1. 医師であるイムホテプが医学校を創設。
  2. 医療は無料であった。
  3. 衛生学の知識が普及。
  4. 心臓の働きも熟知していた。
  5. 脳の形状も理解していた。
  6. 不可思議な外部の要因が体内に侵入して体液を損傷することによって病気が起こる。
  7. 薬剤学、外科学の基礎ができあがっていた。

## 医学の歴史3

- **ギリシア医学の進展**（紀元前460年）
- 医聖**ヒポクラテス**の業績
  1. 医学を迷信や呪術から切り離し、臨床と観察を重んじる科学へと発展させた。
  2. 医師の倫理性と客観性を重要視し、医師の誤りを犯す可能性を最小限に止めようとした。
  3. 病気は様々な体液の不均衡によって生じる。
  4. 自然治癒を助ける治療を行う。: Do no harm!

## ヒポクラテスの誓い(抜粋)

- 私は能力と判断の限り患者に利益すると思ふ養生法をとり、悪くて有害と知る方法を決してとらない
- 頼まれても死に導くような薬を与えない。
- 同様に婦人を流産に導く道具を与えない。
- いかなる患者を訪れる時もそれはただ病者を益するためであり、あらゆる勝手な戯れや墮落の行いを避ける。女と男、自由人と奴隷の違いを考慮しない。
- 医に関する否とにかかわらず他人の生活について秘密を守る。

## 医学の歴史4

- ローマ帝国の医学
- **ガレノス**:ローマ帝国時代のギリシアの医学者(130-200年ころ)
- ヒポクラテス医学を発展させ、解剖などによる実験的証明という方法を導入した。
- ギリシア医学の集大成を行ったことにより、彼の学説は以後1500年にわたってヨーロッパ医学の基礎を構成した。



## 医学の歴史5

- **ルネサンスの医学(16世紀)**
- **ヴェサリウス**:ベルギーの医学者
- 人体解剖を自ら行い、1543年ファブリカという名前の人体解剖図譜を出版した。
- **パレ**:フランス人の医学者
- 1545年、軍医の手引き書を著した。
- 近代外科学の父と呼ばれる。



## 医学の歴史 6

- 1628年イギリス人**ハーヴェイ**によって血液循環の仕組みが解明された。
- 1796年イギリス人**ジェンナー**によって天然痘予防接種法が開発された。・・・天然痘の絶滅
- 1847年ハンガリー生まれの**ゼンメルワイス**は産褥熱の原因は感染であることをつきとめ予防としての手洗いを奨励した。
- 1870年**パスツール**と**コッホ**は多くの病気が微生物による感染症によって引き起こされることを証明した。

## 医学の歴史 7

- 1895年イギリスの**レントゲン**によってX線が発見された。最初のノーベル賞受賞。
- 1928年イギリスの **Fleming**によってペニシリンが発見された。
- 1967年最初の心臓移植が南アフリカで行われた。

## 医学の歴史 8

- 1980年天然痘撲滅宣言。
- 1981年HIVの発見
- 2003年、ヒトゲノムプロジェクト完成。
- 2007年、**山中教授**によるiPS細胞を生成する技術の発表。

## 狂気の戦時医学: ナチスによる人体実験

- ナチドイツによる強制収容所での人体実験
  1. 毒物摂取
  2. 低圧、酸欠下
  3. 低体温、冷却
  4. 発疹チフスのワクチン接種
  5. 飢餓

## ヘルシンキ宣言〔抜粋〕

1964年フィンランドのヘルシンキで採択された、医学研究者が自らを規制する為に採択された人体実験に対する倫理規範。正式名称は、「ヒトを対象とする医学研究の倫理的原則」である。

- 患者、被験者の福利の尊重
- 本人の自発的・自由意思による参加。
- インフォームド・コンセント取得の必要。
- 倫理審査委員会の存在
- 常識的な医学研究であること。

## 緒方洪庵の医戒抜粋

- 医の世に生活するは人の為のみ、おのれがためにあらずといふことを其業の本旨とす。
- 安逸を思はず、名利を顧みず、唯おのれをすて、人を救はんことを希ふべし。
- 人の生命を保全し、人の疾病を復治し、人の患苦を寛解する外他事あるものにあらず。

## 米国医療の特徴

- 医療レベルは極めて高い。
  - 大病院のベッドあたりの医師数はわが国の3倍、ナースの数は6倍も多い。
  - 医療費は飛び抜けて高額。
  - 公的保険制度が未発達
    - メディケイド: 高齢者および障害者対象
    - メディケア: 低所得者層
- 一言で言えば**市場経済型医療**である。

## 米国における医療保険

- 医療保険に加盟していない人が4600万人もいる。毎年4万人以上が医者にかかれなため死亡している。
- オバマ大統領の改革により、2014年より新たに3200万人が**民間保険**に加盟することになった。このため莫大な税金が投入されることになり、中間選挙で敗北した。
- トランプ大統領はオバマケアを廃止する方針である。

## 英国医療の特徴

- ・ 公的医療保険制度を1948年に導入した。
- ・ 患者の自己負担がなく、すべて税金でカバーした。“ゆりかごから墓場まで”保証
- ・ NHS( National Health Service)の発足
- ・ かかりつけ医(GP)制度: 症状にかかわらずまずはGPを受診しなければならない。
- ・ GPからの紹介で二次医療専門の公立病院を受診する。

## 英国医療の問題点

- ・ GPに予約を取るだけで数週間かかる。
- ・ GPからの紹介で、二次病院の予約を取る場合は数ヶ月かかる場合が多く、癌患者が待機中に亡くなるケースが発生している。
- ・ 股関節の手術は数年の待機が普通。
- ・ お金のある患者は自費受診か他の国の病院を受診するようになった。

## 医療費の患者負担について

### 【医療費の患者負担割合】

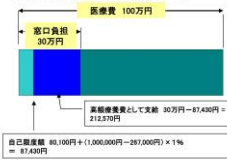
一般・低所得者 現役並み所得者



### ※高額療養費制度

家計に対する医療費の自己負担が適量なものとならないよう、月ごとの自己負担限度額を超えた場合に、その超えた金額を支給する制度。

<一般的な例 被用者本人(3割負担)のケース>



※ 平成20年4月から70歳以上75歳未満の窓口負担は1割に引き上げられていたが、平成26(注) 自己負担限度額は、被保険者の所得に応じ、一般・上位所得者・年4月以降新たに70歳になる高齢者等から段階的に引上げとなる。

## 日本の医療の特徴

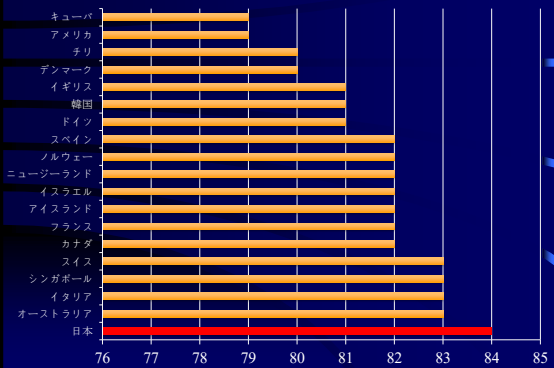
- ・ 世界一の長寿国であり、乳児死亡率も世界一低い。
- ・ 医療の質が高い。
- ・ 医療費が安い。・・・国民皆保険制度のおかげ
- ・ アクセスが自由である。・・・大学病院にも紹介状なしでかかれる。
- ・ 先進国中、総医療費(対GDP比)は最も低い。

## 盲腸手術の入院費用総額 (AIU保険調べ)

- ・ 日本：手術後5日入院：30万円 (支払いは10万円弱)
- ・ 香港：手術後4日入院：152万円
- ・ 英国：手術後5日入院：114万円
- ・ 米国：手術後1日入院：220万円

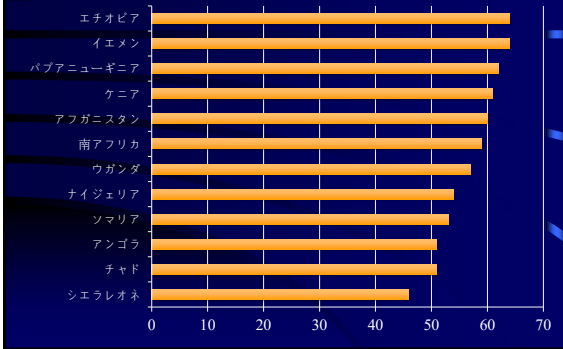
米国ニューヨーク病院の個室の費用は、1日15万円からである。

## 平均寿命(2014)

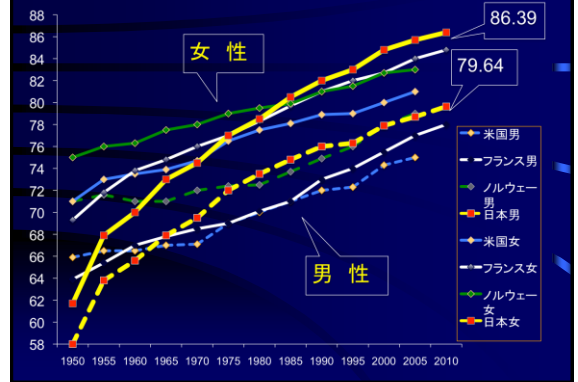




## 平均寿命(2014)



## 主要先進国における平均寿命の推移



## 主な国の健康寿命

WHO 2015年

日本	74.9歳 (1)
韓国	73.2歳 (3)
フランス	72.6歳 (7)
米国	69.1歳 (36)
中国	69.5歳 (41)

わが国は平均寿命のみならず健康寿命においても世界一である。

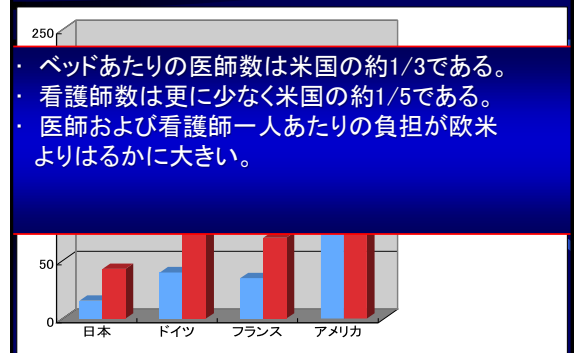
カッコ内は165カ国中の順位



## 医療提供体制のわが国の現状

- ・ ベッド数は多く、在院日数が長い。  
出来高払いでは機能していたが、DPCでは収入減が必至。
- ・ ベッドあたりの医師数、看護師数が極端に少ない。
- ・ 欧米の病院に比して、患者の管理に十分なマンパワーが不足している。

## 医療提供体制の各国比較



- ・ ベッドあたりの医師数は米国の約1/3である。
- ・ 看護師数は更に少なく米国の約1/5である。
- ・ 医師および看護師一人あたりの負担が欧米よりはるかに大きい。

## 日本の医療のもう一つの問題点

### ー チーム医療について ー

- ・ チーム医療とは、一人の患者に複数のメディカルスタッフ(医療専門職)が連携して、治療やケアに当たることである。
- ・ 病院では、様々な職種 of メディカルスタッフ が働いている。

## 多職種連携

- ・ こうした異なる職種のメディカルスタッフが連携・協働し、それぞれの専門スキルを発揮することで、
- ・ 入院中や外来通院中の患者の生活の質(QOL)の維持・向上、患者の人生観を尊重した療養の実現をサポートすることが重要である。
- ・ これが多職種連携の真の目的である。

## 多職種連携によるチーム医療とは？

- ・ 従来は**医師**が中心となって医療業務を形成していたが、近年は医師の下につくのではなく、それぞれの医療従事者が互いにフィードバックしながら医療を行い、最善の医療を施すという考え方に変わってきている。
- ・ 医師とコメディカルとの壁も取り去り医療チームを作り、医療を行うというのが現在の主流になってきた。

## 緒方洪庵の医戒抜粋

- ・ 医の世に生活するは人の為のみ、おのれがためにあらずといふことを其業の本旨とす。
- ・ 安逸を思はず、名利を顧みず、唯おのれをすて、人を救はんことを希ふべし。
- ・ 人の生命を保全し、人の疾病を復治し、人の患苦を寛解する外他事あるものにあらず。

学長講話

「北海道医療大学がめざす多職種連携教育について」

学長 浅香 正博

《メモ》



話題提供

各学部における  
多職種連携教育の取り組み

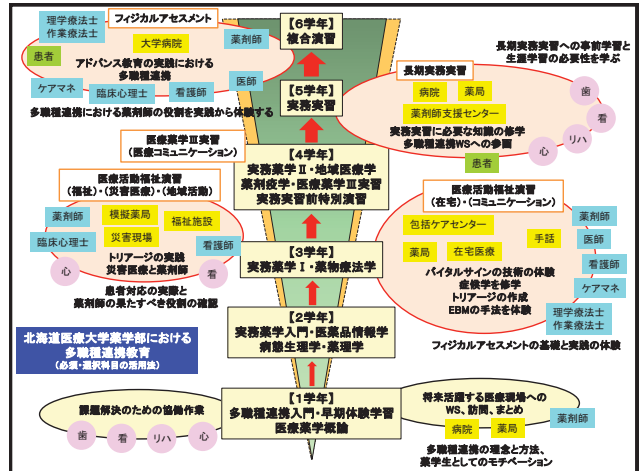


平成30年度 全学FD研修  
平成30年6月9日(金)

## 薬学部における 多職種連携への取り組み



薬学部 浜上 尚也



### 個体差健康科学・多職種連携入門

#### 作業療法学科との協働

#### 【日程】

- 9:00 ガイダンス
- 9:00 作業療法士のお仕事
- 9:20 薬剤師のお仕事
- 9:30 **課題説明**
- 9:40 ワークショップの説明
- 9:50 **ワークショップ開始**
- 10:20 休憩
- 10:30 ワークショップの続き
- 11:10 プロダクトの発表
- 11:50 終了

### 患者さん情報

氏名：阿部 由紀子 20歳 女性 スキージャンプ選手

疾患名：前十字靭帯損傷(右)

状況：

スキージャンプ練習中、着地に失敗し、前十字靭帯損傷(右)、下顎骨折を受傷した。札幌の総合病院に受診し、すぐ入院となり手術が行われた。術後3日間は、足に荷重をかけないように医師から告げられた。下顎骨折は上下の歯列をワイヤーで結ぶ顎間固定が施行された。精神的な落ち込みも生じている。術後1週間、リハビリテーション目的で北海道医療大学病院に転院となった。入院後ただちに、医師から理学療法、作業療法を勧められ、リハビリ開始となった。入院期間は一か月を予定している。

通常のバイタルサイン：

脈拍：68回/分 血圧：121/60mmHg 体温：36.5℃ SpO2:98% 体重42kg

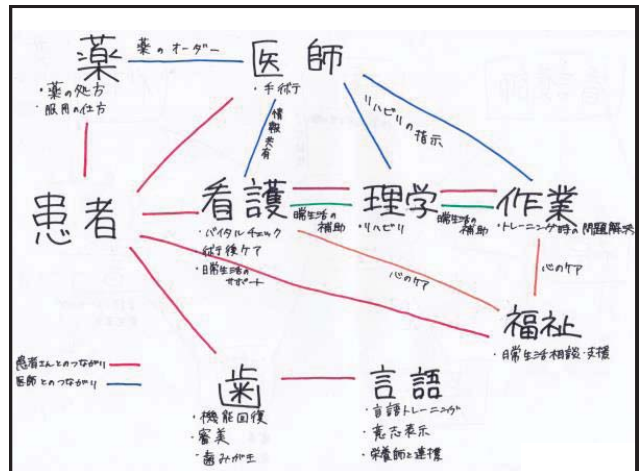
服用薬剤：

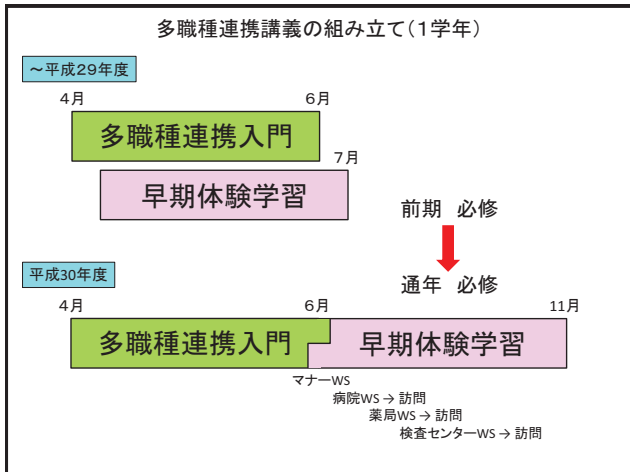
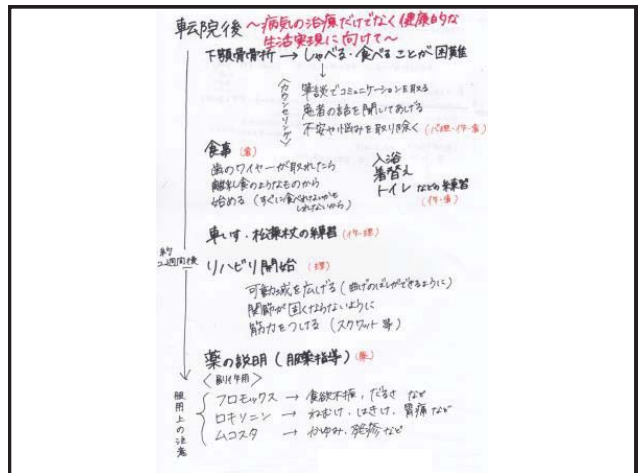
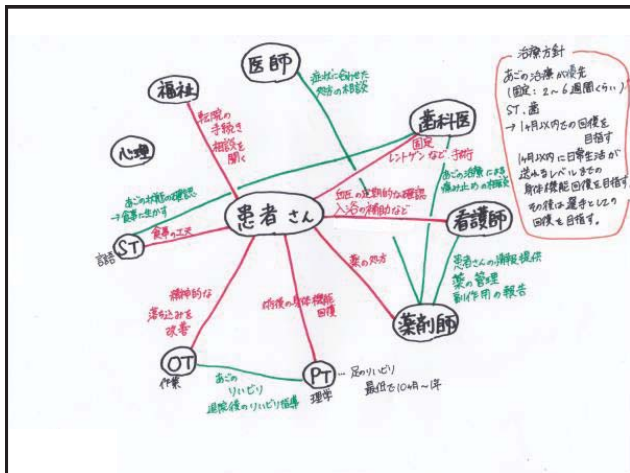
Rp1	ロキソニン錠60mg	1回1錠(1日3錠)
	フロモックス錠100mg	1回1錠(1日3錠)
	ムコスタ錠100mg	1回1錠(1日3錠)
		1日3回 朝昼夕食後 7日分

### 課題(目標)

この患者さんに、どのように、  
チーム医療をしていくか？

グループで考え、発表する。





**医療福祉活動演習(在宅)**

3学年 通年 選択科目【SGD, PBLを含む】1単位

**【概要】**  
 今後薬剤師の果たす役割の中で、在宅医療への取組は重要な位置を占める。薬剤師として在宅医療に必要な知識を習得するために、バイタルサイン及び一次救命を修得する。さらに、在宅医療の現場で、薬剤師がどのような職能を發揮するかについて実際の現場に参加をする。さらには、現場での多職種連携について学ぶ。

**【全体目的】**  
 近年、医療職による在宅医療への参画が必須となつてきており、患者の体調急変に対応する能力、各種のバイタルサインや生活環境から病因を推測し一人ひとりの治療をサポートできる能力を有する医療職の育成が急務となっている。薬学教育においても、より実践的な臨床知識、技能を学ぶことの重要性が増しており、とくに実務実習(臨床実習)の事前学習において、一次救命処置、フィジカルアセスメントについて学修することは、各学生の臨床実習の理解をいっそう深めるとともに、これまで学修してきた専門知識の定着をはかることができるものと期待される。そのためには、様々なシーン、シナリオ、病態を想定した、より実際に近い体験実習・実技実習をおこなうことが極めて効果的であり、また、より学修効果を高めるために、学生一人ひとりが実際に想定した状況にたつことができるよう、少人数グループによるグループワークなどの能動型学習とすることが必須である。

**【学習目標】**

- ☆在宅医療とは何かを説明できる。
- ☆在宅医療に必要な学問及び技術を、身につける。
- ☆患者を中心とした多職種連携について、体験する。
- ☆セルフメディケーション及びフィジカルアセスメントについて説明できる。
- ☆一時救命処置について、必要な判断と実施することができる。
- ☆代表的な疾患の患者情報の収集と臨床判断を行うことができる。

回	テーマ	授業内容および学習課題
1~3	在宅医療(1) 1. 在宅医療とは 2. 在宅医療に必要な知識 3. 在宅医療の必要性	<ul style="list-style-type: none"> <li>●在宅医療について概説できる。</li> <li>●在宅医療に必要な知識について説明できる。</li> <li>●在宅医療の必要性について説明できる。</li> </ul>
	在宅医療(2) 1. 在宅医療の実際 2. 在宅医療と介護保険 3. これからの在宅医療	<ul style="list-style-type: none"> <li>●在宅医療の実際について説明できる。</li> <li>●介護保険制度について説明できる。</li> <li>●これからの在宅医療について概説できる。</li> <li>●地域包括ケアシステムについて概説できる。</li> </ul>



2. 在宅医療についてのくわい知っていますか。

①知っている  
②少し知っている。  
③聞いたことがある。  
④全く知らない。

ブレアアンケート

① 39%  
② 56%

ポストアンケート

全員が①の「知っている」を選択した。

□ 実際に末期がん患者さんのターミナルケアでどんなことを行ったりかなり詳しく話してくださり、普段教科書や授業で知ることのできないがん治療の話や痛みをとる方法や患者さんが気持ちよく毎日過ごす工夫を学ぶことができた。

□ 在宅医療では、薬剤師だけでなく医師や看護師、他のたくさんの人たちが一人の患者さんに関わって連携してはじめて成り立つものであると感じた。

□ 薬剤師が在宅医療に貢献できることは、想像していたより多かった。

□ 「医師には話しにくいけど、薬剤師には気軽に話せる」といった関係を築き患者さんが自分を信頼してくれるように、自分も患者さんに寄り添いながら医療を提供できる薬剤師になりたい。

回	テーマ	授業内容および学習課題
4～6	一次救命救急 1. 異物除去 2. 心肺蘇生法	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 一次救命を行うための知識について概説できる。</li> <li>● 異物除去の方法について説明できる。</li> <li>● 心肺蘇生法について説明できる。</li> </ul> <p>資格：赤十字ベーシックライフサポーター取得</p>

5. 一次救命救急の知識は必要だと思いますか？

①思う。  
②思わない。  
③わからない。

ブレアアンケート

① 44%  
② 36%

ポストアンケート

全員が①の「思う」を選択した。

□ 医療系大学へ通っていても、一次救命処置についてはAEDの使用法を含め知ることはなかったが、医療人としてではなく一般の人でも一次救命については学ぶ必要があると感じた。

□ この演習を終え、心肺蘇生法やAEDの使用法を学んだ今自分のできることが広がったように思えます。

□ 実際に心肺停止の現場に出会っても、他の人より慌てずに対応できると思う。

ケーススタディ

今週の演習の準備をさせた後、必ず振り返り課題出し、ご褒めください。

氏名: \_\_\_\_\_

こんなとき、あなたはどのようにしますか？

事 例

○ 帰省設定

- ・ あなたは、「北海道医療大学駅」にいます。
- ・ ホームで電車を待っている時に年配の男性が突然倒れ、ホームに横たわっています。
- ・ あなたならどうしますか？

○ 男性の状況

- ・ 顔は青白く、顔には乾んだときにできた腫れ腫れが多少少し出血している。
- ・ 声をかけても反応はない。
- ・ 呼吸をしているようだが、いつもと違うような呼吸をしている。

受講前

① いま(講習前)あなたは、事例についてどう対応しますか？

- ✓ 救急車を呼ぶ
- ✓ 近くの人に、協力を求める
- ✓ 止血をする

受講後

② 講習を終え、あなたは、今(事例)についてどう対応しますか？

- 周囲の状況を観察する
- 呼吸や反応を確認する
- 周囲の人に協力を求め、AEDと救急車を要請する

回	テーマ	授業内容および学習課題
7～9	フィジカルアセスメント 1. 血圧、心拍数の測定 2. 心音、肺音、腸音 3. 病態とバイタルサイン	<ul style="list-style-type: none"> <li>● バイタルサインについて概説できる。</li> <li>● バイタルサインの測定方法について説明できる。</li> <li>● 病態とバイタルサインの変化について説明できる。</li> <li>● 心音、肺音、腸音の観察方法について説明できる。</li> <li>● 病態時の心音、肺音、腸音の変化について説明できる。</li> </ul>

7. 薬剤師が仕事の一環として、フィジカルアセスメントを行っていることを知っていますか？

①知っている。  
②少し知っている。  
③聞いたことがある。  
④全く知らない。

ブレアアンケート

① 17%  
② 18%  
③ 50%  
④ 17%

ポストアンケート

① 35%  
② 65%

□ 測ったデータから処方された薬剤が有用であったか、適切な薬物療法になっているかを薬学的知見から評価し問題があれば対応方法を医師に提案するなど患者を中心としたチーム医療において重要な役割を担っていることがわかった。

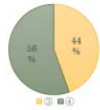
□ フィジカルアセスメントを行うことで患者さんの身体状況がわかり、加えて生活環境、服薬状況からその患者さんに最も適した処方を医師に提案するきっかけになるのではないかと思います。

□ 患者さんの状態を詳しく把握することができ、その情報をどのように生かすか学ぶことができてよかった。何よりも患者さんとのコミュニケーションが一番大切ということが改めて分かった。

回	テーマ	授業内容および学習課題
10～12	症候学(1) 1. 症候学とは、 2. 症状と疾病	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 症候学とは何かを概説できる。</li> <li>● 症状から疾病を推察し、説明できる。</li> </ul>
	症候学(2) 1. 患者情報 2. トリアージ 3. 受診動機	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 頭痛からの臨床診断について説明できる。</li> <li>● 腹痛からの臨床診断について説明できる。</li> </ul> <p>【PBL, SGD】</p>

8. 症候学を聞いたことがありますか？（ブレアンケートのみ）

- ①知っている。
- ②少し知っている。
- ③聞いたことがある。
- ④全く知らない。



15. 薬剤師にとって、症候学は必要だと思いますか？（ポストアンケートのみ） 全員が①の「思う」を選択。

- 今までは病気ごとに症状を学んでいたが、症状から病気を特定することは難しいことを知った。
- これからの大学の講義で学ぶべきこと、薬剤師を目指す上で必要になることを具体的に考えさせられる講義であった。
- 薬局薬剤師は、地域のチーム医療への参加、プライマリケアの担い手になることが求められることを知った。
- 薬剤師が新たな任務を担うことで、医療費削減や患者へのより良い医療の提供を行う必要性を感じた。
- 普段から他の人と考えを言い合ったり、助言を求められる関係づくりも大切なのかなと思いました。症候から疾患を推測するのはとても難しかったけれど、とても貴重な体験でとても楽しかったです。

回	テーマ	授業内容および学習課題
13	在宅医療現場を探る 1. 事前学習 2. 多職種連携	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 在宅医療における薬剤師の役割について説明できる。</li> <li>● 在宅医療における多職種連携について概説できる。</li> </ul> 【PBL, SGD】
14～15	在宅医療現場を体験する 1. 在宅医療の実際 2. 地域包括ケア	<ul style="list-style-type: none"> <li>● 在宅医療におけるアセスメントとプランニングについて説明できる。</li> <li>● 在宅医療における薬剤師の役割について説明できる。</li> <li>● 在宅医療における多職種連携について概説できる。</li> </ul>

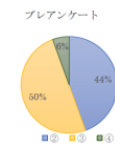


### 在宅訪問同行 予定表

	1 9:30~10:30	2 11:00~12:00	3 13:30~14:30	4 15:00~16:00
12/21(木)	利用者 福O (女性)	山O和 (女性)	水O (夫婦)	斉O CM (女性)
学生	安△ □△	△東 由△藤 △谷 △杉	□△ △夏	△田 □△子 △谷 □ △平
教員			藤崎博子	及川幸司
12/22(金)	利用者	玄O (男性)	藤O (男性)	
学生		△達 真△ △津 翔 △田 夏△	△田 △□V	
教員			岩尾 一生	
12/25(月)	利用者 香O (男性)	山O和 (女性)	玄O (男性)	安O (女性)
学生	□△ 美△	△上 △□	△藤 □△	関△ □△ (後援アセスメント)
教員				
12/28(木)	利用者	関O (女性)	久O (女性)	関O CM (女性)
学生		△田 修△ △□ △小△	△田 忍△ □△ 響△	谷△ 俊△ □△ 響△
教員			木村 治 櫻田 渉	浜上 尚也

3. 薬剤師と在宅医療の関わりについてどのくらい知っていますか？

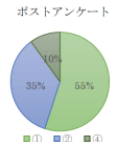
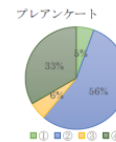
- ①知っている。
- ②少し知っている。
- ③聞いたことがある。
- ④全く知らない。



ポストアンケート  
全員が①の「知っている」を選択した。

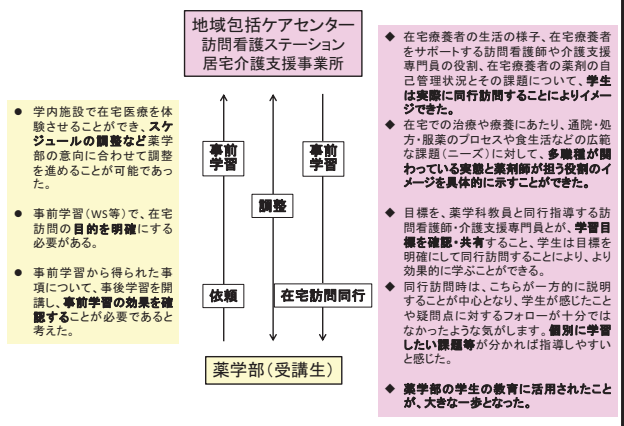
4. 将来、在宅医療に関わってみたいと思いますか？

- ①思う。
- ②少し思う。
- ③思わない。
- ④わからない。



- 患者さんから新たに知れた情報をその患者に関わる他の医療従事者へ患者さんの代わりに伝えてあげることによって患者さんも安心することができることを学んだ。
- 実際に在宅見学に行って、想像以上に残薬があり大変驚いた(ベッドの下から2012年の錠剤が1ヶ月分も出てきた)。
- 在宅医療を行うにあたって大切なことは、患者さん、その他の関係者と身体関係を築くこと、その全員で治療すること、また患者さんの性格、生活に合わせて行うことだと学んだ。
- 患者さんにとって負担が一番少なく、その患者さんに最も適切な治療を施すことができるのが在宅医療なのかかもしれないと考え方が変わった。
- 実際に在宅見学をすることで多職種間の連携の大切さをより感じた。医師、薬剤師、看護師、ヘルパーなどそれぞれにしかできない仕事、してはいけない仕事があり、そこを上手く連携しないと在宅医療は成り立たないことを実際に見学することで学んだ。
- 「実際に在宅に薬剤師が入って邪魔じゃないですか。」と聞いたら、看護師さんはすごく入ってほしいと言っていた。理由としては、薬のことを任せたい薬を飲んでくれない人に対して、実際にその人を見て対策などを考えてほしいと言っていた。
- 訪問した方は薬が多いと悩んでいると聞き、看護師では対応できない薬剤師なら解決できる問題もいくつかあると学んだ。
- 薬剤師は在宅に積極的に関わっていかなくてはならないと感じたので、患者さんのために役立てる薬剤師になりたいと思った。

### 学部と施設間相互の効果と課題



- 学内施設で在宅医療を体験させることができ、**スケジュールの調整**など薬学部の意向に合わせて調整を進めることが可能であった。
- 事前学習(WS等)で、在宅訪問の**目的を明確**にする必要がある。
- 事前学習から得られた事項について、事後学習を開講し、**事前学習の効果を確認**することが必要であると考えた。

- ◆ 在宅医療者の生活の様子、在宅医療者をサポートする訪問看護師や介護支援専門員の役割、在宅医療者の薬剤師の自己管理状況とその課題について、**学生は実際に同行訪問することによりイメージできた。**
- ◆ 在宅での治療や療養にあたり、通院・処方・服薬のプロセスや食生活などの広範な課題(ニーズ)に対して、**多職種が関わっている実態と薬剤師が担う役割のイメージを具体的に示す**ことができた。
- ◆ 目標を、薬学科教員と同行指導する訪問看護師・介護支援専門員とが、**学習目標を確認・共有**すること、学生は目標を明確にして同行訪問することにより、より効果的に学ぶことができる。
- ◆ 同行訪問時は、こちらが一方的に説明することが中心となり、学生が感じたことや疑問点に対するフォローが十分ではなかったような気がしています。**個別に学習したい課題等**が分かれれば指導しやすいと感じた。
- ◆ **薬学部の学生の教育に活用された**ことが、大きな一歩となった。

16. 本演習で受講した内容は将来の薬剤師の仕事に役立つと思いますか？(ポストアンケートのみ)
- ①思う。
  - ②少し思う。
  - ③思わない。

全員が①の「思う」を選択。

＜ポストアンケート感想＞

■受講した感想

- ・薬剤師になってから、やりたい仕事が増えた。
- ・症候学をもっとやりたい。
- ・今までの授業の中で、一番実践的なことをできた。
- ・一次救命救急、バイタルサインなど学べてよい経験になった。
- ・受けてよかったと思う授業ばかりでした。
- ・在宅の薬剤師の役割は思っていたより重要であり、やりがいを感じた。
- ・普段の授業で習えないことができて良かった。
- ・これから薬剤師を目指すうえで、とても学ぶことが多く、受講してよかった。

■受講したい講義

- コミュニケーション能力を上げる講義(1名)
- 症候学(5名)
- バイタルサイン(1名)

在宅医療とは、(学生自身の考え)

- 職業によってできることが違うため多職種で連携をしていく必要があるが、一つの職業でできることをもう少し降らすことができれば患者の負担を減らすことができると考える。
- 医師や看護師、薬剤師、ケアマネジャーなどのすべての医療職の人が連携することがとても大切だと思います。情報の共有はもちろん、意見交換を密に行うことでより良い医療を提供できると思います。
- より医療に詳しい医療従事者が患者個人について知り、よりその人の現状にあった医療を互いの専門性を生かしつつ協力して提供するということが本当に必要とされる医療の形である在宅医療であると思う。
- 週に何回か在宅医療を行っている患者さんでこの日は看護師さん、この日は薬剤師など異なる職種がそれぞれ訪問する際にはチームとして多職種が連携して密に情報を交換するべきであると考えます。

医療福祉活動演習(コミュニケーション)

3学年 後期 選択科目【SGD, PBLを含む】1単位

【概要】

わが国の医療を取り巻く環境の変化は大きく、2025年には超高齢社会を迎えようとしている。薬剤師は、医療人として今まで以上に地域社会とのかかわりが大きくなり、かつそのニーズも高まっている。患者との接遇においてそのコミュニケーション能力が質の高い医療につながるばかりでなく、多職種連携における薬剤師としての役割を發揮するためにもコミュニケーション能力を高めることが必要である。

本演習においては、医療・福祉施設等において薬剤師が遭遇するさまざまなシーンを想定し、状況に応じたコミュニケーションができるよう手話などの体験学習を通じて学ぶとともに地域社会における薬剤師の役割の将来性について総合的に学ぶ。与えられた課題のみならず、自らがSGD及びPBLにより課題を発見し、それを解決する能力を高め、医療人として社会に貢献しようとする意識を高める。

【学習目標】

- ☆手話を用いて自己紹介ができる。
- ☆手話を用いて数などを表現できる。
- ☆手話の基本文法について説明出来る。

医療福祉活動演習(福祉)【福祉コース】

3学年 後期 選択科目【SGD, PBLを含む】1単位

【概要】

福祉施設等における体験学習を通じて、医療人としての素養を養成することねらいとする。近年の医療社会は大きく変貌し、薬剤師は医療人として今まで以上に社会とのかかわりが大きくなった。とくに福祉や地域社会における薬剤師の役割が非常に重要なものとなってきている。本演習では、薬剤師の医療・福祉施設などにおける活動を理解するために、講義だけではなく、現場における集中的な体験学習を通じて、地域社会における薬剤師の役割とその将来性について総合的に学ぶ。

本年度は、本学OBが所長を務める「社会福祉法人ゆうゆう」における福祉活動体験学習を軸として、ワークショップを通じた事前学習、報告発表会を通じた事後学習を含めた一連の授業を通じて、医療・福祉にかかわる知識のみならず、チームワーク、コミュニケーション、プレゼンテーション能力などを総合的に学習する。

【学習目標】

- ☆自らが問題発見、問題解決に向け、自発的に学習する態度・能力を醸成するとともに、障がいを持つ人などとの触れ合いを通じて、医療人としての適切なコミュニケーション能力を身につける。
- ☆グループ学習を通じて課題をまとめ発表するプレゼンテーション能力を身につける。

3学年 通年 選択科目【SGD, PBLを含む】1単位

医療福祉活動演習(在宅)

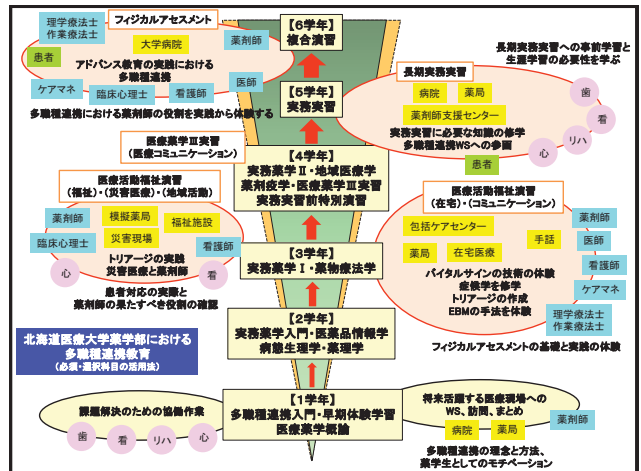
医療福祉活動演習(コミュニケーション)

医療福祉活動演習(福祉)【福祉コース】

医療福祉活動演習(福祉)【地域活動コース】

医療福祉活動演習(福祉)【災害医療コース】

医療従事者を越えた多職種連携も



多職種連携教育 (IPE: Interprofessional education) の  
展開にあたって

- ✓ 自身の専門性(仕事)や責任、他(多)職種の専門性(仕事)を知ることが大切
- ✓ 講義科目において、一度に多職種を関連付けることは難しい
- ✓ プラスαのツールを身につけることの必要性
- ✓ 現場で感じ取ることの重要性

課 題  
(目 標)

多職種連携講義・実務実習を生かした  
アドバンス教育の展開  
(成長を評価する場面)

チーム医療についての展開

IPE から  
IPW (Interprofessional work) への展開  
(卒後教育・生涯学習)

# 歯学部における多職種連携教育

2018/8/3  
北海道医療大学歯学部

## 高齢者歯科学教育の現況

### 多職種連携教育

- 第1学年 「個体差健康科学・多職種連携入門」  
「医療倫理学」「医療人間学演習」  
「看護福祉概論」
- 第2学年 「医薬品の化学」
- 第3学年 「リハビリテーション科学概論」  
「医療コミュニケーション」
- 第4学年 「医療行動科学」  
「**歯科医療行動科学**」
- 第5学年
- 第6学年

### 高齢者歯科学教育

- 「口腔解剖学」  
「口腔生理学」
- 「口腔衛生学」
- 「全部床義歯補綴学」  
「部分床義歯補綴学」
- 「**高齢者歯科学**」  
「医歯学統合講義」  
「臨床実習Ⅰ」
- 「臨床実習Ⅱ」  
「**歯科医学総合講義**」

350時間相当

## 医療行動科学

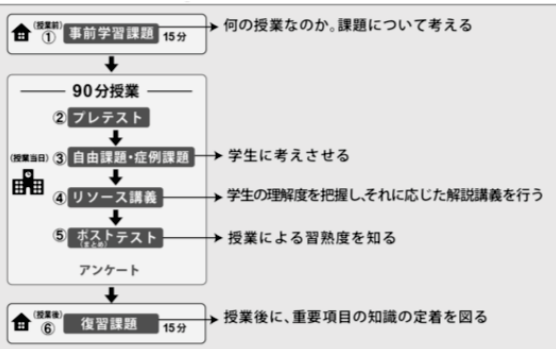
「医療行動科学」全15回講義テーマ

- オリエンテーション、医療行動科学とは何か。
- 症状の機能分析
- 症状の機能分析の実際：痛みについて考える。
- 行動原理：条件づけについて考える。(Ⅰ)
- 行動原理：条件づけについて考える。(Ⅱ)
- 行動原理：認知について考える。(Ⅰ)
- 行動原理：認知について考える。(Ⅱ)
- 行動原理の臨床応用を考える
- 行動科学応用への基本となるコミュニケーションについて考える。
- 患者指導の実際(Ⅰ)：痛みと歯科心身症への対応
- 患者指導の実際(Ⅱ)：不安と歯科心身症への対応
- 患者指導の実際(Ⅲ)：行動変容を阻害する要因について考える。
- 患者指導の実際(Ⅳ)：歯周病その他関連疾患への対応について考える。
- 患者指導の実際(Ⅴ)：糖尿病に関連する生活習慣の修正を考える。
- 患者指導の実際(Ⅵ)：口腔内の清潔に関連する生活習慣の修正を考える。

## ITを活用した教育（第3学年～第5学年）



### Step 1（第3学年） 全身と口腔の関連についての基礎知識の修得



Moodle を利用したe ラーニング教材

仮想患者を用いた教育システムの開発と活用, 越野 寿, 豊下祥史, 齋藤隆史 他  
論文誌 ICT活用教育力研究 第18巻 第1号 2015年11月

### Step 2（第4学年） コミュニケーション・臨床推論能力の養成

医療面接を行い、コミュニケーション能力や臨床推論能力を身につける

#### 医療面接／口腔内・外の診察・検査



仮想患者を用いた教育システムの開発と活用, 越野 寿, 豊下祥史, 齋藤隆史 他  
論文誌 ICT活用教育力研究 第18巻 第1号 2015年11月

Step3 (第5学年) **臨床における実践**

行動目標 [SBOs]

1. 病診連携、病病連携を体験し、連携の意義を理解する。
2. 多職種が連携した（医師、薬剤師、看護師、歯科衛生士、歯科技工士、その他の医療職）の病棟におけるチーム医療を理解し、体験する。
3. 地域医療の多職種連携医療体験を通じて、保健・医療・福祉・介護の連携を理解し、歯科医師の役割を説明できる。
4. 在宅（訪問）歯科診療の特殊性を理解し、基本的な態度・技術を修得する。
5. 基礎疾患を有する患者に対して治療・ケア計画を立案できる。
6. 口腔内症状と全身状態の関連を把握し治療計画を立案できる。
7. 医師と連携して安心安全な歯科診療を実施できる。
8. 口腔乾燥を訴える患者の診断および治療計画を立案できる。

第5学年  
**臨床実習 I**

4月～5月  
シミュレーション実習&相互実習



シミュレーション（在宅、高齢者施設、慢性期病棟）  
歯科訪問診療の環境設定や患者体位についての学習  
を行います。



歯科訪問診療用器材  
Portacube®



麻痺のある患者さんへの口腔ケア



要介護者の車椅子からの移乗練習

シミュレーション実習～相互実習～

- **摂食・嚥下スクリーニング検査、嚥下訓練：**  
体験を通じて、嚥下機能および検査に必要な知識と技術を習得する。



- 地域高齢者誤嚥リスク評価指標（DRACE）を用いた確認
- 基礎疾患の有無の確認
- 反復唾液嚥下テスト（RSST）
- 改訂水飲みテスト（MWST）
- フードテスト（FT）



- 間接訓練
- 嚥下体操の実施
- 直接訓練
- 息こらえ嚥下
  - 交互嚥下

とろみ調整材による  
粘度調整の体験

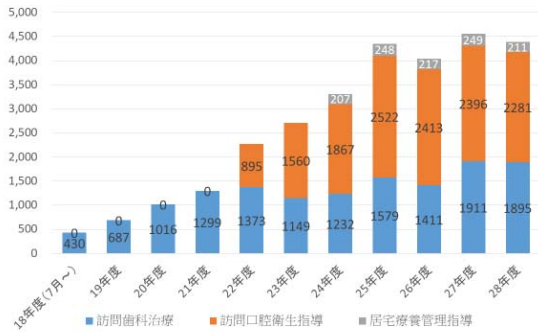


介護食による食事介助





## 本学大学病院における 歯科訪問診療の実績



## 歯科訪問診療への参加



## 実践的な多職種連携教育を行うための 新規歯列模型の開発

### GIOs

1. 高齢者歯科医療に必要な専門的知識、診療の基本的臨床技能を修得する。
2. 包括的な高齢者歯科医療のための基本的診察法を行い、治療方針・治療計画の立案および予後の推測ができる。
3. 高齢者歯科治療において、専門職連携によるチーム医療を実践し、理解する。

## 開発中の模型 ～歯肉形態～



## 電子ポートフォリオ

所属施設名 (設置機関)	上級施設名 (指定なし)
施設ID	001484-08 1800000 業務ID 21000000-08
施設名	
上級施設(上位診療科目)施設名	
施設	
①施設 概要	
② 診療科目	
③ 診療時間	
④ 診療内容	
⑤ 診療方針	
⑥ 診療体制	
⑦ 施設情報	
⑧ 施設情報	
⑨ 施設情報	
⑩ 施設情報	
⑪ 施設情報	
⑫ 施設情報	
⑬ 施設情報	
⑭ 施設情報	
⑮ 施設情報	
⑯ 施設情報	
⑰ 施設情報	
⑱ 施設情報	
⑲ 施設情報	
⑳ 施設情報	
㉑ 施設情報	
㉒ 施設情報	
㉓ 施設情報	
㉔ 施設情報	
㉕ 施設情報	
㉖ 施設情報	
㉗ 施設情報	
㉘ 施設情報	
㉙ 施設情報	
㉚ 施設情報	
㉛ 施設情報	
㉜ 施設情報	
㉝ 施設情報	
㉞ 施設情報	
㉟ 施設情報	
㊱ 施設情報	
㊲ 施設情報	
㊳ 施設情報	
㊴ 施設情報	
㊵ 施設情報	
㊶ 施設情報	
㊷ 施設情報	
㊸ 施設情報	
㊹ 施設情報	
㊺ 施設情報	
㊻ 施設情報	
㊼ 施設情報	
㊽ 施設情報	
㊾ 施設情報	
㊿ 施設情報	

北海福祉大学 地域包括ケアセンター

お知らせ一覧  
センターについて  
ごあいさつ  
センター概要  
診療科連携  
診療連携ストーリー  
ご利用の流れ  
スタッフ紹介  
最新情報  
お問い合わせ

地域包括ケアセンターからのお知らせ

2017/06/07  
『新築竣工』高齢者の暮らしを支える、福祉施設、暮らしははらばら。

2017/06/07  
『新築竣工2』高齢者の暮らしを支える、福祉施設、高齢者のコミュニケーション、スキルアップ講座

2017/07/10  
『新築竣工3』暮らしの自由選択にふさわしい認知症対応施設、介護支援施設

北海福祉大学病院  
地域包括ケアセンター



### 歯科医療行動科学（4年次）

目的：現代社会における医療の問題点について考え、新しい医療人を目指して、単なる知識、技術の伝達だけでなく、それらに裏付けされたコミュニケーション能力の育成、態度教育、倫理教育、**多職種連携教育**を行うことである。3年次の医療コミュニケーションの授業を発展させ、よりリアリティのある授業を行う。

一般目標：

国民のニーズに応える歯科医療者を育成する。

行動目標：

患者中心の医療コミュニケーションが実践できる。

SOAPに基づく診療録の記載ができる。

歯科心身症に関する知識を得る。

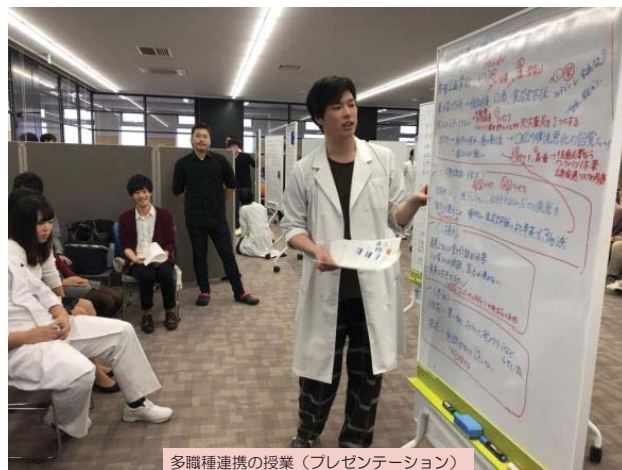
**多職種連携**を体験し、専門家の立場としてのコミュニケーションを行う。



模擬患者を活用した医療面接の授業



多職種連携の授業（医療面接と問題点の抽出）



多職種連携の授業（プレゼンテーション）

## 平成30年度 全学FD研修

看護福祉学部における多職種連携教育の取り組み

看護福祉学部 大友芳恵

## 本日の報告

- 多職種連携を学ぶ機会に通じる科目配置
- 現状と課題
- 今後の多職種連携教育に向けて

## 科目配置



## 「個体差健康科学・多職種連携入門」①

### 【現状】

- このワークを通じて、多職種連携がなぜ必要か、「新医療人」に求められる実践とは何かについて、学科を超えて学生同士が共にディスカッションしていくものとなっている。
- 学生は、さまざまな職種について初めて知ることも多く、新鮮な学びができています。

・平成31年から「多職種連携」に変更になる予定である。

## 「個体差健康科学・多職種連携入門」②

### 【課題】

- 1年次であるために、それぞれの専門性を深く学ぶ前であることから、学生の知識量が圧倒的に少ないことが議論を進める障壁になっている。
- また、1つのプログラムが2コマ程度の時間では不足している。
- この授業が、その後の学生の成長の上でどのような効果を示しているのかが評価できていない。
- 教員サイドからの課題として、プログラムは同時進行しているために、他の学科のプログラム内容を把握することが難しい。
- 他の学科のプログラムの中で、例えば看護や福祉をどのような役割として表現されているか把握できない。

## 「看護福祉学入門」①

### 【現状】

- 1年後期開講 看護学科と福祉学科の合同授業
- 1年前期で学んだ、基礎的内容をもとに、ケアマインドを学ぶ科目。多職種連携は多職種の専門性や特性を理解することから始まると考えると、本科目も多職種連携教育科目としても位置づけられる。
- グループワーク、体験では、看護と福祉の合同グループを作り、お互いの考え、感想等を共有し、学びを広げ、深めることを目指している。
- レポートには、福祉と看護の共通点、連携することの必要性などが記載されることもある。
- 看護と福祉の教員がペアとなり、テーマに沿って授業内容、方法を考えるため、学科の相互理解、教員交流になっている。

## 「看護福祉学入門」②

### 【課題】

□上記では多職種連携科目としても位置付けられると書きましたが、シラバスにはその点が記載されていないため、教員、学生共にその意識が薄いと思われます。

□今後、多職種連携科目として位置づけるのか否か、検討、確認の必要性が感じられました。それによって、学習目標、授業内容が変わってくる可能性もある。



## 「多職種連携論」① (3年生)



### 【現状】

□グループ構成は、1つのグループに5学科の学生が含まれるように構成している。そのため、看護学科や福祉学科で科目を履修した学生の人数に合わせてグループ数が決まる。(2018年度は21グループ)  
□1グループ10名～11名構成(うち、看護1名、福祉1名)、ディスカッションとして適切な人数配分とはいえない。

□多職種の役割等、他科目でも机上で学んでいるが、実際に多職種とディスカッションすることで、専門職の視点の違いや、目標を一致させ役割分担を行うことの難しさに気づいている。

□そこから、どのように議論の場を設定し、ファシリテーションを行い、コンフリクトを解消し、共通の目標を設定し、役割分担を行うのかについて、自己の課題と向き合いながら主体的に学んでいる。

## 「多職種連携論」②

### 【課題】

- 看護福祉学部は選択科目であるため、履修人数が少ない。開講当時はVI講目に開講されており、開講時間をIV V講目に調整したが、履修者数は学生数の2割くらいである。
- 多職種連携コンピテンシーが高まることが考えられることから、必修科目として位置づけることが望ましいと考える。
- 臨床福祉学科学生3年生の履修人数は2割に満たなく、4年生にも声をかけている。
- 教授内容は整えたが授業評価や学生のその後の成長への影響について課題が残っている。
- 毎時、課しているリフレクションシートの質的な評価も課題である。
- 全員が一つの教室で開講することができない日もある。教室の確保が難しい。

## 「地域共生社会演習Ⅰ」3年 (2018年より開講) 「地域共生社会演習Ⅱ」4年 (2019年より開講)

- 今年度よりの開講科目であり現状報告にとどまるが、地域ニーズを捉え、事業構想と協働の方法を演習形式で学ぶ。
- 専門職による連携とは異なる、地域住民や当事者を含めた社会資源づくりを学ぶ



## 実習を通しての学び① 例)医療機関

□学内で学んだ「多職種連携論」をもとに、学生だけの模擬カンファレンスの実施



事例1)〇〇〇脳神経外科病院での実習において  
実習指導者のMSWの指導によるもの

臨床福祉学科4年生「応用実習」における実習プログラムに、以下のような学生だけの模擬カンファレンスをプログラムをくんでいただいた。

PT実習生、OT実習生、ソーシャルワーカー実習生、看護実習生らによる、模擬カンファレンス体験

## 実習を通しての学び② 例)「地域包括支援センター」

### □地域ケア会議

□「ケアマネジャー、保健・医療及び福祉に関する専門知識を有する者、**民生委員その他の関係者及び関係団体**により構成される会議」  
地域における支え手となっている民生委員や町内会長などを含めた**協働の実際を学ぶ**

### □サービス担当者会議

□自宅を訪問し、サービス利用者、家族、サービス提供事業者、ケアマネジャーらによるサービス担当者会議

**他機関・多職種・家族・本人による、協働の実際を学ぶ**



### 今後の多職種連携を学ぶことへの期待

医療モデルにのみ偏らない、さまざまなパターンの多職種連携

在宅における看取りのケア

認知症高齢者と地域包括支援センター・歯科医師との連携

地域包括ケアが標榜される時代においての、地域のインフォーマルな諸資源との協力・連携・協働

など



## 心理学部の取り組み

北海道医療大学  
心理学部（多職種連携）  
・大学教育開発センター  
安部博史

2018年8月3日

1

## 本日のメニュー

1. 多職種連携教育(IPE)とは
2. 心理学部におけるIPE
3. 公認心理師法
4. 多職種連携・地域連携における公認心理師の役割
5. 多職種連携コンピテンシー

## 1. 多職種連携教育(IPE)とは

"Those occasions when two or more professions learn with, from and about each other to improve collaboration and the quality of care."

協働とケアの質を向上させるために、二つ以上の専門職がお互いについて学び、相手から学び、共に学ぶことである（下線は筆者による）。

(<http://caipe.org.uk/>, 2015年8月アクセス)。

• **Inter**Professional Educationとよぶには少し不十分なもの。

- 他学部の教員が教える。 **Uni**Professional
- 学部混成で学ぶ。 **Multi**Professional



北海道医療大学人間基礎科学論集 第41号 2015年

## 2. 心理学部における多職種連携教育 (IPE)

- 心理学部・臨床心理学科
  - 個体差健康科学・多職種連携入門（一年）
  - 公認心理師の職責（一年）
  - 臨床心理臨床実習（三年）
- 心理学部・大学院
  - 心理実践実習（二年）
  - 臨床心理実習（二年）

### ① 講義

多職種連携論、コミュニケーション論

### ② 演習

チュートリアル問題解決型学習PBLなど (PBL: Problem-based learning)

事前実習 → 本実習

多職種連携教育 (IPE: Interprofessional Education)

臨床実践

### ⑤ IPEを実施するための基礎的能力の涵養

1. コミュニケーション能力、ディスカッション能力の研鑽：自分の考えをまとめる、他者の話をきく、自分の考えを伝える。
2. 専門職としての態度の涵養：他者を尊重する、自分と異なる意見に耳を傾ける、自分に対する期待と責任を理解し、自分の行動を律する。
3. 問題解決能力の研鑽：問題を見つける、解決までの適切な手段を選択する、結果を振り返る。

専門教育

図1. 多職種連携教育 (IPE) のカリキュラムと個々の科目の位置づけ。

北海道医療大学人間基礎科学論集 第41号 2015年

## 3. 公認心理師法

- 平成27年9月9日に議員立法により成立、9月16日に公布、平成29年9月15日に施行

(目的)

第一条 この法律は、公認心理師の資格を定めて、その業務の適正を図り、もって国民の心の健康の保持増進に寄与することを目的とする。

### 3. 公認心理師法

第二条 この法律において「公認心理師」とは、第二十八条の登録を受け、公認心理師の名称を用いて、保健医療、福祉、教育その他の分野において、**心理学に関する専門的知識及び技術**をもって、次に掲げる行為を行うことを業とする者をいう。

- 一 **心理に関する支援を要する者**の心理状態を観察し、その結果を分析すること。
- 二 心理に関する支援を要する者に対し、その心理に関する相談に応じ、助言、指導その他の援助を行うこと。
- 三 心理に関する支援を要する者の**関係者**に対し、その相談に応じ、助言、指導その他の援助を行うこと。
- 四 心の健康に関する知識の普及を図るための**教育及び情報の提供**を行うこと。

### 3. 公認心理師法

- 臨床心理士（CP，学会認定資格）から公認心理師（国家資格）へ。
- 現在の一年生が第一世代（現職などの移行処置を除く）。
- 大学院（二年間）終了が通常のコース。本学で受験資格取得可能。

### 第四章 義務等（連携等）

第四十二条 公認心理師は、その業務を行うに当たっては、その担当する者に対し、保健医療、福祉、教育等が密接な**連携**の下で総合的かつ適切に提供されるよう、これらを提供する者その他の関係者等との**連携**を保たなければならない。

### 4. 多職種連携・地域連携における公認心理師の役割

- 公認心理師は、**医療、保健、福祉、教育に加え、産業・労働、司法・犯罪**も含む領域に横断的な資格であると同時に、集団におけるリーダーシップやコミュニティアプローチについての知識を有している。

### 多職種連携とチームアプローチ

- **チーム医療**：医療に従事する多種多様な医療スタッフが、各々の高い専門性を前提に、目的と情報を共有し、業務を分担しつつも互いに連携・補完し合い、患者の状況に適確に対応した医療を提供することを意味する。
- **チーム学校**：学校が抱える課題が従来よりも複雑化・困難化し、心理や福祉など教育以外の高い専門性が求められるような事案も増えてきており、教員だけで対応することが、質的・量的にも難しくなっている。そのため、教育分野でも多職種連携によるチームアプローチ（チーム学校）の必要性が指摘されている。

### 4. 多職種連携・地域連携における公認心理師の役割

- 公認心理師は、**医療、保健、福祉、教育に加え、産業・労働、司法・犯罪**も含む領域に横断的な資格であると同時に、**集団におけるリーダーシップやコミュニティアプローチについての知識**を有している。

## 5. 多職種連携のコアコンピテンシー

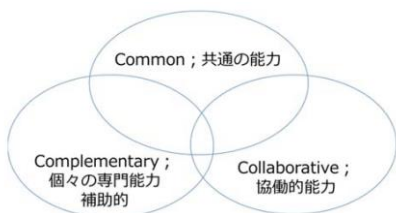
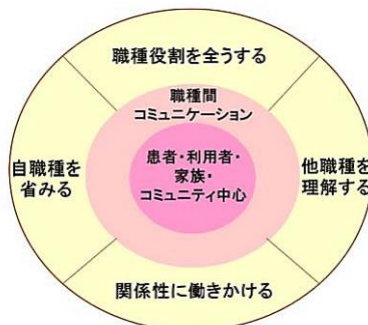


Figure3 : 多職種連携のコア・コンピテンシー

医療保健福祉分野の多職種連携コンピテンシー(2016)  
主催 多職種連携コンピテンシー開発チーム より転載



[http://www.hosp.tsukuba.ac.jp/mirai\\_iryō/pdf/Interprofessional\\_Competency\\_in\\_Japan\\_ver15.pdf](http://www.hosp.tsukuba.ac.jp/mirai_iryō/pdf/Interprofessional_Competency_in_Japan_ver15.pdf)

医療保健福祉分野の多職種連携コンピテンシー(2016)  
主催 多職種連携コンピテンシー開発チーム より転載

## 医療保健福祉分野の 多職種連携コンピテンシー (2016)

### ◎コア・ドメイン

1. 患者・利用者・家族・コミュニティ中心
2. 職種間コミュニケーション

### ○コア・ドメインを支え合う4つのドメイン

3. 職種としての役割を全うする
4. 関係性に働きかける
5. 自職種を省みる
6. 他職種を理解する

本学において卒業時に獲得している  
IPWコンピテンシーの参考になる。  
(=ディプロマポリシー)

## 本日のメニュー

1. 多職種連携教育(IPE)とは
2. 心理科学部におけるIPE
3. 公認心理師法
4. 多職種連携・地域連携における公認心理師の役割
5. 多職種連携コンピテンシー

## リハビリテーション科学部における 多職種連携教育

3年次全学教育科目  
「多職種連携論」の紹介

## 多職種連携論

- 3年前期[講義・演習]  
リハビリテーション科学部 必修1単位  
看護福祉学部 選択1単位  
履修者数(2018年度)  
理学:104  
作業:41  
言語:62  
看護:24  
福祉:19

## 多職種連携コンピテンシー

1. 患者・利用者中心  
患者、サービス利用者、家族、コミュニティ中心性
2. コミュニケーション  
職種間コミュニケーション
3. パートナーシップ  
信頼関係を築く
4. 相互理解と職種活用  
互いに理解し、互いの専門性を活かす
5. ファシリテーション  
円滑な相互作用を促進する
6. リフレクション  
協働する視点から省察する

日本保健医療福祉連携教育学会

### 【一般目標】

医療や福祉の現場で他の専門職種と連携し、協業していくための態度や技術を身につける。

### 【学習目標】

1. 患者、利用者を中心とした視点が持てる。
2. 背景が異なることを配慮して他学科の学生と意見交換ができる。
3. グループ内で信頼関係を築ける。
4. それぞれの職種の役割を理解し、説明できる。
5. 議論を円滑に進めるために協力することができる。
6. 自分自身のふるまいを内省し、考えや価値観を再構築できる。

【学習内容】			
回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1 5 2	多職種連携の必要性	多職種連携が求められる背景、その重要性について学ぶ。	全担当教員
3 5 4	多職種連携のかたちと各職種の役割	医療・福祉領域に関わる各職種の役割を理解するとともに職種連携のさまざまな形態について学ぶ。	全担当教員
5 5 6	ファシリテーション	カンファレンス等、多職種で行う情報交換、意思決定の方法とディスカッションを円滑に進めていくためのファシリテーターの役割について学ぶ。	全担当教員 特別講師 星野由利子 上田学 下倉賢士 戸崎祐公
7 5 8	チームマネジメントにおける課題と対応	多職種が連携することで生じる問題とその解決策について学ぶ。	全担当教員
9 5 10	多職種連携演習Ⅰ	各職種の視点で問題点を整理し、他職種に伝える方法について、現職の専門職を交え演習を通して学ぶ。	全担当教員 特別講師 星野由利子 上田学 下倉賢士 戸崎祐公
11 5 12	多職種連携演習Ⅱ	各職種から出された問題点を共有し、目標をチーム内で統一するプロセスについて現職の専門職を交え演習を通して学ぶ。	全担当教員 特別講師 星野由利子 上田学 下倉賢士 戸崎祐公
13 5 14	多職種連携演習Ⅲ	チームでまとめた問題点を解決し、目標を達成するために、それぞれの職種が担う役割について整理し、介入方法を立案するプロセスについて現職の専門職を交え演習を通して学ぶ。	全担当教員 特別講師 星野由利子 上田学 下倉賢士 戸崎祐公
15	まとめ	演習でまとめた内容についてグループごとにプレゼンテーションする。	全担当教員


## 授業の構成

- 認知領域  
ICT(MediaDepo)による反転授業  
受講後の小テスト
- 情意領域、精神運動領域  
グループワーク演習  
ファシリテーション  
リフレクション



## グループの構成と教員の役割

- 250名を20グループに分ける
- 1グループ12~13人
- PT:5、OT:2、ST:3、Ns:1、Sw:1といった比率
- 教員は基本的にはタスクフォース  
見守り、議論の軌道修正、議論が進まない場合の助言のみ
- ※グループメンバーに不在の職種(学科)が居る場合はメンバーとして参加



30分程度の講義を聴講した後、小テストに回答する。

MediaDEPOの画面

## リフレクションのフォーマット

リフレクションシート 2017年 4月 21日 多職種連携コンピテンシー自己評価 7.22

1	2	3	4	5	6
1. 多職種連携の重要性を認識できたか?	2. 多職種連携の必要性を認識できたか?	3. 多職種連携の重要性を認識できたか?	4. 多職種連携の必要性を認識できたか?	5. 多職種連携の重要性を認識できたか?	6. 多職種連携の必要性を認識できたか?
達成度	達成度	達成度	達成度	達成度	達成度

初回と最終回のみ記載

## タイムスケジュールと各授業内容

日	月	日	テーマ	授業内容及び学習課題	進め方	進め方のポイント
1	4/7	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性
2	4/7	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性
3	4/21	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性
4	4/21	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性	多職種連携の必要性

## 多職種連携論1

### 多職種連携の必要性

5/12 多職種連携の必要性

6/12 多職種連携の必要性

7/5/28 多職種連携の必要性

8/5/26 多職種連携の必要性

5/12 多職種連携の必要性

6/12 多職種連携の必要性

7/5/28 多職種連携の必要性

8/5/26 多職種連携の必要性

## 今日の目標

- ・話す、聞くスキルを身につける。
- ・グループメンバーを理解する。
- ・自分の意見を伝える。他人の意見を傾聴する。
- ・事例を通じて、複合的課題を理解する。
- ・複合的課題に対処する多職種存在について理解する。
- ・課題への取り組みやグルループ内での役割などについて内省する。

## アイスブレイキング: コンセンサスゲーム

### NASAゲームについての指令

#### 【指令1】

あなたは、明るい月面で母船とランデブーする計画の下に、飛行中の宇宙隊員7~8名の1人である。しかし、機体の故障のためあなたの船は、母船から約300km離れた場所に着陸を余儀なくされた。着陸に際して多くの機材が壊れ、隊員全ての生存は、母船が着陸して建設した宇宙基地へ到達できるかにかかっている。300kmを移動するために必要な物を選ばなければならない。別紙に掲げた15品目は、着陸時に破損しないでも使える物であるが、全てを携帯できるとは限らない。さて、あなたの今の任務は、他の隊員全てと共に無事宇宙基地に到達するため、重要と思われる品目から順に優先順位をつけることである。**最も重要と置かれる物を1、最も不要と置かれる物を15**とし、順に数値を別紙の(a)欄に記入しなさい。急を要するため、持ち時間は5分とする。

#### 【指令2】

万全を期すために優先順位について、隊員全員で討議して決定することになった。まず、司会者-隊長と書記役を決める。発言に際しては隊長も同格である。なるべく討議から合意形成によって優先順位を決めていく。決して多数決で優劣を決めてはならないものとする。討議で決定した順位を(b)欄に記入せよ。持ち時間は30分とする。

#### 【指令3】

①本部から指示が出た。(c)欄に記入せよ。  
②各個人の(a)-(c)との差を絶対値でそれぞれ記入し、その合計を(a)-(c)絶対値個人の合計の合計欄に記入する。  
③書記役は、②で算出した数値を全員の平均を(d)欄に記入し、全隊員に伝える。隊長は、(b)-(c)絶対値の合計を(e)欄に記入し、全隊員に伝える。さらに隊長は、各個人の(a)-(c)の最も小さい値を記載する。

NASAゲームの順位表

優先順位の高い方から1、2・・・とつけ、最後は15とする。

	(a)個人	(b)グループ	(c)NASA	(a)-(c)の絶対値	(a)-(c)の絶対値
1.マッチ箱1箱					
2.濃縮食料1ダース入り					
3.ナイロン・ロープ15m1本					
4.パラシュート用格納1箱入					
5.携帯用加湿器1個					
6.45口径ピストル2挺					
7.飲水用ミルク1ケース					
8.45口径銃弾タンク2個					
9.月面の塵塵用天体地球1枚					
10.酸素いかに1袋					
11.酸素罐針筒1個					
12.20リットル入りポリタンク1個					
13.シグナル用照明弾1個					
14.注射器入り救急箱1個					
15.太陽電池FM送受信機1個					

(a)-(c)絶対値個人の合計  
全隊長の平均値  
グループの中で最も小さい値  
(d)-(e)絶対値の合計

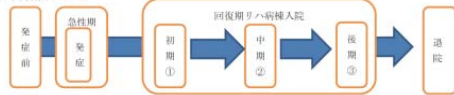


## 事例検討

### 【設定】

- ① あなたは、看護師、理学療法士、作業療法士、言語聴覚士、ソーシャルワーカー(社会福祉士)です。
- ② あなたが、所属するあいの里リハビリテーション病院(回復期リハビリテーション病棟)では、各職種が専門的立場から参画する多職種連携が行われています。
- ③ 本演習の事例は、入院初期・中期・後期・チームの支援方針等を報告するまでの支援局面とします。
- ④ 事例検討にあたっては、専門職別ミーティングと多職種カンファレンスを交互に実施します。

☆事例範囲イメージ



### 【多職種連携演習の展開】

日程	展開	演習内容	事例情報
2018. 6. 8	IV	初期① 第1回専門職別ミーティング	・全職種共通情報(転院時情報) ・各職種別情報(転院～第1回CPまで)
	V	第1回多職種カンファレンス	・各職種(学生)アセスメント内容
2018. 6. 29	IV	中期② 第2回専門職別ミーティング	・各職種別情報(第1回～第2回CPまで)
	V	第2回多職種カンファレンス	・各職種(学生)アセスメント内容
2018. 7. 6	IV	後期③ 第3回専門職別ミーティング	・各職種別情報(第2回～第3回CPまで)
	V	第3回多職種カンファレンス	・各職種(学生)アセスメント内容

## 事例

### ◎基本情報

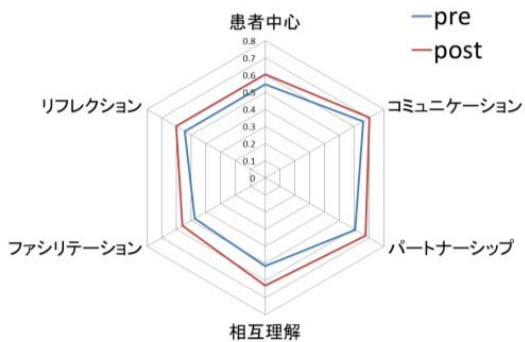
氏名 茨戸太平さん 85歳男性 住所 S市K区  
 診断名 脳梗塞(左中大脳動脈領域のアテローム血栓性梗塞)  
 既往歴 糖尿病、高血圧  
 現病歴 自宅トイレ内で動けなくなっているのを家族が発見し、救急搬入、百合が原総合病院入院となった。救急搬入時、脈拍90回/分、血圧125/70、意識はJCS3(自分の名前が言えない)言葉がうまく出でこず、右半身に麻痺がみられた。MRI(DWI)およびMRA所見より左中大脳動脈閉塞による脳梗塞と診断され、エダラボンの点滴とワーファリンの内服を開始した。入院3日目よりベッドサイドでのリハビリテーションを開始。  
 家族構成 妻(君子さん、79歳)と二人暮らし 妻は、心不全、軽度認知症  
 要介護1 (現在老健入所中)  
 長女(石屋聖子)50歳・主婦/パート就労(9時～17時週3日)。  
 長女世帯(夫 会社員、大学1年生の長女、中学3年生の長男)宅は、車で5分程度に在住。  
 地域 人口170万人程度の大都市の郊外の町。居住施設や近隣の保健・医療・福祉資源は充実し、保健・医療・福祉のネットワークシステムは機能している。

## 事例検討のプログラムの例

事例検討のプログラム	事例検討の目的
<p>【事例検討の目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> </ul>	<p>【事例検討の目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> </ul>

事例検討のプログラム	事例検討の目的
<p>【事例検討の目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> </ul>	<p>【事例検討の目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> <li>事例検討の目的は、事例検討の目的を達成することである。</li> </ul>

## 授業前後(開始時と最終時)での多職種連携コンピテンシーに関する自己評価



## 課題

- 学科ごとの学生数の不均衡  
理学療法学科学生の勢力が強い
- リハ科学部学生(必修)と看護福祉学部学生(選択)の取り組む姿勢の温度差  
選択してまで受講している看護福祉の学生の真剣さに比べ、リハの学生はいい加減  
※授業アンケートでも看護学生からクレーム多数
- 成績評価  
パフォーマンス評価が困難

話題提供

「各学部における多職種連携教育の取り組み」

《メモ》

①薬学部 浜上 尚也

②歯学部 長澤 敏行

③看護福祉学部 大友 芳恵

④心理科学部 安部 博史

⑤リハビリテーション科学部 吉田 晋

## ワークショップ

WS 1：オリエンテーション

WS 2：アイスブレイキング

WS 3：ワークショップのすすめ方

「多職種連携のアドバンス教育科目をつくる」





## 全学FD研修 グループ編成

グループ(名称)	氏 名【所属学部等】			
A ( )  7名	平野 剛	【薬学】	松本 望	【福祉】
	松岡 紘史	【歯学】	坂上 哲可	【作業】
	川西 克弥	【歯学】	石黒 和彦	【学生】
	伊藤 加奈子	【看護】		
B ( )  6名	原田 潤平	【薬学】	児玉 壮志	【作業】
	伊藤 修一	【歯学】	松尾 淳司	【新学部】
	木浪 智佳子	【看護】	塚田 将人	【事務】
C ( )  6名	堀内 正隆	【薬学】	河村 麻果	【心理】
	長澤 敏行	【歯学】	泉 唯史	【理学】
	常田 美和	【看護】	川崎 千佳	【事務】
D ( )  6名	北浦 廣剛	【薬学】	西郷 達雄	【心理】
	高橋 伸彦	【歯学】	佐々木祐二	【理学】
	増田 悠佑	【看護】	木下 憲治	【言語】
E ( )  6名	野口 由香里	【薬学】	大友 芳恵	【福祉】
	豊下 祥史	【歯学】	福田 真二	【言語】
	高木 由希	【看護】	幸村 近	【新学部】

グループの役割分担		
【司会(リーダー)】	WS作業の進行をリードする。 ゴールを把握して、進行スケジュールをデザインし、決められた時間内に作業が終了するようにリードする。	
【書記(記録)】	WS作業の進行で出てきた内容を記録(PC入力)して、作業に役立てる。 WSのプラダクトとなる発表内容を記録し、最終的に報告書の原稿となる資料を作成する。 *後日、研修報告書の原稿として所定の期日までに事務課に提出する。	
【発表者】	各WSでのプラダクトを全体討論において発表する。	
※: 発表・報告資料(原稿)の作成(まとめ)は、グループ全員が協力して行う。		

司会	書記	発表者



## 平成30年度 全学FD研修（テーマ編）

ワークショップ  
多職種連携の  
アドバンス教育科目をつくる



主催：全学FD委員会

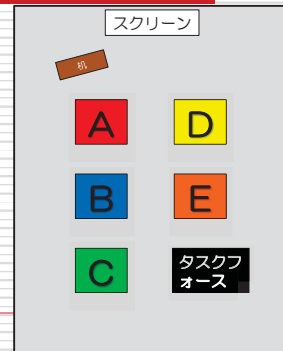


平成30年8月3日（金） 当別キャンパス

平成30年度 全学FD研修（テーマ編）  
平成30年8月3日（金） 当別キャンパス

各グループの場所にお座り下さい。

・お茶はお一人1本です。  
・お菓子はご自由にとりませ



主催：全学FD委員会

### 研修スケジュール

進行/山口委員

- 13:00 ワークショップ（C109）  
オリエンテーション、FD委員紹介  
アイスブレイキング（グループ作り）
- 13:40 休憩
- 13:45 「多職種連携のアドバンス教育科目をつくる」  
グループワーク（100分）
- 15:35 休憩
- 15:45 グループ発表、全体討論
- 16:40 閉会・アンケート提出

### 研修スタッフ

FD委員長	志渡 晃一	北海道医療大学	看護福祉学部教授
FD副委員長	遠藤 泰	北海道医療大学	薬学部教授
FD委員	泉 剛	北海道医療大学	薬学部教授
	倉田 英紀	北海道医療大学	歯学部教授
	荒川 俊哉	北海道医療大学	歯学部教授
	福井 純子	北海道医療大学	看護福祉学部講師
	野田 昌道	北海道医療大学	心理科学部教授
	山口 明彦	北海道医療大学	リハビリテーション科学部教授
	長谷川敦司	北海道医療大学	大学教育開発センター准教授
	鎌田 禎子	北海道医療大学	大学教育開発センター准教授
	杉原 佳奈	北海道医療大学	歯科衛生士専門学校専任教員
事務局	高見 裕勝	北海道医療大学	学務部長
	笠原 晴生	北海道医療大学	学務部次長
	細川 洋美	北海道医療大学	学務部I課

### 研修参加者とグループ分け

A	B	C	D	E
平野教授 [薬学]	原田講師 [薬学]	堀内講師 [薬学]	北浦准教授 [薬学]	野口助教 [薬学]
松岡准教授 [歯学]	伊藤教授 [歯学]	長澤教授 [歯学]	高橋准教授 [歯学]	豊下准教授 [歯学]
川西講師 [歯学]	木浪准教授 [看護]	常田准教授 [看護]	増田助教 [看護]	高木助教 [看護]
伊藤助教 [看護]	児玉助教 [作業]	河村助教 [心理]	西郷助教 [心理]	大友教授 [福祉]
松本助教 [福祉]	松尾教授 [新学部]	泉教授 [理学]	佐々木講師 [理学]	福田准教授 [言語]
坂上准教授 [作業]	塚田課員 [事務]	川崎課員 [事務]	木下教授 [言語]	幸村教授 [新学部]
石黒SCP [学生]				

## アイスブレイキング



## アイスブレイキング

アイスブレイキングとは、初対面の同士が出会う時、その緊張（アイス）をときほぐす（ブレイキング）ための手法。

集まった人を和ませ、コミュニケーションをとりやすい雰囲気を作り、そこに集まった目的の達成に積極的に関わってもらえるよう働きかける技術を指す。

アイスブレイクは自己紹介をしたり、簡単なゲームをしたりすることが多く、いくつかのワークやゲームの活動時間全体を指すこともある。

(Wikipedia)

## ウソ？ホント？①

### 作業解説

グループ単位で行います。

配布したシートに、自分の所属学部・氏名と、自分について知ってもらいたいことを3つ記入して下さい。ただし、3つのうちの一つは全くのウソを書き入れて下さい。（3分）

(例) わたしはとてもきれい好きです。  
わたしは辛い食べ物が苦手です。  
わたしは15歳までハワイに住んでいました。

あまりシリアスなウソは避けましょう。

## ウソ？ホント？②

### 作業解説

グループ内で一人ずつ自分の書いた内容を発表します。

他のメンバーは、3つの中からウソだと思う内容を考えてながら話を聞きます。その後自由に質問をして下さい。発表者は、質問に対して正直に回答して下さい（3分）。

講師の合図の後、メンバーはどれがウソだと思ったか回答して下さい。全員の意見を聞き終わりましたら、発表者はどれがウソだったのかを話します（1分）

一人ずつ順番に行います。

それでは今から3分間で、自己紹介用シートに知ってもらいたいことを3つ記入して下さい。  
(必ずひとつはウソを記入してください)

発表順を決めてください。

「自己紹介と質問タイム」になります。  
開始の合図で「氏名、知って欲しいことの説明、引き続き質疑応答」を始めて下さい（3分間）。

「正解タイム」に入りましょう。  
メンバー全員の意見を聞いた後、本人は正しいものとウソを言って下さい。  
それではどうぞ！（1分間）

「ウソ？ホント？」の前と後で、メンバーの関係はどうなりましたか？

お互いの関係は変化したでしょうか。

各グループは、グループ名を決め、休憩に入ってください。

## 休憩



休憩時間 13:40~13:45

(時間厳守でお願いします)

**13:45** までに、

当会場へお集まりください。

# ワークショップ解説

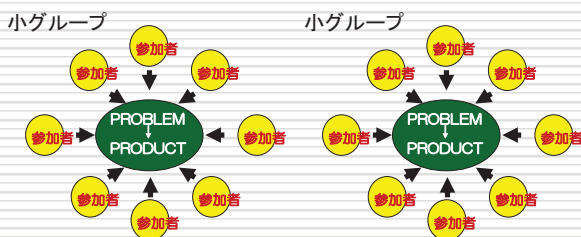
## ワークショップ



- 多人数を対象として参加者1人1人の参画意識を高めるために、小グループに分かれて討論と作業を行い、結論を出していく方式をいう。
- 一定の時間内にある成果(プロダクト)を生み出すという手段をとる。

## ワークショップとは？

小グループに分かれて討論と作業を行い、結論（結果）を出す



ディレクター  
タスクフォース  
事務局



ファシリテーター

## ワークショップの流れ



### 1. プレナリーセッション

全体 : 課題提示・作業解説



### 2. スモールグループディスカッション

グループ : 課題について討論・プロダクト作成



### 3. プレゼンテーション

全体 : 発表・討論

## ワークショップの要件

1. 全てのメンバーが積極的な参加者になる
2. 参加者全員が Resource Person
3. 積極的に建設的、前向きな意見を述べる
4. どんな質問でも無意味ではない
5. あらかじめ決まった正解はない
6. 先生はいない
7. 開始時刻、発表時間を守る



## 役割



- 司会
  - グループ討論時の司会進行を行う。
- 書記・PC入力
  - グループ討論時の書記（PC入力）を行う（プロダクト作成）
  - 作成したプロダクトはUSBに保存する。
- 発表者
  - 全体発表時にグループプロダクトの発表を行う。
- タスクフォース（TF）
  - グループ討論が効率的に討論・作業が進むように、サポートをする。
  - グループ討論のタイムキーパーも行う

役割分担をご確認ください。

セッション	司会	書記・PC	発表者
1	●●	▲▲	■ ■
2	■ ■	●●	▲▲
3	▲▲	■ ■	●●

## 作業解説



### 多職種連携



質の高いケアを提供するために、異なる専門的背景をもつ専門職が、共有した目標に向けて共に働くこと。

多職種連携をInterprofessional Work=IPW、  
多職種連携教育はInterprofessional Education=IPE  
と呼ぶことが多くなっています。

### 多職種連携のアドバンス教育科目をつくる

本学のリソース、ニーズに対応した多職種連携のアドバンス教育科目のシラバスを作成する

- ① 本学がめざす多職種連携教育は何か
- ② 現状の教育の取り組みと問題は何か
- ③ 本学のリソースとニーズを考える
- ④ 多職種連携を推進するために必要なアドバンス教育科目をデザインする
- ⑤ 来年度、再来年度の開講をめざしたシラバスを作成する

### 多職種連携のアドバンス教育科目をつくる

13:45~15:35 グループ討論(100分)

15:35~15:45 休憩

15:45~16:40 全体討論  
(発表5分、質疑2分×5グループ)  
(全体討論 20分)

### 多職種連携のアドバンス教育科目をつくる

#### 1. 作業 (~15:35)

ポスタイトの用意があります。

ホワイトボードの利用が可能です。

発表資料はPCに入力し、USBに保存して提出してください。



休憩



休憩時間 15:35~15:45

(時間厳守でお願いします)

**15:43** までに、  
当会場へお集まりください。

グループ発表

多職種連携のアドバンス教育科目を  
つくる

全体討論 (15:45~16:40)

グループ発表 35分  
(発表5分、質疑2分×5グループ)

全体討論 20分





ワークショップ  
プロダクト・感想



授業科目名	多職種連携論	講義・演習	第3学年前期 (歯学・薬学は4年)	必修 2単位
-------	--------	-------	----------------------	--------

《担当者名》：各学科複数名

### 【概要】

本講義では、専門職種間の有機的な連携と協業について基礎知識や理論、連携のためのマネジメントの実際についてそれぞれの専門的な立場から考察し、多職種連携が果たす役割や機能について学ぶ。また、学部学科を越えたグループワーク演習を通じ、コミュニケーションやディスカッションの実践力を身につける。

### 【学習目標】

《一般目標》

1. 患者・利用者・家族・コミュニティー中心の理念の理解
2. 職種間コミュニケーションの重要性の理解

《行動目標》

1. 職種としての役割を全うすることができる。
2. 関係性に働きかけることができる。
3. 自職種を省みることができる。
4. 多職種を理解することができる。

### 【学習内容】

回	テーマ	授業内容および学習課題	講義携帯
1	オリエンテーション	講義・演習のねらい	講義
2	他学科見学	全学部学科・歯科衛生	演習
3	〃		演習
4	地域包括ケア連携	在宅、訪問	講義
5	コンフリクト	課題解決	演習
6	〃		演習
7	アセスメント	医療面接	講義
8 ～ 9	演習1	発症1か月後のカンファレンス	演習
10 ～ 11	演習2	発症2か月後のカンファレンス	演習
12 ～ 13	演習3	発症6か月後のカンファレンス	演習
14 ～ 15	演習4	退院後3か月のカンファレンス	演習

### 【評価方法】

1. ポートフォリオ評価（事例持ち越し）
- 2.

### 【備考】

教科書：

参考書：

## 【グループA：感想】

平成30年度 北海道医療大学全学FD研修

「学生を中心とした教育を進めるために」－多職種連携をすすめるための教育の構築－

Aグループ代表 歯学部 松岡紘史

多職種連携教育のためのシラバス作成ワークショップへ参加し、各学部の取り組みや多職種連携講義をすでに導入している学部の話を知ることができ、非常に良い刺激を受けることができた。また、実際にシラバスを作成する作業を行うことで、多職種連携の講義を実施するために必須となる多学部の連携のハードルの高さを実感することができた。一方で、我々のグループには、多職種連携講義の受講経験のある学生が参加しており、多職種連携講義に非常に前向きな感想を聞くことができ、多職種連携講義の必要性を再確認するきっかけとなった。学生の生の意見を聞き、その声を講義内容にフィードバックしていくためにも、FD研修への学生参加を今後も継続していくことが重要であると感じた。

授業科目名	多職種連携実践	講義・実習	第 学年	前期	必修	1 単位
-------	---------	-------	------	----	----	------

\*学年は学部による

歯学：5年、薬学：4年、看護福祉：3年、心理：3年、リハ：3年、検査：3年、衛生：2年

《担当者名》：各学科3～6名（ただし歯科衛生士は1名）

### 【概要】

現代社会における保健・医療・福祉では、個性差に基づいた個々人に最も適したケア、個人の人格を尊重し、個々人を最も幸福にするケアが求められており、そのためには、複数の専門職業人が協働する多職種連携が必要とされる。

この講義では、医療系総合大学としての本学が掲げる「新医療人」に求められる個性差健康科学、および多職種連携の理念と方法、その具体的実践について理解するため、全学部学科の学生が共に学ぶ。

### 【学習目標】

1. 患者・利用者を中心とした視点が持てる
2. 患者・利用者の背景が異なることを配慮して他学部の学生と意見交換ができる
3. 患者・利用者との信頼関係を築ける
4. 多職種連携を円滑に進めるために協力することができる
5. 自分自身のふるまいを内省し、考えや価値観を再構築できる

### 【学習内容】

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1 ～ 3	ガイダンス	多職種連携が求められる背景、その重要性について学ぶ	全担当者
4 ～ 6	臨地実習	医療施設や地域医療の現場において多職種連携について説明ができる 症例を通じて、チームアプローチの方法を説明できる	全担当者
7 ～ 9	まとめ	実習でまとめた内容についてグループごとにプレゼンテーションする	全担当者
10 ～ 12	臨地実習	医療施設や地域医療の現場において多職種連携について説明ができる 症例を通じて、チームアプローチの方法を説明できる	全担当者
13 ～ 15	まとめ	実習でまとめた内容についてグループごとにプレゼンテーションする	全担当者

### 【評価方法】

1. ポートフォリオ（90%）
2. プレゼンテーション（10%）

### 【備考】

#### 【学習の準備】

基本的に学部をまたいだグループで行動する。多職種連携についての予習復習や演習の準備等はグループで助け合いながら行うこと。

#### 【学位授与方針との関連】

\*各学部のディプロマポリシーによる

## 平成30年度 全学FD研修

### 多職種連携の アドバンス教育科目をつくる

#### Bグループ「B-ール」

○伊藤修一、原田潤平、木浪智佳子  
松尾淳司、児玉壮志、塚田将人

#### 授業科目名

「多職種連携**実践**」

#### 授業形態

講義と実習、ポスター発表

#### 授業概要

- 現代社会における保健・医療・福祉では、個体差に基づいた個々人に最も適したケア、個人の人格を尊重し、個々人を最も幸福にするケアが求められており、そのためには、複数の専門職業人が協働する多職種連携が必要とされる。
- この講義では、医療系総合大学としての本学が掲げる「新医療人」に求められる個体差健康科学、および多職種連携の理念と方法、その具体的実践について理解するため、全学部学科の学生が共に学ぶ。

#### 学習目標

1. 患者・利用者を中心とした視点が持てる
2. 患者・利用者の背景が異なることを配慮して他学部の学生と意見交換ができる
3. 患者・利用者信頼関係を築ける
4. 多職種連携を円滑に進めるために協力することができる
5. 自分自身のふるまいを内省し、考えや価値観を再構築できる

#### 対象学年

✓各学部の基礎知識の修得状況に応じて

- 薬学:4年生
- 歯学:5年生
- 看護福祉・臨床心理・リハ・検査:3年生
- 衛生:2年生

✓担当教員は各学科3～6名(歯科衛生は1名)

#### 対象学生(定員)

- 薬学:160名
- 歯学:80名
- 看護:100名
- 臨床福祉:80名
- 臨床心理:75名
- 理学:80名
- 作業:40名
- 検査:60名
- 衛生:30名

705名をどうさばくか  
(実際には1割増の約800名)

→1グループ10名  
→80グループに分かれて臨地実習

## 学習内容

1・2・3回	ガイダンス
4・5・6回	医療系または地域系の臨地実習
7・8・9回	まとめ(ポスター発表)
10・11・12回	医療系または地域系の臨地実習
13・14・15回	まとめ(ポスター発表)

## 学習課題

### ガイダンス

- ・多職種連携が求められる背景、その重要性について学ぶ

### 臨地実習

- ・医療施設や地域医療の現場において多職種連携について説明ができる
- ・症例を通じて、チームアプローチの方法を説明できる

### まとめ

- ・実習でまとめた内容についてグループごとにプレゼンテーションする

## 評価

1. ポートフォリオ(90%)
2. プレゼンテーション(10%)

## 【グループB：感想】

平成30年度 北海道医療大学 全学FD研修

「学生を中心とした教育をすすめるために」－多職種連携をすすめるための教育の構築－

### ワークショップ（WS）の感想

B：Bーグループ 木浪智佳子

（原田，児玉，伊藤，松尾，塚田，木浪）

今回、意見交換の早い段階で“アドバンス”の位置づけを『講義と実習』形式とするという見解が一致したことでWSが順調に進めることができた。授業構成としては実習場所を病院と地域の2種類に分け、実習の合間にポスター形式の報告会を設定した。その理由は、学生が1回目の実習体験から多様な場で療養する患者・利用者と家族に必要な支援とその現状を考察し、学生同士の意見交換によって他職種の役割の理解を深め、チーム医療の可能性を考える機会を設定したかったからである。さらに、報告会での学びをふまえ、2回目の実習ではより実践的な多職種間連携について学びを深めることを目指した。作業中は、各学部の学生のレディネスや実習に関する情報交換を行いながらシラバス作成に参加できた。しかし、実習や報告会の具体的な内容までは十分に検討できなかった。WS冒頭の解説資料に提示された①～③についての意見交換を十分にすることが必要だったと考える。



授業科目名	ヒューマンケアの達人をめざせ！	講義・演習	4年（看護・リハビリ・心理） 5年（歯学） 6年（薬） 前期 必修 選択 単位
-------	-----------------	-------	-----------------------------------------------

《担当者名》：

### 【概要】

多職種連携は、患者中心の医療において、QOLの向上とヒューマンケアを行うために重要である。多職種の仕事について実践的理解を促すために、共通事例に対して、それぞれの職種による見立てと介入を学ぶ。それによって、それぞれの分野の経験知と暗黙知を言語化、視覚化して、集積する。これまでに経験した実習や講義で得た知識を総合的に活用する。

### 【学習目標】

様々な領域の人々との連携・協働できる実践的能力の向上を目標とし、次の事項を到達目標とする。

1. . . . 専門的知識を用いた見立てと介入ができる。
2. . . . 他分野の担う役割について理解できる。
3. . . . ヒューマンケアの実践に向けて連携できる。

### 【学習内容】

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	総論	ヒューマンケアとは	
2	症例の提示	1事例についてのDVDを視聴	
3	各職種による見立てと介入（薬剤師）	共通事例に対して各職種を中心とした見立てと実践を学ぶ	
4	各職種による見立てと介入（歯）	共通事例に対して各職種を中心とした見立てと実践を学ぶ	
5～9	各職種による見立てと介入（看）	共通事例に対して各職種を中心とした見立てと実践を学ぶ	
10	各職種による見立てと介入（心）	共通事例に対して各職種を中心とした見立てと実践を学ぶ	
11～13	各職種による見立てと介入（リハ）	共通事例に対して各職種を中心とした見立てと実践を学ぶ	
14	ディスカッション	多職種グループで意見交流	
15	まとめ	グループごとにプレゼンテーションをする	

### 【評価方法】

1. プレゼンテーション（50）
2. レポート（50）

### 【備考】

教科書：  
参考書：

### 【学習の準備】

### 【学位授与方針との関連】

講義名：  
ヒューマンケアの達人をめざせ！！

Cグループ    グループ名    マッカラン

#### 対象学年

- ・薬学部    6年前期
- ・歯学部    5年前期
- ・看護      4年前期
- ・リハ      4年前期
- ・心理      4年後期

## 【グループC：感想】

平成 30 年度 北海道医療大学全学 FD 研修  
「学生を中心とした教育を進めるために」  
— 多職種連携をすすめるための教育の構築 —

C グループ代表 泉 唯史

多職種連携の本来の意味は「対象者や家族の人生観や価値観に基づいて生活機能の改善や QOL の向上に向けた統合的なアプローチ」であると学長講話にて提示されました。

私たち 5 学部（来年から 6 学部） 8 学科（来年から 9 学科）で育成される医療人は、高度の知識と技術を持った医療の専門家である前に、病気や障害を負った患者個人個人の生き方を基盤とした生活機能や生活の質の向上を請け負う責任ある専門家集団でなければならないという意識が、しかし十分に備わっているとはいえません。看護福祉学部の「多職種連携論」は選択科目であるが受講した学生は非常に熱心に参加している一方、必修科目であるリハビリテーション科学部の学生の受講態度にクレームが起きたという事象は、このあたりの医療従事者たる責任の自覚と認識の差が根底にあるように思います。

今回のワークショップで議論された「シラバス」では、この科目名を「ヒューマンケアの達人をめざせ！」としました。そしてビデオによる各専門職による症例紹介に基づいて、多職種連携を通して対象者の有意義な人生をサポートするための生活機能と QOL の向上のための介入の可能性をそれぞれの専門の立場から探るというコンセプトは非常に有効な方法であるように思います。このような授業展開で専門家を目指す学生たちは、いったい自分たちは何のために医療を学び、専門を学んでいるのか、再考する最高の機会になると思います。

今回の WS が、何か正解があるわけではない課題に対して職位や職種を越えて熱心に、またなごやかに議論するという機会となったことは、非常に意義のあることだと思います。

授業科目名	多職種連携論Ⅱ	講義・演習	歯学部第4学年 薬学部第4学年 看護学部第3学年 リハビリテーション学部第3年 心理科学部第3学年  必修 単位
-------	---------	-------	----------------------------------------------------------------------------

《担当者名》：

### 【概要】

医学的な視点のみならず対象者の心理的・社会的な視点にも配慮した医療が求められる中でチーム医療は必須の手段であり、より良いサービスを実践するためには多職種との有機的な連携と協議は欠かせない。本講義では、専門職種間の有機的な連携と協業についての基礎知識や理論、連携のためのマネジメントの実際についてそれぞれの専門的な立場から考察し、多職種連携が果たす役割や機能について学ぶ。また、学部学科をこえたグループワーク演習を通じ、コミュニケーションやディスカッションの実践力を身に着ける

### 【学習目標】

医療や福祉の現場で他の専門職種と連携協業していくために、必要な知識や態度、コミュニケーション技術を身につける。

1. 多職種連携によるチーム医療について考えられるようになる
2. 他学科の学生との専門的な知識の提供及び意見交換ができるようになる
3. 症例から課題の提出、さらにケアプランの作成をできるようになる

### 【学習内容】

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1	ガイダンス	各学部教員による多職種連携についての重要性についての講義が行われる。	全教員
2-4	各学科との多職種連携	各学科から他学科との連携について講義	全教員
5-6	症例提示（説明）	脳梗塞の症例を提示し、その症例に対して説明が行われる。	全教員
7-8	各学科からの症例に対する課題	提示された症例をもとに各学科からの医療的課題が抽出される。 ※レポート課題	全教員
9-10	具体的な解決法と問題点	医療的課題をもとに、各学科より具体的な解決法を学ぶ。 また、それを拒む問題点についても洗い出す。 ※レポート課題	全教員
11-12	模擬在宅療養者会議	模擬在宅療養者会議を行い、実践的に多職種連携について学ぶ。	全教員
13	発表および資料の作成	ケアプランを作成し、発表の資料を作成する。	全教員
14	発表	各グループの発表を聞き、多職種連携について学びを深める。	全教員
15	まとめ	これまでの学習成果に対して各学科からのフィードバックが行われる。	全教員

### 【評価方法】

1. レポート（60%）
2. 発表（40%）

### 【備考】

教科書：  
参考書：

【学習の準備】

【学位授与方針との関連】

## 【グループD：感想】

平成30年度 全学FD研修

ワークショップ

「多職種連携のアドバンス教育科目をつくる」Dグループの感想

看護福祉学部 看護学科

増田悠佑

私たちのグループでは、多職種連携の科目として全学必修の「多職種連携論Ⅱ」を考えた。

感想として、まず目的を共通理解し、全学の必修とすることを決めることから開始し、次に実現可能性があるかを考えた。そして、内容の考察に入り、在宅療養における多職種の連携を一貫としたテーマとして、一事例で進めることとした。

学習内容の構成を3つとして、講義、演習、課題指導・発表とした。

メンバーが各学科の担当教員であるため、在宅療養における専門の意見が出て、講義の内容が定まった。また、講義担当の経験豊富な教員から各学科の教員が個別に講義した場合は、次から次に掛け捨てのような学習になり、学生の満足度が下がることが多いとする意見があった。各講義には他の学科の教員も参加し、意見を述べ合うことを入れ、教員間の連携が見られ、学生にとって、学習効果が高いのではないかとする結果に至った。

今回のワークショップでは、絵に描いた餅に終わるのではなく、実現できるように建設的に考えることができたのが良かった。そして、学生への多職種の連携の前に、教員の多学科の連携から取り組むことが鍵になることを押さえることができた。

授業科目名	多職種連携演習・多職種連携実践	講義・演習	看護福祉・リハビリテーション 心理・臨床検査 第4学年（前期） 薬・歯学 第5学年（後期） 15単位（夏休み時期に集中講義） 必修めざしてパイロット版からスタート
-------	-----------------	-------	-----------------------------------------------------------------------------------------------

《担当者名》：各学部から数名ずつプロジェクトメンバーを中心に運営し、授業・演習では、各学部から6名程度の協力者を得て最終的に科目担当者とする。

### 【概要】

各専門領域における既習の知識や習得した技術・コミュニケーション能力、および多職種連携科目で学習した専門性をふまえた役割や機能を活かし、より臨床的な多職種連携場面における実践力を身につけるために、事例を用いたグループワーク演習により体験的に学ぶ。

### 【学習目標】

1. 自分が属する専門領域以外の職種についての理解を深め、活用方法について説明できる。
2. 多職種の基本原理（チーム制、リーダーシップ、状況モニター、相互支援、コミュニケーション）に基づき、他学部学生と事例についてディスカッションを行うことができる。

### 【学習内容】

回	テーマ	授業内容および学習課題	担当者
1-2	オリエンテーション	講義・演習および学習課題について 演習グループ作り、自己紹介 事例1配布、課題抽出	科目担当者
3-4	多職種連携演習Ⅰ	事例1：医療施設における多職種連携の事例 （例：交通外傷による救急搬送後の治療および転院調整について） 事例紹介とディスカッションの目的の理解 グループワーク	科目担当者
5	多職種連携演習Ⅰ	事例1についての各グループの報告と教員からのフィードバック 事例2配布、課題抽出	科目担当者
6-8	多職種連携演習Ⅱ	事例2：在宅医療における多職種連携の事例 （例：在宅療養中の終末期がん患者の在宅医療調整） 事例紹介とディスカッションの目的の理解 グループワーク	科目担当者
9	多職種連携演習Ⅱ	事例1についての各グループの報告と教員からのフィードバック 事例3のオリエンテーション	科目担当者
10 ～ 13	多職種連携演習Ⅲ	事例3：多職種連携が必要となる事例の作成と連携内容についてのグループワーク 事例のシチュエーションの選定と、ディスカッションの目的の設定 グループワーク	科目担当者
14	多職種連携演習Ⅲ	事例3についての各グループの報告と教員からのフィードバック	科目担当者
15	全体のまとめ	演習全体のまとめ	科目担当者

### 【評価方法】

1. グループワークにおける積極的な取り組み（教員評価） 50%
2. リフレクションシート 20%
3. 課題レポート 30%

**【備 考】**

教科書： なし、資料を配布する。

参考書： 適宜提示する。

**【学習の準備】**

各グループでディスカッションに必要な事例に関する学習準備は、協力しながら行うこと。

**【学位授与方針との関連】**

DP 3, 2



## 【グループE：感想】

2018年8月3日 全学FD研修 グループE感想

幸村 近

グループ名： サバ (Ça va)

参加者：

大友 芳恵 先生  
豊下 祥二 先生  
福田 真二 先生  
野口 由香里 先生  
高木 由希 先生  
幸村 近

役割分担：

書記 高木 由希 先生  
発表 豊下 祥二 先生  
司会 幸村

グループ名は魚の鯖ではなく、フランス語の挨拶の言葉です。アイスブレイキングで出された質問事項の中でフランス関連のものが複数あったことから選ばれました。

多職種連携教育のアドバンス編シラバスの作成という課題は大変難しいものでした。15コマというコマ数設定、開講時期（学部学科による臨床実習の進行度合いの違い）、実施場所（臨床現場に行くのかどうか）などをクリアするのに難儀しましたが、学部によって学年を変えることと、夏休み期間の集中講義の形態をとることに行き着きました。科目の重要性を鑑み全学部合同の必修科目としたため、施設見学は実施困難と考えました。

内容については、医療施設と在宅という複数の事例を題材として提示し、ディスカッションを行う形式としました。さらに各専門領域がどのように関わっていけるか積極的に問題提起できるようになるため、多職種連携が必要とされる事例を作成して連携内容について考えてもらうことにしました。

他グループからも事例を基にした学習内容が多く発表されましたが、特にDグループの一つの症例について発症・入院診療から在宅へ至る経過を詳しく学んでいくやり方も面白いアプローチだと思いました。

多職種連携教育は学生からも充実を望む声があると聞きましたので、是非このアドバンス科目を実現させたいものです。



# F D 委員感想



午前中は、学長の講話に引き続き各学部における多職種連携教育の取り組みについて話題提供がなされた。学部によって積極的に行っているところ、少しずつ始めたところ、そしてまだ模索しているところなどがあり、あらためて各学部での取り組みを知ることができたことは有意義であった。個人的には看護学科からの取り組みを聞いたかった。午後からは「多職種連携のアドバンス教育科目をつくる」というテーマでのワークショップ（WS）であったが、今回は午前中の講演が午後からの WS でのプロダクトを作成する際に非常に参考になったと思う。そういう意味では全日日程での FD 研修としてまとまりのあるものであったと思う。5 グループに分かれて 1 グループ 6 から 7 名の小グループ討議であったが、例年グループワークの時間が短いなどの理由でプロダクトが不完全なところもあるが、今回はすべてのグループのプロダクトに関して完成度の高いものになったと思う。多職種連携のアドバンス教育としてシラバスを作成したが、微調整を行えばすぐにでも実行できるようなものもあったように感じた。

他大学と比較して、多職種連携教育を行うことができることが本学の長所であることの認識を参加者も改めて感じていただけたのではないかと思う。

（薬学部 遠藤 泰）

多職種の医療人の養成を行っている本学では、昨年度より全学共通科目として、「多職種連携」をテーマにした演習を開講している。本学として初めての取り組みであったため、その成果が大いに期待されたが、同時に実際に授業を行うにあたっての問題点も浮かび上がってきたため、今後、本科目をどのように展開させてゆくかが重要な課題である。本日の FD 研修では、現行の演習を多職種連携の「入門編」と位置づけ、その続編としてのアドバンスコースを来年度以降に実施するために、シラバスを作成するという内容であった。参加者の方は、私も含めて、当初は何を目標として作業を行えばよいのか分からない状態であったが、討論を重ねるにつれて理解が深まり、作業を進めることができた。何よりも、異なる学部・職種の人でグループを構成して作業したため、紋切り型の発想に留まらず、討論によって思いもよらない発想が出てきたのが印象的であった。

来年度以降、「多職種連携アドバンスコース」がどのように展開されるか注目すると共に、今後の FD 研修の発展に大いに期待したい。

（薬学部 泉 剛）

とても印象的だったのは、午前中の全教職員を対象とした「全学 FD セミナー」への関心の高さであった。メーリングリストでの告知が開催の約 1 週間前であったにも関わらず、会場の C31 講義室がほぼ埋めつくされた。このことは、今回の FD 研修のテーマが医療系総

合大学として本学をブランディングしていく上で最重要課題の一つであると多くの教職員が共通認識を持っているためであると推察される。

また、午後のグループワークにおいても、各学部各学科での現行の多職種連携教育プログラムに関する情報を共有した上で、より実践的なアドバンス教育科目を作成することについて活発な意見交換が行われ、実用的かつ具体的なプロダクトが多く提案された。

今後、各学部各学科の時間割調整や適切な開講時期の設定など検討課題はまだ残されているものの、在校生だけでなく、本学への進学を考えている学生にとっても魅力的な教育科目になることが大いに期待できると強く感じた。

(歯学部 會田 英紀)

8月3日に行われました平成30年度の全学FD研修に参加いたしました。午前中の全体報告に続いて、午後から「多職種連携のアドバンス教育科目をつくる」というテーマでワークショップが行われ、ファシリテーターとしてAグループに参加させていただきました。「多職種連携」は本学の教育の特徴を示す最も大事な柱の一つですが、1年生で全学的な講義がなされた後、個別では行われているものの、高学年になってから1年生の時のような全学を横断したアドバンスの講義が行われていません。そこでアドバンスコースを早急に構築しなければならないと言う趣旨で今回のテーマが設定されました。これは多くの学生からも要望されている点でもありました。

そこで、私は歯学部のFD委員の一人として、歯学部で多職種連携に関わっているベストメンバーを選択し参加を依頼させていただき、かなり無理をして参加させていただきました。参加をご承諾、参加いただいた先生方には感謝申し上げます。ワークショップは5つのグループに分かれ、各々焦点を絞った形で活発な議論がなされ、実際のシラバス作成まで、精力的に議論がなされました。皆様の熱意が感じられたワークショップでありました。これを利用すればすぐにでもアドバンスコースが出来そうでした。しかし、ここからがなかなか進みません。FD研修会の負の側面です。折角、時間と労力を費やしてまとめたプロダクトですが、FD研修会のプロダクトが日の目を見たことはかつてありません。研修をやったという事実を得るためにやっていると思われるでも仕方ありません。このような事が続けられると参加する側もそのつもりになります。これは大きな損失です。これはもちろん我々FD委員の責任が最も大きいのです。研修会が終わった後の迅速な実現化を全学FD委員会が行って行かなければなりません。

これからのFD研修が大学のこれからの未来を構築する研修の一つとなるように、意識改革が迫られています。

(歯学部 荒川 俊哉)

### 1. 学長講話・話題提供について

学長講話は、“多職種連携教育について大学としてめざすところ”はわからなかった。話題提供は、同じ科目であっても話題提供者によってトーンがバラバラだったことが印象的だった。大友教授の話題提供の内容が、ワークショップにも役立った。

### 2. ワークショップについて

アイスブレイクの効果か、冒頭から活発なワークショップが展開されていた。しかし、“多職種連携教育について大学としてめざすところ”が明らかでないため、シラバスをつくることが目的となってしまう、方法論（学内なのか、学外なのか・・・）と15回のコマをどう埋めるか、といった議論に終始してしまった印象があった。更に「実現可能なシラバス」を強調したことも、方法論の検討に時間を費やす結果となったように感じた。

この多職種連携科目（アドバンス編）が、どこに向かうのか、卒業までにどういった力をつけるのがよいのか、そのためにどういった教育をしたらよいのか、といった議論はほとんど出来なかった。こういった議論が出来ると、個人的には満足度が高かったと思う。

### 3. その他

ワークショップの時のグループ間のテーブル配置が近すぎて、隣のグループの声が耳に入って、自分のグループの話が聞きとりにくかった。（声が小さい人もいたので）

また、全学FD委員の「タスクフォース」役割が難しかった。グループ討議の進行を促そうとすると入り込み過ぎてしまい、逆にタイムキープは司会の先生が随時してくださり、参加者も自立していたので不要だった。FD委員の参加は、春夏を分担制にする、逆にGWメンバーとしてグループに配置するなど、何か工夫が必要かと感じた。

（看護福祉学部 福井 純子）

多職種連携を謳いながらも、教員自体が他学部・他学科間での交流が少ないのが実状と思われる。そのような中、共通の課題に、他学部・他学科の複数の教員がチームとなって取り組むこと自体に意味があったと感じる。

午前の「各学部における多職種連携教育の取り組み」では、参加者の中からは「知らなかった」「初めて聞いた」という声も聞こえてきた。私自身、FD委員とは言え本学に赴任して2年足らずの状態だったので、同様の感想を抱いた。

午後のワークショップでは、私が入ったグループのメンバーは各自積極的に議論に参加しており、タスクフォースとしての介入に困難を感じる場面はなかった。シラバス作成という課題については「現実的に無理」という声があがっていた。授業の対象者を誰にするか、何コマにするかといった大枠が提示してあったほうが取り組みやすいようではあったが、結局は「実際にできるかどうかはともかく、この場合は割り切って考えるしかない」とのスタンスで話し合いが進められた。できあがったシラバスに関しては各メンバーとも「実現は難しい」と受け止めていたようである。しかし、成果物がどうであれ、冒頭に記したようなプ

プロセスが展開されており、そのこと自体が有益だったと思う。

(心理科学部 野田 昌道)

今年度のFD研修テーマは、「多職種連携をすすめるための教育の構築」であった。午前  
に実施された各学部における多職種連携教育の取り組みは、各学部が様々な取り組みをし  
ている現状が理解でき、とても参考になる内容であった。

ワークショップでは、「多職種連携のアドバンス教育科目をつくる」というテーマに対し  
て、各グループとも活発な議論が展開されていた。各グループとも全学部を対象とした必修  
のアドバンス科目を作成しようとしたため、現実的な展開において苦労していた感があっ  
た。今回のワークショップを基礎とし、来年度は多職種連携教育として実施すべき課題を具  
体的に抽出して議論を進めていくことで、より現実的でニーズに合ったアドバンス教育科  
目が作成されるのではと感じた。

ワークショップ全体としては、参加された先生全員が多職種連携教育の現状と今後の課  
題を考える機会が得られ、非常に有意義な研修が行われたと感じている。

(大学教育開発センター 山口 明彦)

今回の研修のテーマである多職種連携に関しては、私はあまり関係のないものであった  
ので、議論を聞いてフォローしていくことで精一杯であった。このため、議論のファシリテ  
ーターとしての役目をあまり果たせなかったように感じる。

我々のグループは木下先生が積極的に議論を進めてくださったため、なんとかプロダク  
トと作成できたのは非常に助かった。全般的には、午前中の学長の講和は個人的には勉強に  
なった。特に医学と医療の違いという話が印象に残っている。

しかしながら、多職種連携のテーマで学長の講和はもう少し短くても良かったかもしれ  
ないと感じている。

(大学教育開発センター 長谷川 敦司)

FD委員としては初めて研修に参加しましたが、実はタスクフォースとして、またワー  
クショップ全体討論の進行として、役割の実態がわかっていないことに気づき、その場で  
山口先生や志渡先生に教えていただき、多大に助けていただきながら、なんとか務めると  
いった状態でした。反省しきりですが、深く感謝いたします。

ワークショップの課題であるアドバンス教育科目は、昨年の初年次教育と比べても関わ  
る要素が格段に多く、それぞれの立場からの意見が多種多様に出され、短時間でまとめる  
のは相当難しかったと思います。各グループ懸命に仕上げてくださいましたが、その中で



SCP 石黒君の発言は印象的でした。自分の履修した多職種連携論は本当にためになった、とても役に立つことを学べたので、ぜひみんなに受けてほしい、という彼のまっすぐな言葉は、学生が学びたいこと、必要なことを提供するために大学があること、そのためのFDの意義を、再認識させてくれるものだったと思います。

(大学教育開発センター 鎌田 禎子)

昨年度の研修でも「多職種連携」をキーワードとした内容を取り上げており、今年度も同様のキーワードがFD委員会にて採択されたことから、昨今の教育における重要性と実現に向けての早急性を改めて痛感しました。

今回の研修では、より具体的で実現可能なシラバス作成を行いました。全学科約800名の学生、特に臨床実習や国家試験対策等といった複雑な動きをしている学生を対象に検討することの難しさを感じました。しかし、本学のホームページでも多職種連携と謳っているように、学生時代から多職種で患者を見守り支援するという視点を養うことは非常に重要であります。たとえそれが紙上事例での検討であったとしても、互いに役割を意識し合い、意見交換をしたという経験はいずれ社会に出た際に一つの経験値として自信に繋がりますので、ぜひ実現化に向けて本格的に検討を継続して欲しいと強く思います。

(歯学部附属歯科衛生士専門学校 杉原 佳奈)



アンケート



平成30年度 北海道医療大学 全学FD研修 参加者アンケート

今回のFD研修について、次の項目にお答えください。

1. 今回のFD研修の日程と時間配分は適当であったか、ご意見をお書きください。

●日程について \_\_\_\_\_

●時間配分について \_\_\_\_\_

2. ワークショップについてご意見をお書きください。

---

---

3. 今回のFD研修でよかった点、悪かった点をお書きください。

---

---

4. 今後のFD研修に向けて、取り上げるべきテーマなどご提案をお書きください。

---

---

ご協力ありがとうございました。

## 平成30年度 全学FD研修（テーマ編） 実施結果

- 日 時：平成30年8月3日（金） 9：50～16：45  
○会 場：本学 当別キャンパス 中央講義棟 C31 講義室／C109 演習室  
○参加者数：薬学部 5、歯学部 6、看護福祉学部 7、心理科学部 2、  
リハビリテーション科学部 6、新学部設置準備室 2、学生 1、事務 2、  
FD委員 11、事務担当 2 合計 48名  
\*上記のほか同日午前中の全体会（オープン開催）：聴講者 74名  
○学内講師：浅香学長、浜上薬学部准教授、長澤歯学部教授、大友看護福祉学部教授、  
安部心理科学部教授、吉田リハビリテーション科学部教授

### 【アンケート結果】

\*参加者（FD委員を除く）：31名 ・回答者：31名 ・回収率：100%

1. 今回のFD研修の日程と時間配分は適当であったか、ご意見をお書きください。

#### ●日程について

「良い」「適切」・・・22

##### <改善要望・意見>

- ・もっと早く知らせてほしい。
- ・依頼が少し急のような気がします。（2件）
- ・8月末の成績評価等終了後の日程だとありがたかった。（2件）
- ・成績単票の提出期限の直前できつかった。
- ・この時期は実習や関連行事が多く、出席が難しいです。
- ・オープンキャンパスの前日で忙しいのでやめてもらいたい。（2件）

「無記入」・・・0

#### ●時間配分について

「良い」「適切」・・・18

- ・午後のWSはぴったりだった。

##### <改善要望・意見>

- ・少し長い。（4件）
- ・もう少し作業時間が欲しい。（2件）
- ・ディスカッションの時間が足りなかった。（2件）
- ・話し合いの時間がもう少し必要。もう少しテーマを絞っていった方が良かったと思う。
- ・グループワークの時間が短かったので、最後はまとまらなかった。
- ・シラバスを作るのなら、時間が足りない。内容から考えると、時間は不足と考える。
- ・可能な限り、午前または午後のみにしていただきたい。
- ・発表時間を1グループ20分程設ければ、より有意義な議論が交わせると思う。2.

## 2.ワークショップについてご意見をお書きください。

### <肯定的意見・感想等>

- ・発表時間を1グループ20分程設ければより有意義な議論が交わせると思う。よく議論でただけに、発表時間が短いのはもったいない。
- ・共に何かをやるのは、講話よりも良い。
- ・全体的に内容や目的がハッキリしていると良かったと思います。
- ・大学全体で取り組むべきテーマであり、大変有意義なものでした。
- ・ワークショップで作られた成果物は、大学全体で共有したらどうか？
- ・他学部の教員と交流できて楽しく、学びも多かった。
- ・他学部の先生の考えが聞けて勉強になった。実現できればいい。
- ・サブテーマは大変良かった。各学部（各学科）の教員が集まり、大変勉強になった。
- ・意見交換ができて、とても良い学習ができた。
- ・有意義でした。おもしろかったです。
- ・内容的にすごく良かった。
- ・多職種（学部間）が混在して統一的なテーマでディスカッションできるのは、非常に有意義であった。
- ・初対面の方達とスムーズに進められるか心配でしたが、課題が明確だったので順調に進みました。
- ・実際に使用するシラバスの作成であり、目的が明確であり、作業がしやすかった。
- ・「多職種連携」が医療大の学習の目玉となるよう、実質化につなげるための様々な意見が今後の取り組みにどのように反映されるかを多いに期待したい。
- ・良い取り組みだと思います。（2件）
- ・シラバスの作成の場合、事務職員の知見は重要であった。事務からの参加は増やした方が良い。
- ・大学内で他学部の先生と意見交換ができることは、よい機会だと感じた。（2件）
- ・多職種の意見や状況を聞きながら、シラバスの作成について話し合い、とても興味深かった。実際に全学での連携に関する授業ができたならよいと思った。
- ・非常に難しい課題でしたが、それなりに頭をひねって作り出したので、是非実現させたいものです。
- ・交流の機会としてはよい。

### <改善要望・意見>

- ・テーマについて、ワークショップをする場合、ある程度共通の課題のあるメンバーで企画してほしい。
- ・授業の計画を考えるには、時間がたりなかった。
- ・テーマが広くて議論するのが難しかった。現状の確認をするだけでも時間が多く必要。
- ・担当者を事前に決めておいた方がスムーズに進む気がする。
- ・実現が難しかった。
- ・アイスブレーキングが少し長かった。グループワークの時間が短かった。

「無記入」・・・2

3. 今回のFD研修でよかった点、悪かった点をお書きください。

＜肯定的意見・感想等＞

- ・他学部の先生と話せたこと。(7件)
- ・学長講話は、もっと聴きたいと思いました。(3件)
- ・他学部の現状を聞くことができて良かった。(3件)
- ・自分自身もからんでいる科目内容だったのでとても良かった。全学部対象として欲しいが、現実的に可能かどうか検討が必要と思われた。
- ・多職種間の話し合いというより全学としての科目を作成したのは、楽しかったです。
- ・SCPの学生が同じグループ内にいたので、学生の意見が聞けて良かった。
- ・AMのプレゼンテーションで、今回のテーマに関する現状が良く分かった。
- ・皆、熱心で良かった。
- ・シラバスの作成に至る前に、多職種連携教育の方向性を皆で議論することが大事だと思った。
- ・多職種について知ることができ、教育内容について考える機会を得られて学びになった。
- ・毎回テーマが変わるのであれば良い。
- ・ファシリテーターの存在が大きい。

＜改善要望・意見＞

- ・時間配分。(3件)
- ・議論が深まって良かったが、最後は何とかまとめねばならず、内容が浅くなってしまった。
- ・事前にスライドなどの配布資料が欲しい。
- ・シラバス作りはきつかったです。
- ・実現可能かで考えるとむずかしい内容だと思います。
- ・成果物のまとめに時間を要した。その点、少し消化不良ぎみであった。
- ・概要、目標、時間割ごとに時間を区切った方が良かった。
- ・内容をまとめきれない点は悪かった。
- ・今回のテーマだと、参加者を臨床系の教員に限ってもよかったように思う。

4. 今後のFD研修に向けて、取り上げるべきテーマなどご提案をお書きください。

- ・当別町民との連携へのアプローチ法と内容(小・中・高や高齢者との連携)。
- ・シミュレーション教育について。
- ・入学者の確保について。
- ・国際交流。(2件)
- ・アクティブラーニング、ルーブリック評価、ユニバーサルデザインによる教育方法。
- ・大学経営について考える。
- ・「他大学に負けない大学をつくるために」
- ・今回の発表は全学部を対象とした多職種連携のシラバスの発表のみであったが、関連の薄い学部、学科を対象としたシラバス作成を考えた方が良いかもしれない。
- ・SCPの参加、発表はとても新鮮でした。今後も続けて欲しいです。
- ・次年度もこのテーマで継続してはどうか。
- ・退学者(drop-out)を減らす方法。



ア ル バ ム



# アルバム



開会式



学長講話

「北海道医療大学がめざす多職種連携教育について」



話題提供

「各学部における多職種連携教育の取り組み」



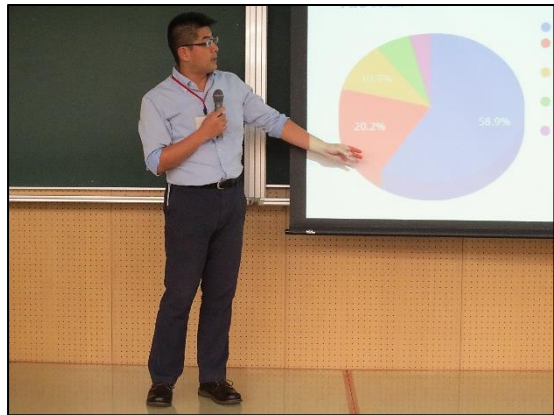
薬学部 浜上 尚也 准教授



歯学部 長澤 敏行 教授



看護福祉学部 大友 芳恵 教授



心理科学部 安部 博史 教授



リハビリテーション科学部 吉田 晋 教授



質疑応答

## ワークショップ① アイスブレイキング（グループづくり）



Bグループ



Eグループ

## ワークショップ② ワークショップのすすめ方



Aグループ



Cグループ



Dグループ

グループ発表・質疑応答・全体討論



## 閉会式





学務部 教務企画課 〒061-0293 北海道石狩郡当別町金沢 1757

TEL:0133-23-1211/FAX:0133-23-1669

URL:<http://www.hoku-iryu-u.ac.jp/>